

せんさく可被仰付哉之事。

横目衆之奥書之案

右今度指上も共ニ申聞條々よて、此辻を以於先様組のの共の手前横目として堅撰作可仕。自然下々ニ其れまを以て手廻人役またりニなり。此事共於有之を、別番横目れ者越度ニ可申付。然上の先乃方よて各に申聞、此定よては條、自然相違有之儀を、歸國之上よて申出をの半、雙方相窮於不紛儀を、一廉曲事ニ可被申付は條、其たしなを仕以て沙汰可仕。以來爲届之申聞者也。

慶長拾七
七月廿四日 御印判

被遣よこ目衆名書

一同慶長十年九月公ヨリ江戸御普請ノ義ニ付、福原廣俊へ御書ヲ賜フ。此御文躰前ニ多ケレハ爰ニ略ス。

考證 福原家証文

同日慶長十七年十月朔日。今度江戸御普請ニ付、水夫百石四人役指上サレ。併シ此度計リ右ノ定ト見ユ、來ル十五日出船申付へクトノ衰、且ツ一組ヨリ自身役ノ

者一名指上スヘシトノ衰、尤自身役ノ儀ハ其身給地罷上ルヘシ、召レタル者ハ三人分遣スヘシ、明年ハ組頭ノ者共指上スヘシ、且ツ早船五艘是ハ此度除置タリ、又伊豆迄着スヘキ儀、無油斷様ニ心掛クヘシ、泊々ニ於テ陸地へ一切水主ヲ上ケマシキ、或ハ他國ノ船掛リ合タル時、口論無之様是又申付ヘシ、船道具ノ儀無念ニ仕損シナハ辨へ置ヘシ、自然大風其外無紛儀ナレハ自身罷リ越タル者上乘ト共ニ申談シ、堅固ニ相窮置ヘシ、又先方ニ於テ石積儀ハ、其節伊豆ニ罷居タル物頭三人ノ者共ノ意ニ任セ、油斷スヘカラス、石積タル荷足ハ前々ヨリ定ラレシ如ク、舷ヨリ一尺五寸成ヘシ、伊豆并江戸川口ニハ必横目ノ者付置ル、ニ付、ヨキ日和ヲ見合セ油斷スヘカラス、若シ乗ハツサハ相窮過料申付ラルヘク、ヨシ江戸へ申遣サレタリ。是等ノ御書多クハ村上勝太郎、同八郎、沓屋志摩守、粟屋太郎、右衛門、乃美兵部、亟へ當ル。尤一條ハ粟屋太郎、右衛門計へ當ル御書ナリ。○下

毛利氏四代實錄考證論斷

慶長十七年伊豆ノ國御仕置石御手傳人數ヲ差出サル。

廣家公ヨリ廣正公就頼公へ進セラル御書物

市街恢弘時代

按スルニ、元和三年卯月廿四日、廣家公ヨリ廣正公就頼公へ進セラル、御書物ニ、慶長十七年伊豆ニ御仕置石被仰付候節、一日モ無不參御弓衆丹比傳助香川多兵衛南方治右衛門尉、十川與左衛門尉、鈴川市兵衛尉、松島善右衛門尉、朝枝源左衛門尉、福頼二郎右衛門尉、森脇喜右衛門尉、同新兵衛尉、同羽左衛門尉、石川佐ノ介、桑川久左衛門尉トアリ。

別本吉川家譜○大日本史料收。

細川氏○肥後國熊本城主。

慶長十七壬子年、台徳院様御代、江戸御城石垣御普請之御手傳。細川三齋此趣、越中守方より書出申也。御手傳覺書

今年○慶長十七年。江戸之堀川御堀直し、方々之橋床、石垣ニ被仰付、自諸國役人江戸にくたり也。豊前よりの惣頭ハ、長岡内膳、御普請奉行ハ、蘆田與兵衛、神西與三右衛門、其外侍十人也。かり也。極月末、忠利君○細川。御參府被成候。一書、是年諸大名ニ被仰付、新ニ江城の堀をり、石垣をきつかれ也。忠興君○細川。も、此役を御勤被成と云々。細川家記

鍋島氏○肥前國佐賀城主。

慶長十七年壬子、公○鍋島勝茂。三十三歳、千石夫御普請ニ付テ、去年御登、今年爲御休息御暇出御下國、直茂公ハ御隠居ニテ、多布施ニ御在館ナリ。

鍋島勝茂譜考補○大日本史料收。

伊東氏○日向國飫肥城主。

慶長十七年子正月より、伊豆國宇佐美ニ御石取、同年八月迄相勤之。

伊東修理大夫○祐慶。

御手傳覺書

祐慶○伊東。

十七年○慶長。本城造作のとき、伊豆國宇佐美より割石運送のとをうけたまり、四月七日台徳院殿より御書をたまふ。寛政重修諸家譜

山内氏○土佐國高知城主。

一、同○慶長。十七年壬子、江戸御城普請、此方○山内忠義。御人數被遣。

年譜附録

松平氏○久松○下野國山川城主。

初代 松平○隱岐守定勝三男。越中守源定綱 幼名龜松後改三郎四郎

一、慶長十七年壬子江戸御城堀池地形御普請十組之御人數ヲ以被仰付ル節、一組之頭相勤申ル。

寛政呈譜

譜牒餘録・寛政重修諸家譜ノ類皆之ニ同ジ。

五、成績 本工事ハ、江戸港築造工事中ノ重要ナル者ニシテ、往古江戸繪圖ニ於テ其一斑ヲ見ルニ足ル。今ノ京橋川筋ニ八丁堀舟入ト記ス者ヲ首トシ、三十間堀及楓川等ニ及ヒタルカ如シ。紀國橋際ニ紀伊家藏屋敷有リ、其東ニ尾張家藏屋敷有ル如キ、何レモ新港ヲ利用シタル者ト思ハル。皇城篇港灣篇ヲ參照スルヲ要ス。

同長。○慶十七年壬子二月、中國西國諸侯ニ命シ、江戸河渠ヲ疏通シテ船路ノ便ヲ開カシム。蓋シ南八町堀、三十間堀等ヲ開鑿スル是時ニ在リ。

東京地理沿革考

上乙第三七四號ノ二
回 答 案

史第一九二號御照會○明治卅九年七月廿八日。ノ京橋區内堀割工事箇所ヨリ發掘セル石ノ質、大サ等左記ノ通り取調、及回答候也

東京市參事會
東京市長尾崎行雄

明治卅九年八月六日
東京帝國大學文科大學史料編纂係事務主任
史料編纂官文學博士三上參次宛

一、堀割工事箇所 京橋區水谷町ヨリ銀座一丁目ヲ經テ三十間堀川ニ至ル間。

一、發掘シタル石ノ位置 京橋區水谷町別紙圖面記載箇所。

一、發見シタル月日 六月中旬。

一、石ノ位置ハ地下幾尺位 約十五尺。

一、石ノ排列方向 別紙圖面所載ノ通り。

一、石ノ數 七個。

一、石ノ重サ 約壹千貫ヨリ二千四百貫。

一、石ノ產地 明確ナラサルモ近縣產出ノモノニ非ラザルカ如シ。

一、石ノ大サ 大ハ長七尺厚三尺幅六尺ヨリ、小ハ長五尺幅四尺厚二尺五寸

位マテ。

一、石ノ質 相劬産堅石ニ類似ス。

報告書

明治卅九年一月以降、東京市京橋區水谷町地先ヨリ銀座街頭ニ沿ヒ卅間堀川ヲ整理センカ爲メ、目下開鑿中ノ所、本線(五十七分)ノ中央ヨリ稍ヤ南方ニ、零点下二尺(即地表ヨリ下十五尺)ノ所ニ於テ、五月中旬頃ヨリ古船材料數片ヲ發掘シ、就中其帆檣ノ如キハ、杉ノ赤身材ニ、長八間五分八厘、元口一尺角ニ、末口五寸角ノモノ壹本露出シタルハ、之レ卑職ノ少シク異様ニ感スル所ノ第一義也。特ニ其檣ノ元口ヨリ立上リ五間七分八厘ノ一点ヨリ兩斷セラレ、併モ其截口ノ整然トシ亂レス兩々相重ナリテ葬ラレアルハ、是又異様ニ感スル所ノ第二義也。抑モ此船材ノ如何ニシテ此雄區ナル水谷町ノ如キ大厦高樓ノ櫛比セル地域、併モ其零點下二尺(地表ヨリ十五尺)ト云フ最モ深キ地層ノ下ニ於テ葬ラレタル歟ヲ推考スルニ、地理ノ沿革上ヨリスルモ決シテ近代ノモノニ非サルヤ炳トシ明カ也。彼ノ太田道灌カ初メテ江戸ニ築城シタルハ、遠ク長祿二年即紀元二千百十八年ノ春ナリ。降テ大永四年即紀元二千百八十四年ノ春北條氏綱江戸城ヲ取ル。此頃群雄四方ニ割據シ、戰雲常ニ消散スルコト莫カリキ。后氏綱各所ニ轉戰シテ家運遂ニ亡ヒタリ。天正十八年即紀元二千二百五十年八月ニ至リ、秀吉大ヒニ臣下ノ功勞ヲ頌シ、徳川家

康ノ拔群ナルヲ嘉シ、北條氏ノ故地關八州ヲ與ヘタリ。於是家康江戸城ニ入ル。是ヨリ家康順境ノ時代トナリシヲ以テ、文祿ヨリ慶長ニ至ル約十二三年ノ間、頻ニ城壁ヲ堅フシ、全十一年ヨリ全十七年ノ如キ宮城及江戸城ヲシテ大々的ニ擴張シ、此ニ平和ノ戰備ハ完ク形造ラレタリキ。其船舶等ノ江戸ニ出入スルモノ又頻繁ナリシハ、之ヲ想像スルニ餘リアリ。或ハ其當時暴風等ノ爲メ難破シタルモノニアラサルナキ歟。

今假ニ其巨大ナル帆檣(此巨檣ヲ搭載スル船舶ハ少クモ千石積以上ノモノ)カ咄嗟ノ間即危機一髪ノ時ニ會シ截斷セラレタルモノトセハ、其截口ノ何如ニ高クシテ且餘リニ巧調ニ過キタルノ感ナキ能ハス。特ニ一考ニ値ス可キハ、其破片ニ燒痕ノ點々存在スルモノ是ナリ。要スルニ海上怒濤ニ翻弄セラレ、其際火災ヲ起シ、適マ岸角ニ觸レ沈没シタルモノニアラサルナキ歟。聊カ此ニ卑見ノ一二ヲ披擲シ、以テ識者ノ明鑑ヲ俟ツノ外莫キ也。尙其船具ノ存在セル西南數歩ニ、一ノ鬮體ヲ發掘セリ。一瞥男性ニシテ年齢四十前後ナル可ク、是又一考ニ値ス可キモノナル歟。

以上埋没ノ個所及周圍ノ狀況ヨリ推考スルニ、無慮三百年以上ヲ經過シタ

ルモノナラン。尙考古學上大ヒニ値ス可キハ、右ノ船具ヲ發掘シタル北方約參百間許ニシテ、巨大ナル不規則ノ長方形ノ古石七個ヲ發見シタル是ナリ。（大ニ千四百貫目、小ハ千貫目前後アリ）別紙圖面ノ如ク點々東西ニ延ヒ、慥ニ人工ヲ以テ配列セラレタルモノナリ。惟フニ此處ハ元海陸ノ境界線ニシテ、其海岸ノ防護的ニ配列シタルモノト覺敷ク、從テ今ノ新湊町、新富町、木挽町、築地、南小田原町、及新佃、月嶋附近ハ、一帶海ナル可ク、大船巨舶ノ常ニ出入シ能フ可シハ、難破等自然免ル可ラサルノ理勢ナリシヲ察知スルニ足レリ。特ニ右古石ハ七個共全質ニシテ、近縣ヨリ產出シタルモノニアラス。或ハ其當時德川カ方乗ノ大權ヲ振ヒ、普ク天下ノ諸侯ニ令シ、其築城ノ要ヲ説ク天下靡然トシ之ニ應セザルモノナシ、右ハ其自國ノ特產名石ヲ以テ之レカ大命ニ貢獻シタル一部分ニアラサル莫キ歟ト思料スルモ、亦強チ附會ノ言ニハ非サル可シ。前上卑職ノ臆説ニ過キスト雖モ、歷史上幾分ノ値ス可キモノト認メ、此ニ報告スルモノトス。

明治卅九年六月廿八日

土木課長土方篠三郎殿

技手 吉田信近

東京市役所文書

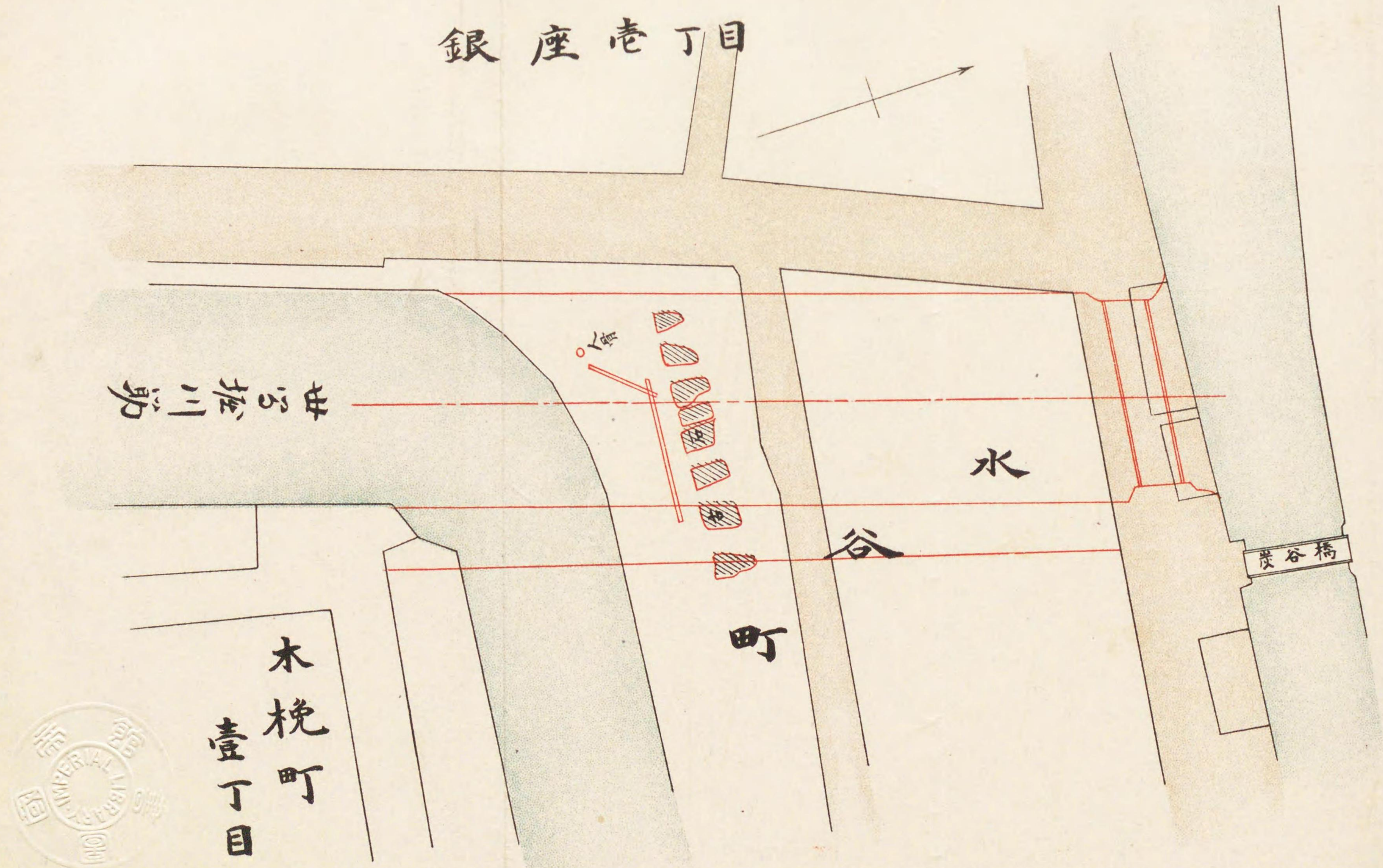
銀

三河

木挽町

壹丁目





等自然免ル可ラサルノ理勢ナリシヲ察知スルニ足レリ。特ニ右古石ハ七個
 共全質ニシテ、近縣ヨリ産出シタルモノニアラス。或ハ其當時徳川カ万乗ノ大
 權ヲ振ヒ、普ク天下ノ諸侯ニ命シ、其築城ノ要ヲ説ク天下靡然トメ之ニ應セ
 ザルモノナシ、右ハ其自國ノ特産名石ヲ以テ之レカ大命ニ貢献シタル一部
 分ニアラサル莫キ歟ト思料スルモ、亦強チ附會ノ言ニハ非サル可シ。
 前上卑職ノ臆説ニ過キスト雖、歴史上幾分ノ値ス可キモノト認め、此ニ報
 告スルモノトス。

明治卅九年六月廿八日

土木課長土方篠三郎殿

技手 吉田 信 近

東京市役所文書

増上寺領給

與事蹟

後水尾天皇慶長十七年壬子○紀元二五月三日丁酉正○丁酉、三増上寺○市内芝區。ニ寺領千石ヲ給ス。巢鴨町石川區。小其中ニ在リ。○御當家令條。

増上寺領給與 御當家令條ニ據ル。

武藏國橘樹郡池邊村之内三百石、師岡村内貳百石、巢鴨村百三十壹石、中里村三百五拾九石、合千石、全可有收納、并境内山林竹木爲守護不入、令寄附上也、永代不可有相違者也。

慶長十七年五月三日 家康公御判

普光觀智國師

〔參考〕文政町方書上ニ、

巢鴨町

増上寺安國殿料方丈領

一、反別拾壹町九反九畝拾七步 全町地面

一、巢鴨村高百五石四斗四升六合之内に相籠り、町方分相分以義出來兼申以。

天正十九年當寺領ニ相成、其後延享二丑年町方御支配ニ相成申以。

巢鴨真性寺門前

市街恢弘時代

一、高百五石四斗四升六合之内に相籠り、門前分相分ハ義出來兼申ハ。天正十九年當寺領ニ相成、其後年曆不知、眞性寺門前町屋ニ相成申ハ由、年曆相知不申ハ。

巢鴨辻町

増上寺安國殿料、方丈領、

一、反別壹町貳反七畝貳拾步

一、高百五石四斗四升六合之内ニ相籠り、町方分相分ハ義出來兼申ハ。

天正十九年當寺領ニ相成、其後延享二丑年町方御支配ニ相成申ハ。

廿七日辛酉

○慶長十七年(紀元二二七二年)五月○辛酉(三正綜覽)

船賃ヲ定ム。

○令條記

船賃公定
船賃公定事蹟

船賃公定 令條記云フ、

定

一、割印なき船ハ商賣ハ荷物不可積事。

一、船渡之事、商人荷壹駄ハ四拾貫目付、京錢十文可取之、乘懸も馬人共に十文也。

附、富士道者之船賃、右可爲同前、但參詣之步者ハ五文可取事。

一、船賃相定上ハ、往還之者無恙様ハ、船を可渡事。

右條ハ、於相背族ハ、可爲曲事者也。

慶長十七年子五月廿七日

板會 伊賀守重○勝

米津 清右衛門○清勝

大久保 石見守安○長

江戸新開地町割

六月二日乙丑○慶長十七年(紀元二二七二年)乙丑(三正綜覽)後藤光次○庄三郎ニ命シテ、江戸新開地ノ町割ヲ爲サシム。○駿府記、坂上池院日記。

江戸新開地町割事蹟

江戸新開地町割 傳フ、

二日○慶長十七年六月江戸新開地有御町割、依上意、京都及堺津商人下賜屋敷、後藤少

三郎○光次奉之、云云。駿府記

同○慶長十七年六月二日、上意ニ依テ、江戸新開ノ地町割リ仰付ラル。是ニ依テ、京都

及堺ノ津ノ商人共ヲ呼下サレ、屋鋪ヲ賜フ。此役後藤庄三郎光次奉ハルト、云々。坂上池院日記

家傳資料收寛政二年中井藤三郎書上、中井大和守江戸町割ニ與リタリト云フ

ハ、是頃ノ事歟。

市街恢弘時代

先祖書

高五百石 大和國之内

本國大和生國山城

京都御大工頭 中井水實子惣領
中井藤三郎
當戊(寛政三年)二十三歳

外

御加増。

貳拾人扶持
京都屋敷

御役扶持。寺町通丸太町上る所。

江戸屋敷
駿河屋敷

北本庄二之橋三之橋線町。四ツ足町通上魚町通折廻し。○中畧。

一、先祖

本名巨勢

巨勢孫大夫實子 中井大和守○中
初名藤太郎

一、江戸御城御繩張の御用、其後江戸町割之儀、本多上野介殿○正純御承次に大和守被仰付い。

大和守儀在京仕い内、江戸御城御普請之御用被爲召い御老中御奉書所持仕い事。

家傳志料

同年○慶長十七年後藤光次少三郎ニ命シ、新開市街ノ區劃ヲ定メ、京都及ヒ堺津商人ニ其地ヲ與フ。即南八丁堀三十間堀等沿岸ノ地ナラム。

東京地理沿革考

蓋舟入堀疏鑿ノ揚土ヲ以テ築填シ、又ハ同工役ニ於テ整理拓開シタル土地ノ

町割ナル可シ。京橋川三十間堀川、楓川附近、即チ今ノ木挽町ノ西北部ヨリ茅場町邊ニ至ル地方其他、或ハ其處ナルニ似タリ。慶長十七年度ニ於ケル大土工ノ結果ナル可キモ、今其詳細ヲ知ル能ハズ。

附記
船手屋敷

〔附記〕船手屋敷

往古江戸繪圖ニ據レバ、高橋○今海運橋外ニ向井將監○忠勝屋敷有リ、南ニ相隣リテ向井右衛門○宗忠間宮虎之助○澄長九鬼長門下屋敷○守隆大濱民部○小濱光隆小笠原安藝○信盛各屋敷有リ。龜島町ノ地ニ大濱右京○小濱守隆大濱久太郎○小濱嘉隆ノ屋敷有リ、北新堀町附近及新船松町邊ト覺シキ處ニ向井將監下屋敷有リ。給賜年月明カナラス。

阪本町 江戸圖說云、爰ニ日枝社ノ旅所アリ、故ニ阪本町ノ名アリト。蓋シ比叡山ノ阪本ヲ象リシモノト見エ。然ルニ今ハ旅所ヲ南茅場町ニ合併セリ。此處ニ昔幕府船手頭向井將監ノ邸アリ。元祿年中他へ移サレ、邸蹟ヲ以テ町家トス。明治五年第一大區警視出張所ハモト綾部姫路二藩ノ邸地ノ内ナリ。里俗西ノ方河岸通リヲ桐河岸ト云。又植木店ト云所アリ。
大川端町 此町ハモト北新堀町ノ續キニアリシニ、後舊幕府船手ノ組屋

敷ニナリ、ココニテ替地ヲ給ス。ヨリテ北新堀大川端町ト云シヲ、明治五年

ヨリ冒頭ノ北新堀ヲ省ケリ。

新船松町 此地ハ舊幕府船手組ノ屋敷ナリ。一新後造船臺用地トナリ、又
明治元年十小區船松町ノ内ノ代地トナル、故ニ新船松町ト云フ。

東京府志料

正綱 兵庫頭(貞享譜兵庫助)

○向井。

○上 此の年○天正十八年。關東にうつらせたまひ、相模・上總兩國のうちにをいて
二千石をたまひ、向井五左衛門政良、同權兵衛某、同權七郎某、渡邊五郎作某
を隊下に屬せられ、同心五十人を預けられて、御船奉行となる。○中 寛永二
年三月二十六日○今の呈譜○寛永元年。死す。○下

忠勝 將監

○向井。

○上 六年○慶長。台徳院殿より相模國にをいて五百石の采地をたまひ、國一
丸の御船をよび水主五十人を預けられ、○中のち遺跡を繼、さきの采地を
あはせ、すべて五千石を知行し、父か隊下の同心を増預られ、百人を支配す。
寛永二年七月二十七日采地の朱印を下され、相模國三浦上總國望陀、周准

三郡のうち、に於て、新墾の田を合せ六千石餘の祿とある。○中 二十六年○寛永七年。六
月○中。署。この時同心を増預せられ、すべて百三十人を支配す。○中 十八年
○寛永 十月十四日死す。○下

忠宗 右衛門。(今の呈譜直宗につくる)

○上 九年○寛永。八月十四日御船手とあり、水主同心三十人を預けられ、○中
十八年○寛永。十二月四日遺跡を繼、五千石を知行し、千石を弟兵部正方にわ
かちあたへ、さきにたまひし廩米は弟八郎正興にたまふ。このとき父にあ
づけられし御船をよび水主等を忠宗にあづけらる。正保元年六月十七日
死す。

信高

○問宮。虎之助。造酒壺。

北條氏政につかへ、のち武田勝頼に屬し、しばし船手の戦ひに軍功あり。
○中 五月二十一日○天正十年。岡崎にめされて御麾下に加へられ、○中のち遠
江國今切を荒井とあらためて關をおかるゝのとき、仰をうけたまはりて、
御船手の衆に列して之を守り、かねて相模國三崎を警衛し、○中十二年○天
正。小牧陣のとき仰をうけたまはり、小濱景隆とともにおあじく戸田三郎

右衛門忠次か下知にしたかひて、掛塚の湊を警衛し、すでにして伊勢國に打入。略。中六月十九日織田信雄とともに蟹江の城を攻たまふのとき、九鬼大隅守嘉隆軍船に乗來りて城に入らんとす。信高岡部彌次郎長盛等とともに、これを撃て大船數艘を乗取、おを進て敵の船に乗りうつり、奮ひ戦て死す。略。下

高則

虎助。造酒。亟。

東照宮につかへたてまつり御船手をつとむ。天正十八年小田原陣のとき、小濱景隆とともに仰をうけたまはりて、里見か兵を押へむがため海邊を警衛す。關東にうつらせたまふののち、相模國三浦上總國望陀二郡のうちにをいて、もこのことく千二百石を知行す。略。中慶長五年關原の役には、三浦三崎を守り、略。中十四年慶七月二十六日死す。略。下

真澄

虎助。今の呈譜直澄に作る。

略。上のち御船手役をつとむ。略。中元和元年の役に傳法口にをいて番船を乗取。この役に深手をおひ、五月二十六日死す。略。下
長澄 虎之助。造酒。亟。

略。上寛永九年六月二十五日御船手となり。略。中元祿七年正月十七日死す。
略。小濱伊豫守景隆男。
光隆 辰千代。久太郎。民部丞。民部少輔。

略。上五年慶關原御陣のとき、略。中伊勢國安乘浦にをいて九鬼大隅守嘉隆と戦ひ、日本丸といへる大船を乗とる。虜にするところの水主を并せて献りしかば、御感ありて彼水主五十人を賜はり、其月俸をたまふ。略。中六年元仰をかうぶり、大坂に赴き、船手の番をつとむ。このとき二千石を加へられ、先の采地相模を改めて攝津國北中島及伊勢國のうちにをいて、すべて五千石を知行す。寛永十九年七月二日大坂にをいて死す。略。下

嘉隆

辰千代。久太郎。民部丞。

略。上寛永九年八月十四日御船手となり、略。中七月十九日寛永奉書もて父か遺跡をたまひ、大坂の御船手となり、略。中寛文四年三月二十三日死す。
略。小濱伊勢守景隆二男。
守隆 愛松。彌十郎。右京。

略。上寛永元年伊勢國白子の御船手となり、二年十月二十三日采地安房國の朱印を下され、其後安房郡の采地を平郡のうちにつさる。六年十一月十一日死す。

信盛 ○安藝。小笠原。

○上 大坂兩度の御陣に相模國三崎走水等の番をつとめ、又御上洛のときも、しばし走水の番を勤む。寛永五年御城外郭石壘普請のとき、大川口を守りて船頭の事を役す。九年六月二十五日御船手となり、八月十四日水主同心三十人を預けらる。○中 寛文十年四月十四日務を辭し、十一年七月二十三日死す。

安勝 ○小笠原。七郎右衛門。

廣勝 新五郎。新九郎。

○上 關東御陣のときおほせをうけて九鬼大隅守嘉隆か押として、松平又七郎家信をよひ小笠原安藝守信元同越中某千賀孫兵衛等とともに、尾張國毛呂崎に職し、敵船を乗とり、戦功を勵ます。六年攝津國轉法木津口の番を勤む。この年 今ノ呈 譜七年。七月七日大坂にをいて死す。○下

廣信 新九郎。實は安勝が男。

慶長六年十一月二十八日廣勝死して嗣なきにより、その遺跡を賜ふ。 七時にのち台徳院殿につかへたてまつり、大坂兩度の御陣には、相模國三崎の番

を勤む。元和六年八月十二日死す。○中 廣信死するののち嗣なきにより、一族等其弟廣正をもつて養子となし、遺跡をたまはらん事をこひ申すといへどもゆるされずして采地をおさめらる。

廣正 内記。十右衛門。小笠原新九郎慶勝か養子。實は小笠原七郎右衛門安勝が男。

大猷院殿に仕へたてまつり、御小性組を勤め、後廩米三百俵をたまふ。寛永十年新恩二百石を賜ひ、これまでの廩米を采地にあらためられ、下野國都賀郡のうちをいてすべて五百石を知行す。○中 萬治元年閏十二月三日

— 寛政呈譜

死す。

○九鬼大隅守嘉隆男。初友隆。光隆。孫次郎。長門守。從五位下。

○上 慶長二年封を襲、三萬石を領し、鳥羽城 志に住す。○中 五年東照宮上杉景勝御征伐に供奉し。○中 石田三成謀叛の事告來るにより、台旆を還さる。このとき父子相わかるといへども、守隆は無二の御味方すへきよしを言上し、庶兄圖書成隆を質としてたてまつり、○中 伊勢國において二萬石を加増せられ。○中 寛永九年九月十五日卒す。 — 寛政重修諸家譜

是頃、江戸ノ悪少年黨ヲ結ヒテ横行ス。幕府捕ヘテ之ヲ刑ス。

○當代記。駿府記。及聞秘錄。慶長日記。慶長見聞集。

惡少年處刑

惡少年處刑

刑地明カナラズ、或ハ淺草ノ刑場ニ於テシタル者歟。

於江戸徒者集り、人を切事無斷絶。柴山孫作六月廿八日○慶長十七年之上口奉公也。彼者共を一人成敗しける處に、彼黨類孫作所にも奉公して有けるが、我類を被切けるとて、則主の孫作を切殺。江戸中にも彼徒者三百程有けると云々。諸國に奉公して居ける者共、合三千人と云々。此中江戸にて有穿鑿、九十人程搦捕籠に被入。彼孫作切はる者は、小者にてはつるを取立侍にして懇切しけるに、忘重恩主の首を切事不及是非次第也。則彼者を生捕類を被尋けるに、大將分は大鳥居いつ兵衛、大風嵐の介大橋すりの介風吹はちり右衛門、天狗郷右衛門など、云名也。則彼任白狀被相尋、悉搦取被行成敗。さて京都に有下知、大坂堺其外國々を、彼一類成敗可有由也。依之無縁の者には、此比宿を借事なし、旅人爲之迷惑す。彼いつ兵衛すまうをも能取、兵法をも能つかう間、若衆かふきとは去らす近付けるを、被行罪科、國々に被遣。

穂坂長四郎 越後衆被預、村上周防 坂部金太夫 越後衆溝口伯耆被預 岡部藤次 奥州被預、南郡 米津勘十郎 同奥州被預、津輕 佐平次 佐渡被流

彼かふき共の傍輩、徒者と不知して別る近ける者に、かふき者の中、去五月暗嘩して死けるを葬んとて、無等閑傍輩に其事とは不云、無縁の者死ける間、結縁のため代物少合力いへとて、様々云ける間、無何心代物少出しけるを、号其一類して被成敗。此者共無罪して死をかうむる迷惑なりし事共なり。——當代記

江戸御番衆中柴山權左衛門、去月廿五日其小姓依有科而殺之、然處彼小姓之傍輩在側、拔刀又指殺權左衛門、逐電幕府、開召之、方々令追懸給終虜彼者來。彼者語曰、日來相約云、縱雖爲主人、理不盡之儀有之者、可報其讎之由、連署結徒黨、故如此云々。因茲拷問、被尋其黨類、一々白狀之。其族世所謂哥部岐者也。切下髮、髮染狂紋、所帶太刀長柄、其刀刻戲言其容貌不尋常、件輩聞彼白狀、雖逃散、搜尋之、已七十餘人被搦捕、其外遁去者五六十人。如此者一兩輩者、面々家内有之。然穂坂長四郎若年數十人拘之、是以被離其所領、而其番頭令預置其身給云々。仰曰、惡黨被召禁事、政道之肝心也。則於駿府如此類有之否、可有御糺明者也。云々。○慶長十七年七月七日條。

駿府記

○慶長十七年六月條。一、大鳥井逸兵衛ト申カフキ者有テ召捕ル。是ハ二三年以來、江戸中ノ若キ衆並ヒチヲ張ル下々迄、皆一味同心シ、逸兵衛組ト号シ、一同ノ思ヲナシ、互ニ血

市街恢弘時代

判シ起情文ヲ書其趣ハ此組中何様之事有之トモ互ニ身命ヲ捨見ツキ可申
ハ、タトヒ親類父主ニモ思ヒカヘ、兄弟ヨリ頼母敷可有之ト申合ハ、大將之分
ハ大風嵐之助天狗摩右衛門風吹散右衛門下々組頭ハ大橋摺右衛門ト申者、
江戸中ニ充滿シテ所々ニ辻切不絶破喧嘩及數度之間御法度被仰付下々左
様之者有之ハ、召捕斬罪可被仰付由被仰出爰柴山孫作ト申者之家來、右之組
ノ小頭也孫作聞テ大ニ驚脇ヨリ訴人無之中ニ令成敗可然ト申家來之者二
三人ニ申付置彼者ヲ呼出シ手打可仕ト用意ハ、殘家來共皆彼者之組ニ
成主ニモカヘマシキト申合誓紙ヲカキツレハ家來寄合ルテ主ノ孫作ヲ打
切欠落仕ハ間是ヨリ猶以御法度強クナリ方々ノ路次ニ關ヲスヘ在々所々
マテ御センサク有六月ノ末ニ神田ノ町ニテ夜五ツ過ニ月夜ニ笠ヲキテ通
ル者有、不思儀ト申テ町ヨリトラヘテ引テ來ル見レハ彼ノ主ヲ殺シタル者
也則宿ヲ尋テ道具ヲ取寄センサクハ、一味ノ惡黨ノ名ヲ書タル帳有、其
類五百人余也大將ノ大鳥井逸兵衛ヲ御尋ルハ、宿ハ八王子ニ有則召捕ニ
遣シルハ、高幡ト云所之不動堂ニ相撲見物ニ行ハ間則大久保石見内八王
子ノ町奉行内藤平左衛門ト云者高幡ヘ行計テ召捕ケル平左衛門モ大力ニ

テ、逸兵衛モ相撲ノ達者、タカヒニ取合上下ヘ返スヲ、大勢ヨリ繩ヲカケルテ、
江戸ヘ引テ參、青山權之助所ニ被召置、イロ々々御センサク、水火ノ攻ニ及ト
イヘ、同類ヲ一人モ白狀不申。

一、此逸兵衛ハ、元來本多百介カ小者ニテ、勘解由ト申テイタツラナル忤ナリ。
去ル慶長ノ初、秀忠公御上洛ノ時、百介御供參ル時、伏見ニテ小者トモ每晚御
殿ノ近所之辻ニテ草履ノ詰開馬ノ請取渡シヲ稽古イタス、余リニトロメキ、
後ニ御法度ニ成ルテ、其大將ヲ被召捕、百介小者モ大將ニテ致欠落、佐渡ヘニ
ダ行、大久保石見家中ニテ辻喧嘩ナト一兩度首尾好ハテ、大久保石見目代大
久保信濃ト申侍ニ取立召仕ル。然ニ天性此者利根ニテ、弓ヲ上手ニ射ナラヒ、
鐵炮モ達者、兵法鏈惣テ侍ノタシナミヲ不、殘稽古致スル中、小姓ニ取立、馬ナ
トモ乗得タリ。其後本多百介方ヨリ構申ル間、大久保信濃則故主ヘモトシル
ヘハ、百介方ヘ歸リケル時、下々四五人カ、ヘ、弓立持セ、犬ヲ引セ、乘掛ニテ來
ル。百介モ此体ヲ見テ召ツカヒテモ無專トテ、衣服ナトトラセ、四五日過又信
濃カタヘ送りケル。其後又打者ナト首尾好イタシ、扱信濃ニ暇乞請、江戸ヘ來
リカフキ者ノ組ヲタテ、棟梁トナリ、終ニハ如此。本多佐渡守土屋權之丞、米津

勘兵衛方ニテ色々推問イタシルヘトモ、一度申問敷由申ル間、何ホト強ク御
 攻ルニ同類申問敷トテ、一圓不申ル間、米津勘兵衛余リニ申兼ル者屎ヲクレ
 テ問ルヘト申ルヘハ、逸兵衛大ニ怒リ、侍タル者ニ左様ノカウ問ハ前代未聞
 ナリ、如何ニ罪科ノヲモキ者之ニ、官人ノ尸ハ平土ノ上ニ不置ト聞也、是ニヨ
 リ官人ハシカハ子ノ号有侍ハ又侍ノ法ニテ推問ノ作法有、扱々物ヲ不知奉
 行哉、左様ノ問様アラハ、其ノ方ノ子息勘十郎我等同類也、勘十郎ニモ尿水ヲ
 クレテ問ト申テ、其後閉口、聞人扱々此逸兵衛ハタ、ノ者ニアラスト皆舌ヲ
 卷一、其後逸兵衛ハ江戸中引渡シ、ハタ物ニ掛リ、同類ミナ成敗シ、百人斗被切
 此内無体ニ死申ルモ有、是ハ當五月此同類ニ辻喧嘩イタシ相果候者有、是此
 ノ組之中ノ牢人也、然間同類ニアラストイヘ、知人モ寄合テ代物ヲイタシ
 ルテ、寺ヘ送り吊ヒ、佛事イタシ、其帳ヲ寺ヨリ出シ、間、帳ニ付代物出シ、
 者ハ罪ナクシテ切レ申ル、後日ニ知レ申ル、後日奉行衆ノアヤマチカト人申
 ル。○中

一、江戸ニテ今度逸兵衛同類ニ成衆、方々へ御預ケノ衆ハ、

米津勘十郎 勘兵衛子 津輕へ。

岡部藤次 奥州南 部へ。

井上左平次 半九郎兄 佐渡へ。

保坂長四郎 金右衛門子 越後村 上周防ニ御預ケ。

坂部金太夫 越後柴田へ 伯耆御預ケ。

慶長日記

大鳥一兵衛組の事

見しは今、大鳥一兵衛と云若者有、士農工商の家にもたづさわらず、當世異様
 をこのむ若黨と伴ひ、男のけなげたてたのもし事のみ語り、常にあやうき事
 をこのんで、町人にもつかず、侍にも非ず、へんぶくの人なり、若き者共是を聞
 て、一兵衛と云者は、人頼むならば命の用にも立べしといふ、世にたのもしき
 人こそあれと云て、まねかざるに來り、期せざるに集り、筒櫓を持寄て知人と
 なる。此一兵衛知ざる人をば男の内へ入べからずと、居たる跡をばほこりを
 拂てなほり、同座すれば立しりぞく。子華子に云、子車氏がゐるのこ其色もつば
 らにして黒し、一度子をうんで三つのるのこ有、其二ツは則粹にして黒し、其
 一つは則まだらにして白し、其をのれが類にあらざる事をにくんで是をか
 みころす。其おのれにおなじき者をば是をやしなふ事、たゞつゝしみて其や
 ぶらん事をおそるといへるに異ならず。又若き殿原達は、一兵衛をまねきよ
 せ物語せよとあれば、馬といはば蛇に綱を付ても乗すべし、すまふならば鬼

ともくまん、兵法ならば白刃にて太刀打せんなど、利口をいへば、ひきで物をとらせ、明暮伴ひ給ふ事、たゞ虎を愛してみづからうれひをまねく成べし。古人の言葉に、好友にともなへば芝蘭の室に入がごとく、悪友にちかつくと、きんば鮑魚のいちくらに入が如しといへり。故に善悪のかけひびきのごとし。いさめる者はかならずあやうき事有。夏の虫飛で火に入、爰に北河權兵衛と云人、罪有被官を手打にせし所に、石井猪助と云者、わきよりはしりよつて權兵衛をさしころす。此者をからめ、子細をとへば、別のいこんなし、我權兵衛がわかたうと知音なり、互に命の用に立べしと兼約せし故也と云。皆人聞て、かやうのいひあはせ世にためしなきいたづら者、火あぶりにすべしときせられければ、猪助四方をはつたにとらんで、侍と侍か云あはせ一命捨る程の義理たてを、いたづら者とはひがことなり、然ば大鳥一兵衛とて名譽のおこの者、世にたのもしき智人あり、此人と盃を取かはしたる若き者、死生もしらぬ不敵なるあぶれ者、江戸中に千人も二千人も有べし、其者共の知音の中、われにひとしかるべしといふ。諸侍是を聞若き者を召使折檻に及ぶ時に至ては、たゞ龍のひげをなでて玉しひをけし、虎の尾をふみてむねひやす心地有

て安からずといへり。江戸御奉行衆聞召おどろきさはぎ、先一兵衛をからめくびかねをかけ、かなほたしをうち、問法所にをき、かれを見るに、よの男にかさ増て足の筋骨あら／＼とたくましくして、二王を作り損じたる形體なり。扱同類有べしとて大名小名の家々町中までもさかし出し、首を切てさらす事限りもなし。大名衆の小供たちをば命をたすけ、奥州つがる、かつはそこの濱、西はちんぜい鬼海島、北は越後のあら海佐渡島、南は大島、戸島、八丈へながし給ふ。扱一兵衛をばすねをもみひざをひしぎ、夜る晝間とも、同類をばいはずして、につこと打笑ひ、愚なる人々かな、からだをせめてなど心をばせぬぞといへば、にくきやつが廣言かなとて、荒手を入かへて五日七日十日廿日水火のせめにあて、様々に推問がうもんすれども、更にくるしむ氣色なく、其心惡魔てふてきにして、誠に血氣の惡者也。そら笑ひするつら玉しひ、勢力骨柄人にかはつて見えにけり。皆人せむべきやうなしとてあきれば居たりしに、一兵衛云けるは何とやらんいま程はあたりしづまり物さびしければ、物語してをの／＼にねぶりさまさせ申べし、われ武州八王子の町酒やに有て酒をのみしに、古無僧一人尺八を吹て門に立たり、我此者をよび入、あら

有難の修行や、御身ゆえある人と見えたり、世におち人にやおはすらんと、酒をもてなし、此一兵衛も若キ比は尺八を吹たり、古無殿の尺八一手望みなりといへば、此者曲を一手吹たり。我聞て打笑ひ、しりをくりあげ、尻を打たゝいて、古無殿の尺八ほどはれしりにても吹べしといへば、古無大に腹を立、無念至極の悪言かな、われいにしへは四姓の上首たりといへ共、今は世捨人となる、然共先業をかへり見貧賤をなげかずして佛道の縁に取付、空門に思ひをすまし、内に所得なく、外に所求なく、身を安くして普化上人の跡をつぎ、一代教門の肝要、出離解脱の道に入、修業をはげますといへ共、惡逆無道の一言にわれ瞋恚のほのほやみがたし、すがたこそ替れども、所存におゐて替るべきか、是非尻に吹せて聞くべしといふ。此一兵衛も尤しりにて吹べしといへば、互にかけ物をこのみしに、古無云けるは、親重代に傳はる吉光のわきざし一腰持たりとて、坐中へ出す。此一兵衛もこの刀を出すべし、此刀と申は、われしたはら鍛冶を頼み、三尺八寸のいか物作りにうたせ、廿五までいき過たりや一兵衛と名を切付、一命にもかへじと思ふ一腰を出す。町の者共兩方のかけものを預り、一兵衛か尻にて吹尺八きかんと云。其時我古無が尺八を取つて

さかさまに取なほし、尻にて吹ければ、皆人聞て實に古無か口にて吹たるより一兵衛が尻にて吹きたるが増りたるといへば、われ此あらそひにかちたり。各々かやうの事に訴人あらば、八王寺町の者共へ尋給へと云。皆人聞て扱こそ一兵衛木石にても非ず、物をいひそめけるぞや、爰に彦坂九兵衛と云人たくみ出せる駿河とびとて、四ツの手足をうしろへまはし、一ツにくゝり、せなかに石を重荷にをき、天井より繩をさげ、中へよりあげ一ふりふれば、たゝ車をまはすに似て、惣身の油かうべへさがり、油のたる事水をなすがことし。一兵衛今ははや目くれ玉しるもきる果ぬと見えければ、すこしいきをさすべしとて、繩をおろし、ひさひへ水をそゝぎ、口へ氣藥を入れ、扱もかひなし、一兵衛同類をはやく申せ、いはすんば又あぐべし、なんじ責一人に歸すといへば、其時いきのしたより、あらくるしやかなしや候、いかなるせめにあふともおつまじきとこそ存すれ共、此駿河とびにあひていかでいでは有べきぞ、それかし知人数しらす、先紙を百枚帳にこち持來り給へ、同類残なく申上書付べしと云。望のごとく帳をとち筆取出て、扱同類はと問ば、一兵衛が存知の人々を残なく申べしとて、日本國の大名衆をかぞへたつる、御奉行衆聞

召とふにたえたるいたづら者、先禁獄さすべしと、引立籠に入る。文選の言葉にむかでは死に至れども動かすといへるは、此者の事也と諸人云あへり。

罪人共籠中法度定むる事

見しは今、大鳥一兵衛と云者、江戸町に有て世にまれなる徒者、是によつてきんこくす。子細は前に委記せり。然に一兵衛籠中東西をしづめ、大音あげていふやう、なにがし生前のゆらいを人々に語て聞せん、武州大鳥と云在所に、利生あらたなる十王まします、母にて候者子のなき事を悲み、此十王堂に一七日籠り、まんずる曉靈夢のつけあり、懐胎し、十八月にしてそれがし誕生せしに、骨柄たくましく、おもての色赤く、むかうは有て、髪はかぶるにして、立て三足あゆみたり、皆人は是を見て悪鬼の生れけるかと驚き、すでにがいせんとせし處に、母是を見て云けるやうは、なふしばらく待給へ、思ふ子細有、是は十王へ申子なれば、其しるし有ておもての色赤し、傳聞、老子は神武天皇御宇五十七年ニ當て楚國へ誕生、支那は周の二十二代宣王三年丁巳九月十四日也、胎内に八十一年やどり、白髪に有て生れ給ひぬ、故に老子と號す、成人の後身の長一丈二尺、龍眼にしてひたひ廣く金色なり、耳なかく目ふとく、眼に光り

あり、くらびる大にして紋あり、齒は四十八有、足のうらに紋あり、手の内の筋直にしてまがらす、其形尤奇異なり、かやうのためしあれば、鬼神にても候はじ、たすけおき給へと申されければ、我をたすけをき、おきな名を十王丸といへり、其十王の二字をへんじて一兵衛ト名付事、十方地獄中、唯一兵衛、無二又無三の心なり、されば籠内をば地獄、外をしやばと罪人云、是道理也、しやばよりあたふる手、一合の食物を朝五勺、晚五勺、是を丸して、ごきあなより此くらき地ごくへなげ入るを、數百の罪人共是を取んと動搖するが、有力なる者共は他の食をうばひとる、無力のものわづらはしき者共は、あたふる食をえとらずして、つかみ合ひはり合する事、餓鬼道の有様なり、つらつらは案ずるに、それがし娑婆にて十王といはれし身が、地ごくへ來る事因果歴然の理のがれかたし、然りといへども、佛は極樂のあるじとし、十王は地獄の主となる事、是順逆の二道、魔佛一如にして、善惡不二の道理なり、釋尊忉利天に御座て、十方の諸佛菩薩集り給ふ中において、地藏菩薩につげてのたまはく、未來惡世の衆生をば汝にふぞくす、惡道へ落し給ふ事なかれと有しにより、或はえんま王となり、中有の罪人をたすけ、或は十王と成て、六道の群類を吊はん

と、毎日地獄に入、衆生の身がはりに立て苦しみを請諸々の罪人をすくひ給ひぬ、經に一切衆生五逆罪を作る共、十王を信せば地獄に入罪人にかはつて苦をうけん事決定也ト説れたり、それ娑婆において泰時が記したる成敗の式目は、日本國の龜鑑題目、十三人奉行の内、仁知をかね、六人に文章を書事、六地藏六觀音を表す、十三人の奉行は十三佛とす、將軍を焰魔王につかさどり、善惡理非をさたする事、焰魔の張に罪の輕重を付るを學ぶ、是今生後生利益方便自業得果の道理をたゞし、終には佛道に引入る方便とす、然るにわれ娑婆に有てむじつのごんにより此地ごくに來る事、右の經文のごとく、各々に成かはつて我くるしひを請、籠中の罪人をすくはんための方便なり、いかで罪をまぬがれざらん、自今以後において、十王地獄の法度を定むべしと云、籠中の罪人此由を聞有がたし尤と同じ、夏の事なれば南の風おもてこきあなあかりをかたどり、たゞみ三疊かさね、其上に一兵衛をなをし、今日より地ごくのあるじえんま十王様ごぞあふぎける。其時十王えみをふくみ、もごより宏才利口者、地ごくの法度を定る第一、よこはし付たり高雜談、然るにわれ娑婆の法度を見しに、けんくわ口論をば理非共に非におつ是非なり、地ごくの

法度は理ある者をば十王があたりにゆるかしくおくべし、非有者をば食事をとごめ、かはやのねにをくべしと云、然間地獄しづか成事前世未聞、是一兵衛か威徳なるべし。

慶長見聞集

寛永年中、大鳥一平ト云者アリ。元來宜キ奉公勤タル者ナレト、生得氣隨氣儘ニシテ、傍輩ハ勿論、主人ト云ヘ、己レカ不叶心事ヲハ氣儘ヲ云テ不肯程ノ曲セ者ナレハ、遂ニ被出暇、成浪々ノ身ト。去レト一平ハ取手ノ名人ナリシ程ニ、取弟子渡世ヲ過ク。其比男立ヲ好ム者ハ、多ク成一平カ門弟ト捕手ヲ稽古シケル。去レハ男立ト云ハ、前漢ノ朱家カ任狭ヲ元トシテ、世々此類ノ者有テ、世ノ煩トハナリヌ。皆其組ヲ立テ、或ハ大小神祇組、火入組、剛強組ナト、四十人五十人程宛一味シテ、肩ヲイカラシ臂ヲ張ヌ。去レハ此一平ハ勝レテ剛強ナル上ニ、捕手柔之達者ナレハ、彼門弟共一平押立テ神祇組ノ頭トシテ、溢者多ク屬之、所々ニテ我儘ヲ働キケル。其比加藤ノ溢者盜賊ナト改ル御役人ニ中山勘解由○直守鯨時代合ハト云人アリ、此人勝レテ英雄ナルカ故ニ、盜賊男立ノ類ヲ悉ク生捕テ被行死罪ケル。一平此沙汰ヲ聞ヨリ門弟二三十人徒黨シ、町宅ナレト、武士之浪人ナレハ、用心嚴ク討手ノ者今ヤ來ルト待掛タリ。勘

解由、渠ハ神祇組之頭ナレバ、其罪最不輕、何トソ一平ヲハ生捕ニセント思ハレシカ、渠ハ大力ニシテ而モ捕手ノ名人ナルニ、究竟ノ弟子二三十人徒黨シテ一平ヲ助ル事ナレハ、中々卒爾ニ生捕ン事ハ不叶、種々被巡肺肝、爰ニ勘解由馬ノ口取ニ又助ト云中間アリ、匹夫ナレモ常ニ好武藝尤モ小賢キ男ナリシカ、或時勘解由へ願ヒケルハ、神祇組ノ頭大鳥一平ヲハ某生捕可申候間、同心衆ヲ十人許リ御差添可被下、少モ味方ノ人ヲ損不申様ニ可仕ト、家老ヲ以テ云上ル。勘解由聞テ、我數日渠ヲ生捕ント工夫スレモ、渠ハ勝レテ強勢ナルニ、同類ノ溢レ者二三十人成テ死狂待掛ケタル所へ討手ヲ遣シナハ、味方多ク可損思テ扣タリ、先可呼出トテ招寄、汝大鳥一平ヲ可生捕ト願フ事難心得、汝如何ナル覺へアリヤト被申。又助答テ、仰御尤ニ奉存候、討手大勢ニテサへ叶フ間敷ト思召處ヲ、拙者進出テ願候ハ、少謀ヲ案シ出候間申上候、万一此計略ヲ彼者推シ候モ、味方一人モ損申候儀ニハ無御座候得ハ、拙者ニ被仰付被下候へト云。勘解由此上ハトテ、又助カ所望通り被申付。又助重而願ヒケルハ、右計畧ノ支度ニ金子壹兩二三分入候ト申。勘解由則與フ金子。又助大ニ喜ビ、右之金子ニテ酒肴ヲ調へ、同心十人ヲ同道シ、到一平カ宿所、同心ヲハ定相圖、

隣家或ハ路次ナトニ隱置、又助ハ酒肴ヲ荷ヒ、一平カ弟子共出向ヒ、何方ヨリ來ルソト云。又助答へテ、私儀ハ此邊ノ大名屋布ニ、馬ノ口取奉公ヲ勤候者ナルカ、一平様ノ御弟子ニ罷成度推參仕候、宜ク御取成可被下トテ、持參ノ酒肴ヲ出ス。弟子共モ中間躰ナレハ有ン如何ト思へモ、其通り可云。進入内、一平ニ告此由。一平听テ、夫レハ奇特ナル志也、呼入玉へトテ内へ通ス。又助ハ一腰ヲ玄關ニ拔捨、如何ニモ謙テ畏リ、我風情御弟子ニトハ憚ハ多ク候へモ、此方々ニ捕者ヲ仕候へハ、無存掛立身仕候、私モ何トソ左様ナル事ニテ立身仕、責テ一生ニ侍ニ罷成度候へトモ、無藝ニテハ何程ニ存候テモ叶ヒ不申候、今ヨリ武藝ヲ學ヒ候共、中々十年二十年ノ修行ニテ立身仕候ハン事モ不可叶候、一平様ハ捕手ノ御名人之由、人ヲ縛リ候事ヲ習ヒ申度存、是迄推參仕候ト云。一平听テ、扱々優キ志哉、此間ハ有子細引籠リ、何人ニモ不對面共、其方志ヲ感シ致對面也。成程其方所望ノ業ヲ教へ可申トテ、件ノ一酒一肴之一禮ヲ演、去ラハ御持參ニテ師弟ノ盃セント、弟子共ヲ車座ニ並へ酒宴ヲ始ム。又助元來心アレハ自身酌ヲ取テ進メケルニ、一平モ傾ケ數盃、此程ノ鬱氣ヲ晴シ、弟子共モ盃ノ數重リケル時、又助申ケル、先刻申上候繩ヲ御傳受可被下ト云。一平成

程可致傳受トテ、繩ヲ出シケレハ、又介又云ク、師弟ノ御約束仕候上ハ私ヲ御縛リ被成、其アンハイ御知ラセ可被下ト云。一平尤也トテ、又助ヲ縛リナカラ、爰ラハ如此掛、爰ラハ加様ニ縮ル也ト、念比ニ教ヘ、扱繩ヲ解ケルニソ、又助申ケルハ、扱々能キ事ヲ習ヒ候モノ哉、私縛リ候テモ解不申候哉、乍慮外一平様ヲモ如只今縛リ候テ御直シヲ受申候ト云。一平尤也トテ、手ヲ後ヘ廻シ、繩ヲ掛サセ、其所ヲ縮ヨ、彼所ヲ結ヘト教ヘ、扱縛リ仕廻テ、又助是ニテ克候哉ト云フ。一平成程是ニ有能シト云。又助重テ、一平様ハ御師匠様ナレハ是ヲ御解可被成ト云フ。一平答ヘテ、我トテモ此繩ヲ解事ハ不叶、縦ヒ如何ナル剛強ノ者又ハ藝術ニ達シタルモノニテモ、此繩ヲ解事以不叶、秘事トス、鬼神ト云共不能解事ト云フ。其時又助大音上ケテ、公儀ヨリ一平ヲ生捕來レ、若シ一平ヲ救ヒ助ル者アラハ可被行罪科ト呼レハ、十人ノ同心如相圖押込テ、弟子共ヲ擲捕、弟子驚キ働ントシケルカ、大ニ酔倒レタル處ナレハ、足モ不立ヨロメク處ヲ、不殘一人擲捕。一平ハ咬牙悔ケレトモ、高手小手ニ縛ラレタル事ナレハ、少義不能働事、師弟三十人被生捕、勘解由屋敷ヘ引レタリ。勘解由ハ又助カ知謀且大勢ノ中ヘ只一人進ケル勇氣ヲ感シ、侍ニ被取立、其後神祇組ノ餘黨悉ク

被召捕、死罪ニ被行ケル。又助カ勇謀ヲ世舉テ褒美シケル也。

及聞秘録

附記
半井驢菴
賜地

〔附記〕半井驢菴賜地

往古江戸繪圖檜物町會所地ニ「ろあん」ト記ス。日本醫譜ニ、半井驢菴慶長十七年七月十日江戸勤番ト爲ルコト見ユレハ、或ハ是頃ノ給賜歟。

光成 宮内大輔。從五位上。剃髮号驢菴瑞策。通仙軒。通仙院。○半井。

光成醫術に熟せるをもつて明英○半井か家を繼、晩年にいたりて官を辭して剃髮し、驢庵とあらたむ。正親町院の御宇法印に叙せらるへしといへとも、前官の法印あるときはその上に座しがたし、よりに深黒の素絹を著する事をゆるされ、法印の上に著座す。こゝをもつて諸家の醫官に異なり。また勅によりて通仙軒をあらためて通仙院と号し、かつ家傳の醫心方三十卷をたまふ。織田右府京師にいたるごに、光成か家をもて旅館とし、豊臣太閤よりもまた恩遇をうく。あるとき近江の人を診し、これわづげて必死の脈ありといふ。この人病あきがゆへにあやしみおもふところ、明日矢にあたりて死す。世人其術の妙にいたることを奇あ

りとす。かくのごとき類を多し。天正五年八月二十五日死す。年七十五年。法名瑞策。

成信

宮内大輔。從五位上。剃髮号。驢菴瑞桂。在世翁。通仙院。

いとけあき時相國寺の妙安惟高か室にいり、のち駿府にいたりて東照宮にまみえたてまつり、御薬を調進し、また江戸に來りて台徳院殿にも御薬をたてまつる。寛永元年先例にまかせ、法印に叙せずして通仙院と号し、驢庵の号をもつて嫡孫成近にゆづり、かつ深黒の素絹を着すへきむね勅命あり。十五年四月十一日死す。今の呈譜十一年四月十一日。京都にないて死す。年九十五。法名瑞桂。○下

寛政重修諸家譜

和氣氏 ○中

瑞策 ○半 利親字、眞明弟。自号通仙軒又驢庵。正親町帝勅賜号通仙院。被聽不歷僧綱而著素絹、且賜丹羽家所傳醫心方三十卷。初仕信長公田。○織 愛遇殊厚。診弓箭脈後仕大神君。○徳川 家康。賜五百石於相模國。未幾加賜爲千石。文祿元年八月廿五日卒。法諡号通信院良室大居士。葬大徳寺中眞珠庵。著袖中記。武徳編年集成曰。元龜元年四月朔日、信長公寓居洛中半井驢菴宅。周覽泉州堺

津大商等重器。又曰。慶長八年七月十日施藥院使典藥頭和氣姓半井驢菴利親享年廿五歲卒。

按此恐明英子之明親、而誤爲利親者乎。將別人乎、未可知也。

又曰。同十九年大神君至名古屋。醫師半井驢菴并古田織部正迎於大手門。駿府政事録曰。慶長十七年六月十日醫師驢菴爲江戸勤番來。今日拜謁。赴江戸。醫家藩翰譜曰。半井氏本姓和氣。數世在京師。掌禁庭御醫。近世半井瑞桂有奇術。豐太閤褒賞之。以其通仙人之術。奏之天朝。賜号通仙院。賜五百石於山城。屢拜謁大神君於伏見。耀令名於異域云々。

此乃瑞策之事也。其稱瑞桂者蓋亦稱驢菴故也。

瑞桂 瑞策子。亦稱驢菴。寛永十六年四月十一日卒。法諡号後通仙院昌室大居士。其子瑞玄。

瑞玄 瑞桂子。茅原定日本名醫傳曰。瑞桂子瑞玄叙從五位下任右衛門佐爲典藥頭。其子瑞壽。

瑞壽 瑞玄子。亦稱驢菴。繼家業不墜家聲。有良醫之譽。大神君薨御之後。在江戸施治術。台徳大君賜五百石餘之朱券。台徳大君有病。衆醫晝夜侍側。以盡其

術然竟及薨御雖然大猷大君賞其奇術加賜爲千石亦号通仙院寬永十六年乙卯十月九日卒葬臨江禪寺法諡号法雲院仁室瑞壽其子瑞堅。

瑞堅 瑞壽子襲封祿千五百石叙典藥頭亦号通仙院延寶六年戊午七月二日卒法諡号通仙院剛室瑞堅其子瑞章。

瑞章 瑞堅子亦稱驢菴同年八月襲封爲典藥頭延寶七年五月五日因館林綱吉公若君誕生同十二日賜時服二襲貞享四年丁卯十月四日卒法諡号心源院光室瑞章大居士其子瑞英。

瑞英 瑞章子稱内匠頭同年十二月襲封亦稱驢菴亦爲典藥頭仕常憲大君文昭大君有章大君有德大君四朝寬保元年辛酉告老致仕延享二年乙丑十月十九日卒法諡曰通仙院堅室瑞英其子成美成輝皆先卒有女以瑞閨爲壻瑞閨 瑞英養子襲封亦稱驢菴爲典藥頭寶曆九年己卯八月二日卒法諡曰德室瑞閨其子成高。

成高 瑞閨子稱左衛門寶曆八年戊寅爲典藥頭兼大炊頭同九年襲封千五百石仕惇信大君浚明大君兩朝轉出雲守天明五年乙巳致仕其子成美。成美 成高子幼名新太郎同年十一月襲封十二月任典藥頭爲大和守仕文

恭大君文政三年卒其子富慶襲封。

日本醫譜

禁令

八月六日戊辰

○慶長十七年(紀元二二二年)○戊辰三正綜覽

禁令ヲ布ク。

○令條記

禁令事蹟

禁令 令條記其他二、

條々

一、一季居之事堅被停止之上侍之儀之勿論中間少者ニ至迄於有抱置輩之速可被處罪科事。

一、伴天連門徒御制禁也。若有違背之族之忽不可遁其科事。

一、手負之事不依上下疵付候者有之其所之給人代官に其子細を可申届也。

併○併他處手負來ニ於る其所ニ則留置注文名急度可有言上若於隱置

之可被處重科事。

一、たこ吸事被禁斷畢然上之賣買者迄も於見付輩之双方之家財を可被下也。若又於路次見出ニ於るたはこ並賣主を其所ニ押置可言上則付來る馬荷物已下改出す者ニ可被下事。

附於何地にもたこは作るへりらさる事。

一、牛を殺す事御制禁也。自然可殺者は一切不可賣事。

市街恢弘時代

右之趣御領内々急度可被相觸ル。此旨堅被仰出者也。仍執達如件。

慶長十七年八月六日

令條記

八月六日○慶長十七年江戸ニ於テ御掟五箇條ヲ仰出サル。在國在邑ノ面々へハ、土井大炊頭○利勝安藤對馬守○重信青山圖書助○重成等連署ヲ以是ヲ傳フ。件ノ御條數ノ中ニ伴天連ノ宗門制禁亦煙草停止ノコヲ載ラル、ト云々。

關難間記

寺社事務取扱

十八日庚辰

○慶長十七年(紀元二二七二年)八月。○庚辰、三正綜覽。

板倉勝重

○伊賀守

金地院崇傳ヲシ

テ寺社ノ事ヲ沙汰セシム。

○駿府記。台徳院殿御實紀。

寺社事務取扱

寺社事務取扱 傳フ、

十八日○慶長十七年八月。○中畧。

今日諸寺事傳長老板倉伊賀守兩人可聞之由有御謔。

駿府記

十八日○慶長十七年八月。○中畧。此日大御所板倉伊賀守勝重金地院崇傳二人をして今より後寺社の事沙汰すへしと仰付らる。

台徳院殿御實紀

金地院由緒書ニハ此事見エサレドモ、慶長十八年五月六日聖護院三寶院へノ書付、六月朱印ノ書付等傳長老ニ命セラレ、十九年十二月京五山知行目錄奥書

金王八幡社營造

並ニ城州長福寺正傳寺知行目錄奥書勝重崇傳命ヲ受ケテ之ヲ調フル等寺社ノ政務ニ當ルヲ見ル。

十月七日丁卯

○慶長十七年(紀元二二七二年)丁卯、三正綜覽。

江戸崎

○常陸國

邑主青山忠俊

○伯耆守

春日局ト共ニ澁谷

○武藏國荏原郡。

金王八幡社ノ假營造ヲ爲ス。

十一月十五日甲辰○慶長十七年(紀元二二七二年)甲辰、三正綜覽。遷宮ス。○寛政呈譜。禮典。

金王八幡社營造事蹟

金王八幡社營造 寛政呈譜其他ニ據ル。

忠俊

○從五位下伯耆守。幼名伊勢千代。藤五郎。青山。

一、同○慶長十七年壬子月日○徳川家光大猷院様

九。御歳

國千代様

忠長卿。御歳七。

御世子御内評之趣有之、忠俊春日局ト相談澁谷金王丸氏神八幡宮之、源家御草創之神社也、

忠俊父忠成宅地拜領以來、崇敬之、數度不思議就蒙靈感今度竹千代様○徳川家光御運長久可奉祈願哉ト申談、春日局承神德必定之御吉兆、於神前毎日祈禱可、有之旨相約、三月十三日兩人主意使者以て申遣之、同十五日己酉、良辰、御祈禱開日、忠俊參詣、別段公儀重御祈願有之、同十八日從春日局護摩供料金八十兩奉納之、毎月十五日公私代參等無懈怠。

一、同年九月十五日丙午吉辰、大猷院様御具足御著初御祝義、加藤左馬介○嘉

明。奉爲著之、御床几御腰被爲掛、其時東照宮○德川家康上意、先年子○慶長五年九月十五日於濃州關ヶ原賊徒討平ル條、列座之面々悉身勞之故也、今竹千代ニ具足着セ初儀、各も仕合、當家第一之目出度事也、○被仰出、御盃被下之。左馬介頂戴之、依上意、御盃大猷院様ニ上之、忠俊御酌仕、左馬介御熨斗御肴上之、東照宮御機嫌不淺次第也、當日ニ八幡宮祭日故、此御祝義亦御宿願感應之次第ニ付、忠俊以使者、此段社僧方へ申遣之。

同十七日忠俊澁谷八幡宮參詣、社僧ニ申達之趣、今度神德達上聞有之、神社後日御建立可有之、且往古之御朱印も亦相續可相成、先假屋爲可致造營、春日局金百兩也寄進、忠俊材木貳百丁、屋根木三百挺、寄進之、同十月七日新初、同十二月十五日乙酉遷宮也、忠俊御用執達之。○中

一、同年○元和元年八月澁谷八幡宮鳥居并瑞籬御造作有之、是ニ御家運長久之御祈願依成就也、忠俊○山御用執達相勤之。

——寛政呈譜

道堤制法頒行 十六日丙子○慶長十七年(紀元二二七)十月〇丙子、三正綜覽。道堤ノ制法ヲ頒ツ。○令條記。

禮典○大日本史料收。

道堤制法頒行事蹟

道堤制法頒行 令條記ニ據ル。

覺

一、大道小道共、馬さとり候所ニハ、砂よても石よるを、かよはり候様被仰付、道之脇ニ水るり仕様ニ尤候事。

附、ぬりり候所、右同前砂成共石成共入、りよまり候様、可被仰付事。

一、堤等之芝切とき候事、一切無用可被成候、馬さとり候所にて、土を敷かたゝぬニ付候様、可被申付候、道能ハ所ニ土を置ル事、必御無用候事。

一、橋之儀、大小よよらす惡ハ、御料私領共、觸下之間、向後代官衆被入、精ル様、堅申渡事。

慶長十七年子十月十六日

青圖書○青山成重。
安對馬○安藤重信。
土大炊○土井利勝。

山内氏江戸證人

十二月五日甲午○慶長十七年(紀元二二七)甲午、三正綜覽。高知○土佐國城主山内忠義○土佐守。其

母ヲ出シテ江戸ノ証人トス。○御當年表。

山内氏江戸證人事蹟

山内氏江戸証人 高知城主山内氏ハ、是ヨリ先同族山内政豊ヲ江戸ニ証人ト

市街恢弘時代

五七七

ラシメシガ、是ニ至リ其母妙玖院ヲ送ル。

慶長十七壬子

吉兵衛様修理亮様(○山内康豊)爲証人江戸御詰之處爲御代御實母妙玖院様

十二月五日江戸へ御越此時御見送トシテ竹巖院様○山内忠義修理亮様阿州海

部迄御出。

御當家年表

是年○慶長十七年(紀元二二七二年)江戸ニ銀座ヲ設ク。

江戶ニ銀座ヲ設ク。

○銀座年寄由緒書家傳資料京監拔書參考錄餘。

銀座設置
銀座設置事
蹟

銀座設置 傳フル所左ノ如シ。

銀座年寄由緒書

覺

一、往古ハ白銀之位不相定、諸國銀山の堀出しハ灰吹銀之儘ニテ通用仕、銀位不全有之、交易不自由ニ御座ルニ付、權現様銀座御取建被成下、慶長六年丑六月世上一統之丁銀遣ニ被爲仰付、則通用之銀位御定被爲遊、銀座人數年寄役大勘定役戸棚勘定役戸棚役平役銀見役之者共迄、段々相究テ乍憚御代々暫も無間斷、右御用相務、於于今相續仕、相務罷在ハ事。

一、往古ハ公儀御灰吹銀之分、不殘銀座ハ御預ケ被爲成、右御定之位ニ毎年吹

立、奉上納ハ事。

一、諸國山出灰吹ハ、兩替之者其外何方ハも、銀座ハ致持參ルニ付、其品々目利仕位相定、直段相極買取、御定之通用丁銀小玉ニ吹立、世上ハ差出申ル。依之銀座之外ハ、何方ハも一切灰吹並潰銀共ニ賣渡し不申ル御定ニ御座ルハ事。

一、右通用丁銀小玉之儀ハ、御取建之節、銀位並極印品々相調奉、窺ル所、大黒常是極印之銀位可然旨、依御上意相定、通用銀吹出申ル。唯今慶長銀と唱申ル銀、則右之銀ニテ御座ル。當時於江戸大黒長左衛門、於京都大黒作右衛門、銀吹役相勤、慶長年中ハ相續仕罷有ハ事。

但、銀吹役勤ルニ付、通用之銀包方、右長左衛門作右衛門ハ被爲仰付、江戸大坂御金藏ハ諸方ハ納ル通用銀、不殘右兩人方ニ包方相勤申ル。

一、右通用銀吹立ル元銀ハ、於銀座役所、灰吹銀之位ニ應シ取組仕吹立ル。上之仕建も、諸色於銀座相勤申ル。銀吹所之儀ハ、大黒長左衛門、全作右衛門方ニ相構置、銀座ハ役人並當番之者吹銀致持參、長左衛門作右衛門方ハも、人數差出、双方立會、丁銀小玉吹立申ル。右長左衛門作右衛門方ニ建置ル銀吹所、銀座ヨリ封印付置、並極印も銀座ハ打せ、外ハ一切極印打申義無御座ルハ事。

一、通用銀世上に差出の義の、吹立の御定之位銀、万一吹損シ、位違も可有哉と、再應念入相改、其上元灰吹銀吹戻し之糺吹仕、彌御定之位ニ相違無之を見届の上、世上通用ニ差出申の事。

一、御取建ニテ、銀座一手ニ通用之銀位相定、吹出の義故於他所の、一切銀吹の義御停止被爲仰付の。若似せ銀惡銀吹の者有之は得の、銀座を御注進申上、御吟味之上、急渡御仕置被爲仰付の御例ニ御座の事。

一、燒銀並元祿銀、寶永銀、中銀、三寶銀、四寶銀等潰銀の方、御定之代銀割合を以引替遣し申の。且又折レの丁銀、銀座に致持參のへは、是又替遣申の事。

但、銀座に致持參の銀之内、似せ銀惡銀御座に得の、碎レテ銀主に相返し申の御定ニ御座の事。

一、右之通銀座御取建被下しニ付、毎年諸國灰吹買入の高ニ應し、御運上銀段々御定有之、年々上納仕の。古來御定書、御老中様方被下置の形、于今所持仕の事。

一、右御運上銀、慶長年中御取建之節を奉納しニ付、最初之内の、權現様、台徳院様御黒印被下置の。其以後の、御勘定所御書替之御連判御證文毎年無間斷被

下之、此節迄相揃、銀座ニ所持仕の事。

一、銀座役所之儀の、慶長年中於伏見町屋鋪四町拜領仕、其後慶長十一年午年駿府ニテモ銀座取建の様ニ被爲仰付、於全所も、四町町屋鋪拜領仕。然處伏見役所京都に引移の様ニ、慶長十三年被爲仰付、兩替町通二條を三條迄四町拜領仕、銀座役所常是吹所并座人共今以居住仕。同十七子年駿府役所江戸に引移の様ニ被爲仰付、同所京橋南一町目を町屋敷四町拜領仕。然ル處伏見并駿府ニあり、御用無御座にニ付、伏見の當時町屋鋪處持不仕。駿府ニハ漸一ヶ所于今所持仕。江戸拜領地之儀古來の町屋敷多く相抱の得の、町役入用等相掛難義も御座にニ付、御斷申上奉差上、又ハ奉願望之者賣拂の義有之様子ニテ、當時於江戸漸役所并番屋敷有之義ニ御座候事。

一、御取建之砌、於長崎も、屋鋪拜領仕、銀座役所相構、異國に之御渡銀、并長崎御政所御銀改之御用相勤可申旨、被爲仰渡のニ付、銀座人數差出し、於于今毎年銀見役之者勤番交代爲致、無懈怠相勤罷在。右御用相勤のニ付、毎年糸割符五丸之割を被下置の事。

一、於江戸御年頭八朔歳暮、銀座ヨリ左之通献上物仕、年寄役、大勘定役、戸棚勘

定役戸棚役、於御白書院御披露有之、御目見仕。

紅糸

銀座年寄役

白銀一枚宛

役人共銘々

全廿枚

銀座惣中

但、西丸にも全前献上、惣中銀十枚献上仕。

一、銀座年寄役被爲仰付の節、御勘定御奉行様方御吟味之上、御老中様方被仰上、御窺ニ罷成、其上御城被爲召、御勘定御奉行様方御列座ニ、役義被爲仰付。則御老中様方御退出之節、御燒火之間於御廊下、御逢被下、御禮申上、念入相勤の様に御意御座の事。

但、於御評定所、役義向之誓詞、被爲仰付の事。

一、年寄役被爲仰付の上、公儀之御禮、紅糸壹斤献上仕、御月並御禮日ニ、於御白書院御奏者様方御披露ニテ、御目見被爲仰付、御披露御座候事。

一、同役御暇被下の節、願書差上、御窺之上、於御燒火之間、御勘定御奉行様方御列座ニ、御暇被下、白銀五枚頂戴仕の事。

一、銀座役人共役替之義、年寄共相談仕、役義精ニ入用立可申者吟味之上、御勘

定所に申上、大勘定役戸棚勘定役夫々之役義、御勘定奉行様方御連判之御書付を以、被仰渡被下の義ニ御座。且又同座人共病氣等ニ、退役仕の義、又ハ實子無之養子仕の節、是又以書付奉窺、御附紙被下の上、申渡の義ニ御座の事。

一、銀座御取建之節、於大坂も屋敷拜領仕、役所構、諸國山出灰吹銀、并銅ヨリ絞出したし、灰吹銀、其外潰銀道具、又ハ品々潰銀等買集メ、於京銀座通用之銀ニ吹立公儀に御運上銀御定之通上納仕の様ニ御用相務申。且又大坂御藏ニテ銀御改之儀、御座の節、銀座并常是作右衛門方兩所之内、手代共差出、御用相務させの義も御座の事。

一、大坂銀座役所銀方御用之外ニ、享保十五年戌八月御爲替方御用金高二万兩分被仰付置。二付、毎月三日之御金日ニ、從御藏御金銀受取、江戸御金藏に上納仕の御用相務の事。於同所、去巳十一月、諸國廻着銅絞銀出方、於金座試糺吹可仕旨、江戸御勘定所并長崎御奉行様方御伺之上、被爲仰付、則大坂町中御觸被成下、諸國之廻着銅高銀座役所に承届、其口々銅ニ含ミ、銀出方糺吹仕、御勘定所并長崎御奉行様方に御届申上の事。

一、右御用ニ付、有來ル銀座役所之外、大坂道頓堀湊町ニ絞出銀糺吹場取立被仰付ハ趣を以、追々御用相務ハ義ニ御座ハ事。

一、銀座爲加役、銅座御取立被爲成、國々山出諸向銅一手ニ仕、銅惣支配被仰付、長崎御用廻銅并地賣向渡ハ様當午三月於御城御勘定御奉行様御吟味様方御列座ニテ、右之旨被仰渡ハ依之大坂有來ル銀座役所隣家買添、銅座役所取建、年寄役人共以下人數被下於彼地、右銅御用相勤罷在ハ義ニ御座ハ哀。

一、銀座之義、古來ハ御留守居様方御支配ニハ御座ハ所、元祿年中ハ御勘定御奉行様方御支配ニ罷成、今以其通ニ御座ハ事。

右之趣、前々ハ御用相勤來ハ上、尙又近來相増御用之勤方、荒増如此御座ハ以上。

元文三年八月

銀座年寄

御用達町人由緒○京監拔書畧。

慶長十七子年於江戸銀座御取建被爲成、駿府御役所を江戸ハ御引移被爲仰付、通町京橋ハ南ハ四町、町屋敷拜領仕罷在候處、其後上ケ地ニも相成候旁ニ、當時京橋貳町目ニ、前々より之御役所相建役人共住居も仕ハ。則當時迎ハ。

京橋より南ハ銀座壹町目、貳町目、三町目、四町目ハ唱申候。○中

安永八亥年五月

銀座年寄

平野作左衛門

長谷川長兵衛

尾本吉左衛門

家傳資料○銀座由緒書。

江戸 貳代目長左衛門常春 ○上慶長十七子年、江戸新兩替町ニ御屋敷

拜領、元和寛永中御用相勤。 金銀御吹替次第

大黒常是由緒

本姓湯淺

大黒作兵衛

湯淺作兵衛常是儀、泉州御供仕ハ付、天正十年權現様伊賀山越被爲遊ハ節、御供仕付、慶長三戌年十一月於伏見被召出、先年御奉公之爲御褒美、御目見之上、御拵付宗近之御刀一腰拜領仕、且御銀吹格、並御銀改役被仰付、大黒ト苗字被下置、銀位相立、天下一統大黒遣ト被仰出、同年十二月廿八日大黒銀打印末々迄違犯無之様可相改旨之御黒印拜領仕、右只今以所持仕、且於伏見兩替町屋敷拜領仕、御用相勤、同十一年午伏見從御城、駿府御城へ御引移被遊ハ節、常

是倅共之内、兄作右衛門義の、伏見にて御用相勤、弟長右衛門義の、駿府へ罷下、御用相勤、同十七年江戸新兩替町の屋敷拜領仕、御用相勤。此家筋、當時御勘定奉行支配無役大黒長右衛門相續罷在。寛永十年三月五日病死仕。

銀座役所

—— 参考録餘

當銀座は、昔駿府に立置れしを、慶長十七年江戸へ移され、通町京橋より南方四町の屋鋪を賜はりて置れしが、今その所を銀座一丁目二丁目三丁目四丁目といふ。寛政十二年今の處○市内日本橋區蛸殻町。へ移轉ありしと云。○燈頭、今の地は元酒井雅樂頭の上ヶ地に有しと云。此銀座は、慶長年中堺の町人大黒屋常是と云者、吹銀を命せられしより始りて、世に御由緒有もの相續して今に至ると云。—— 府内備考

銀座町一丁目

沿革 京橋ノ地ハ、昔時郭内ナル日比谷門ノ邊ニ至ルマテ、一帯ノ入海ナリシニ、慶長中之ヲ築立テ、以テ市街ヲ開キシト云フ。紳書。新安手簡。按ニ入海ヲ埋修治ノ時ノ事ナルヘシ。○下畧。舊時ハ新兩替町ト稱シ、元ト銀座ノ所在ナルヲ以テ、或ハ銀座町ト呼ブ。慶長

十七年壬子徳川氏駿府ノ銀座ヲ此ニ移シ、大黒常是ニ命シテ貨幣ヲ鑄造セシム。寛政十二年庚申ニ至リ、之ヲ蛸殻町ニ移シ、其址ニ市塵ヲ設ク。今ノ二町目はレナリ。江戸圖說。府内備考。○下畧。

銀座二丁目

沿革 明治二年五月新兩替町二丁目三十間堀二丁目ヲ併テ一町ト爲シ、今名ニ改ム。本町書上。

銀座三丁目

沿革 明治二年新兩替町二丁目三十間堀三丁目ヲ併テ一町ト爲シ、今名ニ改ム。本町書上。○中畧。

銀座四丁目

沿革 本町ハ、一二三丁目ニ後レテ開ク。銀座ニ接スルヲ以テ、乃チ新兩替町ノ四丁目トス。明治二年五月今名ニ改ム。東京府志料。本町書上。—— 東京府誌

銀座址

日本橋區蛸殻町貳丁目ニアリ。慶長六年辛卯五月徳川氏銀座ヲ伏見ニ建テ、兩替町堺商人大黒屋常是ニ命シテ銀貨ヲ改鑄スルヲ掌ラシム。京監拔ト云。

正十年家康伊賀越ノ時、常是功アリ、故ニ之ヲ命ス。同十一年丙午別ニ駿府ニ建テ、同十三年戊申伏見銀座ヲ京都室町通ト鳥丸通ノ間。ニ移シ、同十七年壬子駿府銀座ヲ江戸ニ移シ、京橋ノ南ニ於テ、四町ノ地ヲ給シ、是ヲ銀座ト稱ス。安永八年銀座由緒書。寛政二年庚申之ヲ此地ニ移ス。此地舊酒井氏雅樂頭。邸ニ屬ス。後之ヲ收メ、千八百坪餘ヲ以テ銀座トナシ、後又地若干ヲ加フ。明治ノ初之ヲ廢シ、市街地トス。

東京通志

靈山寺學寮
建置
靈山寺學寮
建置事蹟

靈山寺ヲ檀林トシ、學寮三十字ヲ建ツ。

○本所靈山寺記。續府内備考。

靈山寺學寮建置

ハ、

慶長十七年檀林の列に加へられ、學寮三十字を建賜せり。

本所靈山寺記

當寺○靈山寺。法幢檀林之儀也、慶長十七壬子依神君様嚴命被仰付、學寮三拾軒御建立被成下、第二世照譽了學代寛永三丙寅年迄相續仕ハ、然ニ第三世桑譽天嶺未年數故、大衆散在して集不申、仍法儀中絶仕罷在ハ、處、中絶之年數六十年、天嶺超也、存守、俊應之四人、檀林派譜相除イ。常憲院様御代貞享二乙丑年第六世親譽俊應歎願仕、依之檀林御再興被仰付ハ、以來引續當時迄、法燈相續仕ハ、

安居式目

- 一、皈敬三寶之事 就中勤行專之事。
- 祖師云、先勸大衆發願皈三寶等云云。
- 一、能化下知世出共、違背不可有事。
- 經云、雪山童子半偈投身等云云。
- 一、於衆中、佛世之儀付而、是非違亂、堅不可有之事。
- 祖師云、皈僧息諍論、同入和合海等云云。
- 一、敬上慈下之事。

祖師云、觀音頂戴冠中住等云云。敬上。觀音經云、宰官婆羅門婦女等云云。慈下。

一、每物自宗他宗外、應有分別、大衆同心、其旨可爲肝要事。

祖師云、慚愧懺悔等云云。

增上寺中興普光觀智國師
源 譽 花押

慶長十七年十一月朔日

大潮住寺付月行事中

檀林再興願書

一、靈山寺檀林ニ罷成ハ、儀也、慶長十七年從冬安居始り、寛永三年之夏迄相勤

市街恢弘時代

申。潰之儀を其節之住持未年數故大衆散在仕集不申其後之住持未年數又之病身故自願不申上。自爾以來可奉願時節無之。此度諸檀所御尋御座此付得折れ奉存奉願。

一、權現様御定被爲置關東十八ヶ寺檀林一寺闕儀歎ヶ敷奉存。此度御取立被遊被下進之權現様御誼義彌相立退者爲淨土一宗ニ御座此間奉願度奉存。

一、若檀林御取立可被遊之愚僧不當其器量階臘未熟ニ御座此間寺を差上可申。器量之仁に被仰付再檀林ニ御取立可被下之難有奉存。偏ニ奉願以上。

貞享二年十一月七日

靈山寺

俊應

寺社御奉行所

續府内備考

寺院創立轉

是年慶長十七年(紀元二二七二年) 寺院ノ創立及轉移シタル者若干有リ。紀文政寺社書上。續

府内備考。江戸名所記。改撰江戸志。日本洞上聯燈錄。

寺院創立轉

寺院創立轉移 概シテ舟入堀築造ニ伴フ市街計畫ニ從ヒテ轉移若クハ創立シタル者也。

泉岳寺

泉岳寺 外櫻田ニ創建ス。

萬松山泉岳寺

下野國富田大寺末 境内拜領地二万百八十五坪 内門前町屋千七百七十七坪

芝

起立野州富田大寺十一代建室宗賓和尚今川治部大輔義元舍弟神君様御同甲也。殊有道譽御歸依尤渥。右宗賓和尚得法之弟子宗關和尚俗姓今川氏道譽秀逸宗賓和尚同神君様台徳院様御歸依每度江城に被召出於殿中預齋會法問商量數回屢禪話御參得被爲遊。無程大寺住職被仰付則大寺十二代也。雖然住所依爲遠境兩御所様御相談之上慶長十七壬子年於外櫻田寺地拜領伽藍造營開山と被成山號萬松寺号泉岳者專奉祝松平之孫枝榮于萬歲徳川之源泉溢于海岳之儀之旨宗關和尚達上聞兩御所様有御滿悅而蒙台評號萬松山泉岳寺。略。中

寺中

功雲院中

陽壽院中

門良院中

續府内備考

當寺泉岳寺ハ門庵和尚の開基として洞家の末流たり其かみハ安座部の臺にありしを正保年中に此處高に引うつさる。 江戸名所記

市街恢弘時代

江戸名所記云、當寺○泉寺阿左布にありしり、正保年中此地に移さると。按するに、此寺の鐘銘によれば、慶長年中神祖の命を蒙り、宗關禪師當寺を外櫻田に草創せり。其後寛永十八年辛巳此地にうつると。是に據り、麻布よりうつりしと云ひ、うけがひかたし。

改撰江戸志

武州萬松山泉岳寺門菴宗關禪師、駿州源氏子。登具後、往謁朴堂、次見韓嶺及參建室。一日室舉釋迦彌勒、猶是他奴、且道他是阿誰。師劃然有然、有省、乃曰、花須連夜發、莫待曉風吹。室曰、也只道得一半。後出世、永平、次遷大中、衲子輻湊、叢林改觀。師倦、應接辭院上堂、大平既致高枕、無憂、休拈三尺劍、罷架一張弓、還馬於華山之陽、放牛於桃林之野。卓拄杖曰、五湖煙浪有誰爭。江府檀信、就城南創龍雲院、延師居之。後移基於澁谷、改曰長谷。進院示衆曰、山圍仙壘、水遶佳城、言中有響、句下分明。當山有愆麼、佳境今朝是、呈何瑞色。良久曰、異苗繁茂、處深密、固靈根、後得萬松山、勝境創建。精藍榜曰、泉岳、黑白駿奔、如衆市、遂鬱然成一、方叢席上堂、嶽之云、高千峰、聳秀咸慕、嶽之嵯峨、好箇圓覺伽藍、九旬密密、不露鋒銛、法王法令拳拳奉行。良久、擊拂子曰、推開明月戶、氣象恰似秋。元和七年十一月廿六日坐化、享年七十六。

日本洞上聯燈錄

證誠寺

證誠寺 霞ヶ關ヨリ西久保ニ轉ス。

築地本願寺末
下高輪臺町
淨土眞宗 長命山桐樹院證誠寺

一、境内古跡拜領地坪數參千參拾參坪。

外ニ御年貢地坪數四百拾四坪。

右境内之義、往古之武州豊島郡櫻田村霞ヶ關ニ有之。然處權現様御入國後、慶長十七壬子年右櫻田村霞ヶ關之地所寺澤志摩守殿御屋敷ニ相成、地所御用ニ付被召上、其節爲代地、於西ノ久保龍土丸山ニ、本田佐渡守殿小屋場地所拜領被仰付、堂舎再建仕○下。

文政寺社書上

西照寺

西照寺 日比谷ヨリ金杉一丁目ニ轉ス。

相州鎌倉郡山田村德翁寺末
芝白金
曹洞宗 普明山西照寺

一、境内 御年貢地坪數貳千七百七拾九坪。

内 白金村分千四百拾四坪。
今里村分七百七拾八坪。
白金町分五百六拾壹坪。

右古來之新橋日毘谷ニ御座、處權現様御入國已後、所替被仰付、慶長十七壬子年芝金杉壹丁目ニ拜領地被下引移り、三十年餘罷在。寛永廿癸未年金杉出火ニ付、寺類焼仕、其節亦御用地ニ被召上、同芝三丁目之裏濱計ニ本屋鋪

市街恢弘時代

五九三

半分拜領地被下、地狭く寺再興難成故度々御訴訟申上ひ處、御次手之時分重
ゝ可被下旨被仰聞、延々ニ罷成ひ間、寛文五乙巳年只今之處白金壹丁目高原
寺屋鋪御座ひ地所買求罷在ひ。

普明山西照寺

芝白金

起立之儀ハ、古來新橋日比谷ニ御座ひ所、權現様御入國已後所替被仰付、慶長
十七壬子年芝金杉一丁目ニ拜領地被下引移り、三十年餘罷在ひ。

續府内備考

淨輪寺

淨輪寺 平川邊ヨリ牛込門外ニ移ル。

常榮山淨輪寺

牛込七軒寺町

當寺起立之儀ハ、江州佐々木家之末葉出家致、主家より傳し毘沙門天王文學
上人より主家ニ被進ひを傳來仕、御當地ニ一宇建立致ひ。慶長十七子年迄
平川邊ニ有之ひ處、其後寛永四卯年牛込御門外通りニ御替地被仰付住居罷
在ひ。

續府内備考

安樂寺

安樂寺 麴町清水谷ニ寺地ヲ受ク。

東叡山末
四ッ谷南寺町
天台宗 醫王山延命院安樂寺

一、境内表貳拾間、奥行三拾五間、惣境内七百坪、不殘拜領地ニ御座ひ。○中

一、起立文祿二癸巳年。

一、當寺往古ハ麴町清水谷ニ慶長十七壬子年寺地拜領罷在ひ處。○下

文政寺社書上

常福寺

常福寺 開山本祐慶長十七年住職ト傳フルコト、左記ノ如シ。或ハ是年ノ創立

歟。

武州豐島郡淺草新堀端
天台宗 常福寺

但、東叡山末寺格大寺

山号 清瀧山。 院号 不動院。○中

一、開山權大僧都法印本祐

但、南光坊天海大僧正弟子筋之僧之由申傳へひ。慶長十七年住職、正保四年
示寂、開關より當文政八酉年迄貳百拾四年ニ相成申ひ。

一、開基津輕二代越中守信牧津梁院權大僧都寛海、寛永八年正月十四日當寺
へ葬シ、後上野へ改葬。

一、境内六百三拾坪 故跡拜領地。

市街恢弘時代

六百三拾坪之内

古門前地。御町奉行御支配。

一、門前町屋百坪餘

但、家數拾軒。

一、新堀切割之節、新堀通りニ有境内之坪數五拾壹坪餘之所上り地ニ相成追
る代地可被下し筈之段申傳ニ御座也。

一、當院最初ニ御曲輪之内於龍口寺院並不動堂稻荷社等造立、其後芝口御門
ニ有代地被下置、其後八丁堀ニ有代地被下置、其後只今之淺草新堀端ニ有地
面被下置也、寛永年中ニ可有御座也。年月日曉互相譯り不申也。右寺院度々
造立之儀也、由緒有之、津輕家施主ニ御座也。其後連綿以今津輕家ノ本院再建
修復向共ニ扶助也。佛供料高百石寄附ニ御座也。前書申上り相残り也向も、
明戊年○文政九年同家より再建寄附可被致ニ御座也。文政寺社書上

一、古越中守信牧公様○津東叡山開基慈眼大師南光坊天海大僧正御事御歸依也。天台
圓頓戒之御血脈被遊御請、海之一字を御繼、寛海様と御法号御稱、猶又於當地
天台宗之御菩提所被遊御取立度旨、大師に被遊御願也。付、御弟子筋之内ニ
本祐と申德儀之僧、幸信牧公様兼る御懇意之御筋、御座也。故、右本祐大師改
る御引附、師檀之御契約被遊御郭内辰之口より於る、寺院并不動堂其外稻荷社

御建立有之也處、其後御用地ニ被召上、芝口御門ニ有代地被下置也。其節公儀
に大師并御屋鋪を被成御願、初る御菩提所御建立、清瀧山不動院常福寺と大
師の稱号被下置、其後御府内繁榮ニ付、右寺地八丁堀ニ有被下置、其後又々淺
草新堀只今之場所の寺地拜領被仰付、其度々御屋鋪を寺院御引取被遊御建
立也。
御屋鋪○津輕氏に常福寺御由緒畧覺書
常福寺 新堀端○市内ニアリ。清瀧山不動院ト號ス。天台宗東叡山末、古へ起
立ノ地ハ、郭内龍ノ口ノホトリト傳フ。後芝口、又八丁堀ニ移轉シ、寛永ノ頃、今
ノ寺地ヲ拜賜スト云フ。
府内誌殘編

永隆寺

永隆寺 是頃神田寺町ニ起立ス。

京都本能寺尼ヶ崎本興寺兩本寺

日蓮法花宗 本所出村町 春陽山 永隆寺

一、拜領地境内間口南北三拾八間、奥行東西貳拾五間四尺八寸。此坪數合九百
八拾坪五合。○中

一、當寺開基ハ利玄坊也申、生國參州之産也。乍恐權現様奉蒙御懇之御意、御
入國已後度々被仰付登城圍基之御相手ニ被爲召出、御意ニ相叶ヒ、其上利玄
其方儀如何様之望有之也哉。御上意有之、利玄坊奉申上り様ハ、愚僧儀爲差

市街恢弘時代

五九七

懇望無御座ハ奉申上レ得ル、御上意ニ其方沙門ニ候得ル菴地一ヶ處可被取立被爲仰付其節之地所ハ於神田寺町ニ申所ニ被下置候。但シ其頃之地坪數如何程御坐ハ哉、度々類焼ニ付、書物等焼失仕相分リ不申候。其頃ハ門前地も拜領仕ル。尤寺地之内ニ門前借家ヲ建爲致住居候。夫ハ唯今以引續借家建置申ル。寺建立ハ慶長十七八年之頃ニ申傳ル。其節ハ永隆寺ニ只今之通寺号ニ願上ル趣ニ御座ル。其後右地所火除ニ相成候ニ付、唯今之上野谷中清水御門之外ニ替地被仰付其時も門前借家被爲仰付寺地之内ニ門前借家仕候。

文政寺社書上

法藏院

法藏院 神田北寺町ニ起立ス。

淺草新堀東光院末谷中天台宗 光雲山元導寺法藏院

一、境内拜領地表口廿間。裏行廿間。坪數四百坪。

東照權現様御代慶長十七壬子年二月十五日神田北寺町ニ拜領仕ル。御奉行米津勘兵衛殿、島田治兵衛殿。

文政寺社書上

泰然寺

泰然寺 神田北寺町ニ起立ス。

指上申手形之事天明三卯年迄貳百七拾貳年ニ成ル。

一、寺起立 慶長十七年壬子ハ今年迄五拾七年ニ御座ル事。

一、寺地 拜領地ニ御座ル事。

一、寺内間數 表裏六百坪御座ル事。

右之通相違無御座ル事。

淺草東光院末

寛文八申年四月廿九日

天台宗 泰然寺

岡部庄左衛門様

中野傳右衛門様

文政寺社書上

泰然寺 西寺町ニアリ。鶴林山實相院ト号ス。淺草東光院ノ末ナリ。慶長十七年二月神田北寺町ニ寺地ヲ拜賜シテ創建。○下畧。 府内誌殘編

地福院

地福院 四谷伊賀町ニ起立ス。

山城城琳寺末四ッ谷北寺町天台宗 正覺山永徳寺地福院○中畧。

右往古ハ四ッ谷伊賀町ニ處御用地ニ被召上、寛永十一年於當所替地被下置ル。

一、開闢起立之義ハ、慶長十七壬子年ニ御座ル。其頃ハ青山敎學院末ニ御座ル。○下畧。 文政寺社書上

海藏寺

海藏寺 駒込本村○市内本郷區。起立ス。

市街恢弘時代

橋場總泉寺末本郷道分
曹洞宗 大智山海藏寺

一、大智山富明院海藏寺之尾州沼内海を引移し年號相知不申、其後鎌田次郎末裔内海氏開基、駒込本村之内有之、其後富士前に引移、始號富明山と、後大智山下改、起立天文元壬辰年至當文政九丙戌年迄貳百九拾五年相成し、開山勝庵和尚示寂天文廿三年甲寅七月十五日、至當文政九丙戌年貳百七拾三年に相成し。

一、御朱印境内八石餘開口 境内之外の寺領無之。大猷院様御鷹野之節、

兩度被爲御腰掛、寺僧天達御目見被仰付、蒙御意、其後御代官所に相願、境内諸御朱印被下置し。〇中

一、開基内海彦右衛門慶長十七子年八月十一日卒ス。法名氣山道運居士、尾州之海藏寺葬。〇中

一、境内六千四拾八坪表、開口六拾貳間。裏行百九間貳尺。内千坪眞淨寺の貸地。尤天明元丑年初

ニ御座し。

——文政寺社書上

永隆寺門前〇市内。是頃起立ス。〇文政寺社書上。

永隆寺門前起立 慶長十七八年頃ニ在リタル者歟。

永隆寺門前起立
永隆寺門前起立事蹟

京都本能寺尼ヶ崎本興寺兩本寺
日蓮宗 春陽山 永隆寺

〇上 但し間口三拾八間之内、六間ニ奥行五間、間口五間ニ奥行貳拾五間四尺八寸、此坪數凡百五拾七坪程。

右門前借家地

一、當寺開基利玄坊〇上 御上意ニ其方沙門ニ得、菴地一ヶ處可被取立被

爲仰付、其節之地所、於神田寺町と申所ニ被下置し。但シ其頃之地坪數如何程御座し哉、度々類焼ニ

付、書物等焼失仕、相分り不申し。其頃、門前地も拜領仕し。尤寺地之内ニ門前借家ヲ建、爲致

住居し。夫々唯今以引續借家建置申し。寺建立ハ慶長十七八年頃と申傳し。〇下

——文政寺社書上

本所永隆寺門前

一、永隆寺之京都本能寺攝津本興寺兩末日蓮宗ニ、往古年月不相知、谷中ニ

る地所拜領致し罷在、地坪等と相知不申、其砌も門前町屋有之、借家等御座し。

〇下 府内備考

唐津〇肥前。城主寺澤廣高〇志摩。是頃邸地ヲ櫻田村〇市内ニ賜フ。〇文

政寺社書上。

市街恢弘時代

寺澤氏賜邸

寺澤氏賜邸事蹟

寺澤氏賜邸 文政寺社書上高輪證誠寺書上ニ、

○上 權現様御入國後慶長十七壬子年、右櫻田村霞ヶ關之地所、寺澤志摩守殿
○廣 御屋敷ニ相成、地所御用ニ付被召上。○下

ト見ユ。是頃寺澤廣高ニ邸地ヲ賜ヒタルヲ推ス可シ。往古江戸繪圖御成橋内ニ
「寺澤志摩」ト有リ。南部山城邸ヲ東ニシ、加藤式部邸ヲ西ニスル者是乎。

淺草寺領給賜事蹟

十八年癸丑○慶長○紀元三月十三日辛未○辛未、三淺草寺領給ス。○淺草寺文書傳法院書上。慶淺草寺○市内

淺草寺領給賜事蹟

淺草寺領給賜 慶長十八年家康ヨリ淺草寺ニ寺領五百石ノ寄附有リ、翌十九年秀忠ヨリ朱印ヲ與フ。

武藏國豊島郡 淺草寺

一、寺領五百石

此内貳百五拾石別當分、但修理免共。

一、衆徒跡、猥平僧不可住居、同無寺ニ有、明屋敷不可抱置事。

一、村諸法度可隨寺務之下知、并公用造營之時不勤其役、坊領可召放事。

一、山林竹木門前屋敷、如舊規諸役令免許、莫。

右、堅可守此旨者也。

慶長十八年三月十三日

御黒印○徳川家康

淺草寺文書

一書令啓上ハ。淺草觀音院、去春南光坊同道ニ有參府ハ。於御前論議被申上、御感ハ。○駿府記、十八日○慶長十八年二月、天台座主正學院僧正、藥樹院、五智院、禪行坊、禪定院、多武峯竹林坊、武州川越仙波南光坊僧正、仙波中院、淺草安養院、觀音院、江戸神田立法寺、上野干妙寺僧正、其外卅人、事利堅横之論議。淺草寺御朱印之儀相入之手立、何れも面々胸中盡す云々。下記ス者是歟。申上、則頂戴被申、從是南光坊同道ニ有上洛、又此比下府ハ有、御目見被仕ハ。則御暇被遣、下向被申ハ。公方様へ右之様子御取成被仰上被遣ハ。觀者院忝可被存、猶期後音、不能詳ハ。恐惶謹言。

七月十八日○慶長十八年歟

金地院○崇傳

本多佐渡守○正様

人々御中

右同文言ニ有、土井大炊殿○利へも遣ス

本光國師日記

往古淺草寺坊之儀ハ、大小屋ハ唱候。御入國後、慶長中春、權現様御立願被爲ハ在、當山觀音へ御參詣之砌、別當忠豪上人被召出、於御座之間、御目見被仰付、御上意ニ有別當之稱號御尋候ハ、大小屋ハ相唱候儀如何ニ付、觀音院ハ相唱可申

市街恢弘時代

六〇三

旨被仰付候由申傳候。忠豪慶長十四年八月四日化。第二世忠尊僧正寛永十六年霜月十八日化。○朝野舊聞哀稿云フ、按する、寺記よまて、忠尊俗縁ハ遠山丹波守直景ヲ外孫にして、伊丹三河守政富ヲ子なり。前住忠豪も外姪たる、茂もて後住の僧にせし、有然る、今淺草寺此口碑、傳ふる所よれ、忠尊實ハ東照宮の御落胤なり、實母此所縁をもて政富ヲ子とて、後觀音院に住せ、さる故、嘉御の後元和三年紅葉山御宮の別當職、茂命せられ、武藏國久良岐郡坂本村政富ヲ舊領の内よて、別當料を御寄附あり、今よ至るまで淺草寺子院よて御宮の事にあつかるハ此故なり。

傳法院書上○朝野舊聞哀藁收。

一、御朱印淺草寺領五百石。武藏國豐島郡之内ニ被下置也。

慶長十八癸丑年三月十三日東照宮様御黒印、其後慶長十九年台徳院様御黒印頂戴被仰付、寛永十三年大猷院様御朱印ニ被成下置、其後御代々様御朱印頂戴仕罷在也。外ニ、

一、御朱印貳百石。智樂院權僧正忠尊之時、紅葉山御別當料。

右ニ寛永十三丙子年武州久良岐郡金澤之内坂本村ニ被下置也。但、上野御兼帶以後御朱印之儀ニ上野御別當所ニ有之也。

御朱印地之事

淺草寺領分田畑門前町屋共御朱印地ニ有、地頭淺草寺ノ年貢諸役往古方取立申也。其

一、門前町屋敷 間口、往還を除都合四千八百三拾八間餘。

一、町名之事

並木町。駒形町。諏訪町。三間町。田原町。但三丁。西仲町。東仲町。茶屋町。材木町。花川戸町。山之宿町。聖天町。聖天横町。瓦町。淺草町。田町。但貳丁。北馬道町。南馬道町。南馬道新町。醫王院門前。齋頭門前。常音門前。番屋鋪。割殘屋敷。都合貳拾四ヶ所。

一、田畑之事

武州豐嶋郡千束村。

畑六町五畝五拾四步。

田三拾貳丁四反七畝五拾六步。

右ニ三ヶ町ヲ唱、山之宿町名主三郎左衛門、材木町名主權左衛門、花川戸町年寄清左衛門、右之者共草分ニ有、往古方支配仕罷居也。

一、門前町屋願濟之年月之事

右ニ領分、往古百姓共畑等、家作いたし罷在也。處、御入國以後追々御繁榮ニ相成、家作等、後建續、自然ニ町屋ニ相成也。儀ニ有、年久敷御座也。間、年月之義ニ

相分兼ひ。右往古地頭直支配仕罷在ひ處、御府内段、御繁榮ニ相成ひニ付、地頭支配不行届ひ間、御奉行所へ申上、門前人之儀、江戸町、同様に町御奉行所御支配被成下ひ様、萬治二年相願ひ所、願之通被仰付ひ。

一、東、中谷西、日輪寺門前、大下水道、南、雷神門、北、竹門迄、淺草寺境内と相唱申ひ。

文政寺社書上

淺草南馬道町

一、町内之義、往古、淺草寺境内町屋、本坊并境内向掃除等致、不依何事、諸役相勤罷在ひ町人共ニ御座ひ處、爲助成觀音境内に罷出、櫃を置、楊枝并香線等致、渡世罷在、其頃、住居致ひ者共二十九人有之、往古、名主義も馬道町并境内共兩支配仕ひ義ニ御座ひ。家持町人廿九人之内、重立ひ者兩三人組頭と相唱、境内諸向相勤來申ひ。右二十九人之者共追、親類又と縁者等之者代りニ差出渡世爲致ひ儀、依之馬道町家持二十九人之義、櫃親と相唱、代りニ罷出渡世致ひものは櫃子と相唱來申ひ。尤二十九人楊枝見世茶見世之儀、境内諸用相勤ひニ付、役見世と相唱、無地代ニ渡世仕ひ。且境内市兩日市商人共地代之儀も、古來、馬道町町人共、淺草寺、被下置境内

向諸入用取賦并馬道町町入用、差加へニ相成申ひ。尤舊記等致、燒失、年号等相知不申ひニ付、申傳ニ御座ひ。

淺草南馬道町
名主 喜 右 衛 門

淺草寺領御場内ニ在之、時々御成之節、御場御用向被仰付候所、出情相勤ひ段御掛り御鳥見方、被仰立ひニ付、土井大炊頭様、御伺之上、古川山城守様、被仰渡ひ趣、御鷹野御役所ニ、文化十四丑年正月三日御場先野羽織着用可致旨、御鷹野御役所大貫治右衛門様、被仰渡、冥加至極難、有仕合奉、存ひ。其段町御奉行岩瀬加賀守様、永田備後守様、兩御番所、御訴申上ひ。

淺草南馬道町藤兵衛店
正直 勘 左 衛 門

一、私先祖之義、寛永年中本所中之郷邊ニ住致、淺草寺境内當時住居仕ひ場所、の芦簣張ニ、戸板之上、黒椀ニ、生そは盛り渡世致、其頃、直段下直ニ澤山有之、ニ付、其砌、正直と申觸し、其後町屋ニ相成、右場所、家作致住居仕申ひ。代々長壽ニ、是迄七代相續仕ひ。寛保三年ノ春、あく、拔そは相知申ひ義ニ御座ひ。以上。

酉十月

淺草南馬道町藤兵衛店
正直 勘 左 衛 門 印

但し元祖勘左衛門義之、下野佐野出生之、同人伴伊勢松に相譲り在所に引籠申ひ。右勘左衛門義其後貞享元年子八月十三日に病死仕、則法名を志やうと申ひ。寺の田舎之義に御座はる、相分り不申ひ。

淺草北馬道町

一、町名之起并町家ニ相成ひ起立書留等、焼失ニ付相分り不申、淺草寺境内町屋ニ有地頭淺草寺へ諸役相勤申ひ。町方御支配ニ相成ひ年代相分不申候。
一、淺草北馬道町東西に拾五間半、南北に三拾六間餘、但し道幅半分共。
一、毎年十二月十七日十八日淺草寺市相立ひ節、家内ニ有商ひ仕ひ。
一、同町飛地之分凡貳百坪餘。

但、同所南馬道町東側ニ貳ヶ所有之ひ。

右飛地之内間口貳間貳尺、奥行五間半之地所、同所花川戸町通行道ニ相成居申ひ。

淺草寺境内圍外南北に凡八間、東西に百間餘之地所。

但、字僧正が馬場を唱申ひ。當時淺草寺持ニ有明地ニ相成居申ひ。

淺草諏訪町

右町名之儀も町内ニ諏訪之社有之付、名目ニ相成ひ義も奉存ひ。淺草寺領ニ多御年貢地ニ御座は。町地ニ相成ひ譯を、去文政四巳四月十日町内類焼之節、古書付諸帳面とも焼失仕相分り不申ひ。尤其段町御奉行所は御届申上置ひ。
一、市定日毎年十二月十七日十八日觀音市。

一、拜領屋敷、西之御丸奥御醫師吉田梅庵拜領屋敷、東側南角表田舎間拾壹間四尺五寸、南裏行二拾九間、北裏行二拾七間二尺、此坪數三百三拾坪九合五夕。此屋敷先規銀座御役所ニ有之處、正徳六申正月十八日類焼已後、御役所相止、町内は御預ケニ相成居ひ處、享保貳酉九月廿一日拜領ニ相成申ひ。御目見醫師赤松休庵拜領屋敷、東側南角ニ貳軒目、表田舎間拾貳間五寸、裏幅拾三間四尺五寸、南裏行貳拾七間貳尺、北裏行貳拾五間壹尺五寸、此坪數三百三拾九坪五合八夕。此屋敷先規銀座御役所ニ有之處、正徳六申正月十八日焼失已後、御役所相止、町内は御預ケニ相成居ひ所、享保二酉九月廿二日拜領ニ相成申ひ。

御本丸表坊主幸田利三拜領屋敷、西側北角ニ拾三軒目、表田舎間六間、裏行貳拾間、此坪數百貳拾坪。此屋敷往古黒船番屋敷跡にて、淺草寺領除き、巳前白鳥

宗覺上り屋敷ニ御座ル所、寶曆六寅年拜領ニ相成申ル。月日曖々相知不申ル。公役銀壹ヶ年銀拾貳匁宛差出申ル。

往古黒船番屋敷跡、淺草寺領除き字松次郎屋敷ニ唱來ル。表田舎間六間、奥行貳拾間、此坪數百貳拾坪、公役銀壹ヶ年銀二拾四匁宛指出申ル。

一、町内南之方黒舟丁境横町近邊、町々物揚場御座ル。此所往古堀田筑前守様物揚場跡ニ御座ル。

一、町内西側諏訪之社境内、間口三間半、裏行拾七間、本社間口壹丈、奥行九尺、假拜殿貳間四方、末社稻荷社間口六尺、奥行五尺、三峯社三尺四方、駒寄六尺ニ五尺八寸、鳥居高サ壹丈壹尺五寸、横九尺、間口八尺、高サ九尺五寸。

別當淺草寺衆徒修善院、右諏訪社之儀々、往古有來ル事ニて、別ニ縁記々録申傳等も無御座ル。先年來相知不申ル。

同所南隣飯綱社地、道幅三尺、裏行拾七間、奥ニ四間四方之社地御座ル。別當淺草三間町寶幢院、但當時飯綱權現實幢院ニ致安置ルニ付、跡地之儀々諏訪社境内ニ借込置申ル。

一、町内名主三右衛門祖父次左衛門義、年來實跡ニ役義相勤ルニ付、寛政二戊

十月六日池田筑後守様於御番所、芝田町九丁外八ヶ町名主役被仰付ル。當時跡名主之儀々、悴與四郎被仰付、肝煎役迄相勤申ル。尙三右衛門迄八代相續名主役相勤申ル。其外由緒系圖古書付古器物等所持之者一切無御座ル。

一、高札町内兩之隅ニ川端ニ御座ル。

但、高札板、高サ五尺七寸五分、駒寄四尺八寸四方。厚壹寸、横二尺、

表書ニ、淺草川筋南ノ諏訪町より北は聖天町之間ニおゐて殺生停止之、若違背ノ輩あらハ曲事トスヘキ者也。

五月日

右六行ニ相認有之。

右高札之儀々、元祿五年申七月中寺社御奉行戸田能登守様ニ別當傳法院奉願、同年九月廿七日相渡申ル。

一、右諏訪町川岸通撫垂地之内ニ物置場十三ヶ所御座候。

文政町方書上

三間町

一、町之起候譯、草分人之名、町地ニ相成候年代、引地代地築立之分、往古村方ニ有之ル節之申傳、相知不申ル。町御奉行所御支配ニ有、淺草寺年貢地ニ有御

座也。

一、反別二町六反四畝廿九步壹合九夕。峽田領る唱申候。

駒形町

一、町名之起也。譯之、町内馬頭觀音之堂、往古有之、依る駒形町と相唱也。草分人之名、町地と相成也。年代、引地地築立地之分、往古村方と有之也。節之申傳、相知不申也。

一、町御奉行御支配とる淺草寺御年貢地と御座也。

一、町内西側南北九拾六間、東側南北百拾壹間、南之方東西七拾七間、北之方東西四拾六間半餘。

一、反別壹町壹步、峽田領る唱申也。

一、大川此邊名宮戸川と往古有唱也。駒形堂後之所、鎌ヶ淵と唱也。由、尤來歴相知不申也。右堂後と駒形堂清水と申傳也。場所、今以涌出申也。

一、河岸地并物置場、河岸付之場所、銘々屋敷、附河岸地と唱、炭薪置場又と土藏等有之、尤地頭淺草寺に年貢差出來也。事、但、物置拾四ヶ所、土藏壹ヶ所。

一、駒形堂 淺草寺持

一、古碑壹ヶ所 駒形堂脇と御座也。

西仲町

一、西仲町之儀也、淺草寺領とる年貢地と有之、御傳馬役人足地頭淺草寺に相勤來也。右町往古と中畑と唱也。所、寛永二十未年四月十五日町割直シ御檢地有之、仲町と相唱、万治二亥年十月中町御奉行神尾備前守様勝。元村越長門守

様勝。御勤役之節、町方御支配と相成、其後寛文五丑年五月中、東仲町西仲町と相分り申也。

一、町内東西百拾八間半、南北西之方とる五拾九間、中程とる三拾壹間半、東之方とる六拾貳間、但道幅半分共。

一、町御奉行所御支配とる淺草寺年貢地とる御座也。

一、反別壹町四反九畝拾五步、峽田領る唱申也。

一、檢地之年代之儀也、寛永二十未年四月中、町割御檢地有之也。其節御役人方御姓名相知不申也。

一、町内小名西側田原町貳丁目、東側西仲町、此横町を里俗と竈横町と唱申也。

並木町に續横町大佛横丁を唱申し。西仲町中通を古着店を唱申し。

一、

西仲町名主 舊家 關口吉左衛門

右吉左衛門遠祖、本國下野佐野領にあり、關口大學之助と申、武州淺草寺境内に住居仕し由。同人長男久左衛門儀、寛永三寅年四月廿二日淺草寺領百石之分代官被申付罷在し由。其後右久左衛門長男久左衛門、并東仲町名主稻垣喜平次先祖庄左衛門兩人に願之上、右仲町未々中畑と申し節、同村開穗仕しに付、寛永十三子年中兩人共改る名主役被申付し。右久左衛門弟長兵衛儀を、駒形町に別家仕是又同所名主役相勤罷在し。然ル處寛永二十未年四月中町割直し、御檢地有之、中町と一手に相唱、万治二亥年中町御奉行御支配に相成、寛文五丑年五月中東仲町西仲町と相分り、西仲町之分、先祖久左衛門を當吉左衛門迄拾代名主役相續仕、淺草寺檀家にあり、古墳之儀と同寺僧正廟所圍内に之あり。且又草割所持地面等後有之に處、不如意に罷成、去ル寶曆之比無餘義、他に譲り渡し得共、往古之形チを失ひ、儀數ヶ敷存、當時小券之地所に引移り所持仕罷在、年貢諸役共地頭を被差免罷在し。尤年來之儀故、舊記等燒失仕、巨細之儀と相分り兼申し。

本文舊地之儀と、草創地にあり、同町南側東角表間口田舎間八間、裏行同拾九間半有之、所持仕し處、去ル寶曆之頃讓渡申し。由來と分兼し得共、古來を持傳し品、

一、旗棹 壹本。

一、鎗 壹本。

一、突棒 壹本。

由緒書

一、本國下野國佐野領

關口大學之助

一生國武藏國

右大學之助と申者、私遠祖にあり、雷神門左り角今日音院住居被致し所に罷在、郷士之由申傳し得共、度々之火災にあり、書物等燒失仕、年月等慥に相分兼申し。一、右大學之助伴同苗久左衛門義、凡慶長年中之比、中畑と申所に田畑所持仕、寛永十三子年迄四拾壹ヶ年程住居罷在し處、同年九月廿日死去仕、法名月峯院窓心居士、并同人妻義と、明曆二申年十月四日是又死去仕、法名良性院松榮秋月大姉、右兩人と子細不知、御當山御本坊奥に有之に、大僧正様御廟所御圍内に同様墓所有之、其後年月不知、御一山之内長壽院に御預ヶ被遊し由申

傳依之唯今こ至り、毎年七月十二日御本坊御施餓鬼之節、私并駒形町名主同苗太一郎、右兩家の御玄關の御案内有之罷出、先祖墓所並御施餓鬼に參詣仕、御殿に有之の位牌に焼香仕來り、且是迄兩家共新葬有之の節に、御別當代様長壽院に御焼香に被遊御出、其節靈前に御持參之品より有之、尤御差合被爲在候節に、御一山之御役者中之内、爲御名代被成御越儀に御座り。

寛永三十三年の寛文元年丑年迄二十六ヶ年相續仕。

右久左衛門惣領
同苗久左衛門
後吉左衛門と改名。

此者の名主役相勤申し。

右久左衛門儀、同様中畑村に住居仕罷在り處、寛永年中、同人并同村庄左衛門と申、此者儀に東仲町名主次郎右衛門先祖に有之、右兩人に同村開穗仕候に付、爲御褒美兩人に初る名主役被仰付、其砌に大僧正様并御代官永峰勘兵衛様金子又兵衛様御勤役中に有之、其後寛永二十未年四月十五日町割直し御檢地に有之の節に、中町と相唱、兩人に支配致來り處、寛文五丑年五月中、東西仲町と相分り、則西仲町之方吉左衛門支配に相成申し、尤寛永年中之比に、町屋敷地所御年貢其外諸役共御免有之、浚地に被下置り由申傳へ、其後永續中不如意に罷成、只今ころと少分之地所持仕り、且又其頃田畑御地頭覺園

院僧正様之節、何故に哉奉差上、唯今幸龍寺前慶印寺脇に有之畑に御座り、既に貳拾年程已前迄、聊田畑相殘所持罷在り處、其後右畑預け置り百姓に差遣し申し。

寛文二年の延寶元候	名主二代目	右	吉	左衛門
延寶二寅年の元禄十一寅年迄	同三代目	右	吉	左衛門
元禄十二卯年の元文元辰年迄	同四代目	右	吉	左衛門
元文二巳年の寶暦六子年迄	同五代目	右	吉	左衛門
寶暦七丑年の天明八辰年迄	同六代目	右	吉	左衛門
寶暦九卯年の天明四辰年迄	同七代目	右	吉	左衛門
天明五巳年の當文化八未年迄	同八代目	右	吉	左衛門

中興先祖の當文化八未年迄凡貳百拾七ヶ年相續仕り、名主役被仰付の節に、當文化八未年迄百七拾六年相勤申し。

右淺草寺に書出し扣に御座り。

東仲町

一、往古之代々百姓町屋に東仲畑村と申傳り、其後寛永二十未年四月十五

日町割直シ御檢地有之、仲町と相唱申ハ。万治二亥年十月中町御奉行神尾備前守様勝。村越長門守様勝。吉御勤役之節、町方御支配ニ相成、其後寛文五丑年五月中の東仲町西仲町と相分リ由申傳ハ。

一、町内東西に百拾四間、南北に五拾壹間。

一、淺草寺御年貢地ニ有、町御奉行所御支配ニ有、御座ハ。

一、峽田領中畑村之由申傳ハ。

一、反別無之地坪五千五百貳拾參坪九合五夕。

一、廣小路北之方町屋、往古に淺草寺火除地之由申傳ハ得共、年曆不知、沾券地ニ相成ハ。田原町三丁目境に淺草寺裏門角迄、間口五拾貳間、貳尺五寸程、裏行三拾九間程。

一、小名

一、中程大通りを廣小路と相唱申ハ。南北西之方ニ有、四拾七間五尺、中程ニ有、八拾九間、東之方ニ有、三拾六間、貳尺五寸。

一、同所廣小路南之方中横町杵屋横町と申ハ。

一、同所廣小路南之方上横町、常陸屋横町と申ハ。

一、同所南之方上横町ニ以前秋葉滿願寺所持地面之處、今以滿願寺長屋と里俗申之ハ。

一、廣小路南側角地面ニ、以前惠比須之宮有之、今以惠比須長屋と里俗申シハ。

一、同所南之方西中町向側、里俗古着店と申ハ。

一、一月寺番所院代西向寺右に寺社御奉行御支配ニ有、享保年中の當町ニ罷在、尤御用向之儀を、御入國之砌に御府内ニ罷居相勤來リハ。

一、名主 喜平次

右名主喜平次初代庄左衛門儀を、寛永十三丙子年相州小田原に當所に罷越、百姓に罷在ハ處、西仲町名主吉左衛門先祖久左衛門、私先祖庄左衛門兩人に願之上、右町未中畑と申ハ節、同村開穗仕ハに付、寛永十三子年中、兩人共改る名主役被申付ハ。然ル處、寛永二十未年中町割直シ御檢地有之、中町と一手ニ相唱、万治二亥年中町御奉行御支配ニ相成、寛文五丑年五月中東仲町西仲町と相分リ由申傳ハ。名主喜平次先祖庄左衛門儀、中横町ニ有、表間口五間之處、草創地ニ有之、地頭淺草寺に諸役年貢等御免有之、所持罷在ハ處、元祿之比身上不如意ニ罷成、他に相譲リ由申傳ハ。

淺草寺裏門先番屋鋪

一、右番屋敷之儀を、寛永二十癸未年四月十五日東仲町町割有之儀、割殘地
 二有之儀。裏門廣小路角ニ有、此所に淺草寺を木戸番人ニ相附儀者、無年貢ニ
 有町入用不差出、右ニ付地面淺草寺を番人の預ケニ相成居申儀。
 一、淺草寺領ニ有、町御奉行御支配ニ御座儀。
 一、表間口四間、裏行四間、此坪數拾六坪御座儀。

並木町

一、右を往古淺草寺境内を當町迄松櫻榎等之並木西側ニ在之儀故、並木町を
 唱儀由申傳ニ御座儀。其外之儀を相分り兼申儀。
 一、町御奉行御支配ニ有、淺草寺領年貢地ニ御座儀。
 一、反別九反四畝貳拾步、峽田領を唱申儀。
 一、町内東西材木町を西仲町境迄長延四拾五間壹尺餘、南北駒形町を茶屋町
 境迄東側七拾七間、西側七拾九間。
 一、町内小名、西側横丁を里俗大佛横丁を唱申儀。

一、
 舊家名、鈴木伊兵衛

右伊兵衛先祖之儀を、鈴木修理亮を申、淺草寺僧正京都より御着之砌、御當地
 に御供罷下り儀處、同人儀多病ニ付、其砌粹伊兵衛に並木町名主役并地面被
 下置、御年貢諸役銀等御免被成儀。尤茶屋町之儀を、貞享元祿之比迄を又左衛
 門を申者名主役相勤、其後同町家持半三郎を申者右役相勤罷在儀處、同人儀
 元祿之末ニ至り名主役御免を願上儀ニ付、寶永元申年中、四代目伊兵衛に同
 町名主役兼帶被仰付、支配相續仕、當伊兵衛迄十代名主役相勤罷在儀ニ御
 座儀。右修理亮死去之年、月相分り不申儀。粹伊兵衛義を、慶安三年正月死去仕
 儀。被下儀地所之儀を中古他人に讓渡し申儀。

一、
 繪馬屋、兵助店、清、七

右之者墨繪摺之繪馬所持仕儀處、右を往古梶原源太景季當所觀世音に壹萬
 枚摺り立奉納いとし儀由、尤以前常音坊之偈書いたし有之、同人より清七祖
 父に貫受儀由、今以所持仕罷在儀。

一、
 造花師、家持、七郎、兵衛

右七郎兵衛先祖、往古を百姓ニ有、凡寛永之頃より當所よて手遊商いとし儀
 處、延寶二寅年中死去仕、同人粹七郎兵衛引續同渡世仕來儀由、其後三代目七

郎兵衛儀、貞享年中、造花渡世相始メ、四代目七郎兵衛儀、寶曆四戊年九月中、浚明院様淺草寺に被爲成、節、初る被爲召出、造花上覽有之、當御代迄度々奉入上覽。右七郎兵衛當時迄五代相續仕、何れ代々長壽之由ニ御座。右、上覽相濟得、先例銀壹枚宛拜領被仰付。

茶屋町

一、町名之譯、寛永十九壬午年觀世音本堂炎上ニ付、正保四丁亥年中御造營被爲、在、砌、本堂爲火除、南に六拾間境内廣延ニ相成、二付、其節今之茶屋町雷門内ニ有之、此處、並木町之内當時之場所、地所割込ニ相成、町人共所持地面端廻り、故、境内仁王門前ニ、或間ニ四間之茶屋地銘々地主共、添被下。右茶屋當時貳拾間、唱、場所ニ御座。尤右茶屋地、遂ニ他人に譲り渡、當時所持之者、兩三人而已相殘有之。

- 一、町御奉行御支配ニ、淺草寺領年貢地ニ御座。
- 一、反別三反三畝拾歩。
- 一、町内小名、雷神門前廣小路、唱申。

海苔商賣 家 正木四郎左衛門

右四郎左衛門遠祖四郎左衛門儀、同所山之宿町名主三田三郎左衛門弟ニ、同性ニ有之、菩提所、同寺ニ、淺草寺地中法善院ニ御座。子細有之、近來性、を正木と相改申。古來百姓ニ、植木渡世、いとし、右寛永之末、葛西中川之海邊、蠣殻流木等、付、海苔、採、落、於、當所、干立、植木商、ひ、あ、り、ら、賣、弘、處、後年大森品川之海中に、朶、を、建、海苔採、事ニ相成、元祿寶永之比、大ニ弘り、此、家業、躰、多分ニ相成、自然淺草海苔、唱、由、一、躰、右元祖四郎左衛門儀、東叡山御二代本昌院宮様御代、御出入被仰付、海苔御用相勤、此處、其後大明院宮様御代、御用看板御免被仰付、去ル、明和年中迄、同所材木町ニ地面有之、住居仕、此處、其後當時之場所、引移り渡世仕來り。

一、

揚投商賣 作左衛門店 伊勢屋庄兵衛

右庄兵衛先祖、同町東仲町境木戸際、見世差出し楊枝商、ひ、い、とし居、此處、元祿六辰年八月中常憲院様淺草筋御成之節、乍、恐、被、遊、御立寄、楊枝御用被爲、仰付、其砌、御用相勤罷在、此處、享保七寅年三月中重キ御方御通行之節、御用品有之、此ニ付、下座不致儀有之、此處、其砌有德院様御世ニ、神妙之由達御聞、其後寛保三亥年十月四日若年寄衆本多伊豫守様、仰渡、此由ニ、御楊枝細

工場所見立可相願旨、御細工頭岡田源七郎殿を被申渡、其後寛延二巳年八月七日若年寄衆松平宮内少輔様被仰渡、由に、八丁堀水先町壹丁目に、坪數四拾貳坪餘之町屋敷地所拜領被仰付、段、御細工頭大瀧又兵衛殿被申渡、今以引續當庄兵衛迄六代御用相勤罷在。

一、

海苔商賣 與兵衛店 永樂屋庄右衛門

右庄右衛門先祖儀、享保年中、海苔渡世仕來り、寶永之頃、東叡山を御用被仰付、安永二年兩御丸御用被仰付、相勤罷在、御賄方御支配に御座。

一、

酒商賣 家持 山屋半三郎

右に古來、當所に造酒仕、由申傳、當時、酒渡世仕、紅葉山御酒御用相勤罷在、住居地面之儀、沽券狀無之、間口九間、奥行貳拾間之草創地に御座、尤書物等の焼失仕、委敷儀を相譯り兼申。

材木町

一、町名之起り、往古、小濱宿を唱、由、其後町地に相成、年代、相知不申、竹木渡世之者多く住居仕、に付、材木町を唱來、儀に可有之、里俗に竹町とも相唱、事。

一、町御奉行御支配に、淺草寺領分年貢地に御座。

一、反別店屋敷九反七畝貳拾步六合八夕、田方四町四反四畝貳拾壹步、畑方貳反七畝拾七步、此分淺草寺裏門千束并飛地外千束之内に有之。

一、藍染川、花川、戸町境、廣小路に幅貳尺程之小溝有之、其上、幅三尺長貳間半之石橋掛、有之、昔、藍染川を相唱、餘程之流に有之、由、追々埋、て、當時右様ニ相成、下流を町内町家之中、往還地之下を通り、大川に流出、事。

一、竹町渡、同川岸中程に船渡場有之、昔、花方之渡を唱、由、當時竹町之渡と相唱、同所に御高札有之、右渡守次郎右衛門儀、本所中之郷竹町住居之もの、御座、間、右渡場之起立、其餘御高札等之譯、委細本所邊御調之節、相尋被下度、事。

一、專堂坊長屋、町内廣小路に專堂坊長屋を唱、地所有之、右地主土師專堂と申、もの、淺草寺三譜代を唱、内壹人に、當時同寺境内に三社權現と勸請いとし有之、土師仲知子孫之由申傳、右地面内、石之五輪塔三基有之、右仲知を葬、し、所の由、昔、同所に三社權現を本地佛阿彌陀堂有之、處、明和四亥年焼失いとし、其後の坊中、安置いとし有之、事。

一、鉾屋敷町内東側北木戸際家持新八所持地面昔より鉾屋敷と唱來り。右の往古年代不知、天上の鉾一振此地へ落止り由申傳、右之古鉾當時淺草寺に有之、三社權現祭禮之節、神輿之前に相立、氏子町々通行等之其砌と、右新八方の人足差出り事。

一、

舊家名 勝田權左衛門

右名主勝田權左衛門儀と、當町草分ヶ二の遠祖を代々當所に住居仕り由申傳り得共、名前年代等確と相知不申、但淺草寺觀世音海中出現之刻、藜を以小堂を營り里民拾人之内壹人の右權左衛門遠祖之内にあり、則當時も淺草寺境内十社權現合殿之内、勝田社を号し社有之、且亦住居地所之儀と、草創地にあり、古來の年貢諸役共地頭を差免し有之、沽券證文無御座り事。

西側北木戸六軒目

一、表間口六間、裏行拾六間。

東側北木戸六軒目

一、表間口六間壹尺五寸、裏行八間壹尺五寸。

一、同人先祖之内郷左衛門法名道喜と申もの、年月不知或日の朝、土藏二階持佛之前に看經致居り處、下を聞り得り、兩人より稱名の聲聞へり、二人同聲二階へ登り見り處、郷左衛門壹人に有之、下を聞り得り、同様兩人の聲

と相聞へり、不審に存し、又々二階に登り見り得り、看經相止メ持佛之前にて死去いとし、しに付、葬送之節右之本尊菩提所淺草寺地中妙音院に相納、今二同寺本尊にいとし有之、夫が世に連レ念佛之彌陀を唱へ來り。右に惠心僧都之作之由申傳、其後同寺火災之節、急火にて右本尊他所に持出り間も無之、打敷に包み儘庭池之岸に差置、燒後に見り得り、打敷并後光等の燒失り得共、本尊を聊過チ無之、右阿彌陀佛之事の世の人存り事にて、近頃大進夜話と申書よも右の一條相記し有り事。

花川戸町

一、町御奉行御支配にあり、淺草寺領年貢地に御座候。

一、反別居屋敷三町貳反拾八步七合六夕八才。

往古の御料所に有之り處、承應年中淺草寺領に相成り由申傳に御座り得共、古書物等無御座、駘と相分り不申り。

一、一ノ郷峽田領と唱申候。

一、東西四拾六間、南北東側百六拾九間、西側百五拾七間。

一、町内小名戸澤長屋、大長屋、菱屋、長屋。

花川戸町之内西側中程ニ馬道町に通路致し、裏屋有之、戸澤長屋と唱來り、此義往古戸澤何りしと申抱屋敷ニ有之、享保年中町家ニ相成、節地主共沾券之内を以通路致し、いつ之頃か戸澤長屋と唱來り、同所西側北之方ニ寄菱屋長屋と唱、義菱屋傳兵衛と申者、古來に住居仕、故右様唱來り。

一、六地藏石燈籠

花川戸町南之方木戸際ニ六地藏切付有之石燈籠一基、年號等切付有之、様ニと相見へ、得共、耽と相分り不申。往古何者建置候哉、凡四百有餘年、も相成可、申旨申傳ニ御座。當時町内持ニ御座。

一、達摩り池

花川戸町西側北之方ニ寄地主甚右衛門所持之裏地之内ニ有之、池、ゆへ右様申傳、舊記相分り不申。

舊家 年寄役 江原清左衛門

花川戸町江原清左衛門義と、往古に代々右町に住居仕、年寄役相勤。○下畧、寛永十二年ノ條ニ載ス。

山之宿町

一、町名之起、町地ニ相成、年代、不相知。

一、町御奉行御支配ニ、淺草寺領分年貢地ニ御座。

但、町内東側中程、北に寄山之宿六軒町と相唱、場所所有之、右に御代官中村八太夫當分御預町、尤右御役所にて矢張山之宿町と申上來り。勿論右と當正月中御調相濟、場所ニ御座。

一、反別壹町七反三畝拾七步六合。

往古に御料所ニ有之、處、承應年中之頃淺草寺領ニ相成、由申傳、得共、古キ書物等無之、耽と相分不申。

一、二ノ郷峽田領と唱。

一、町内東西南之方ニ、凡三拾八間程、中程ニ、凡五拾八間程、北之方ニ、凡四拾六間程、南北に百六拾九間。

一、小名數之内、西側中程より北へ寄北馬道町に出る横町ニ御座。

一、舊家 名主 三郎 左衛門

右三郎左衛門儀と、往古に代々右町に住居仕、名主役相勤。○下畧、寛永十二年ノ條ニ載ス。

金龍山下瓦町

一、町名之起、町附ニ金龍山聖天宮有之、往古當所ニ瓦焼ハ場所ニ有、町名ニ相成ル由申傳有之ハ得共、年代相分リ不申ル。

一、町内東西川岸撫垂迄四拾七間半程、南北ニ貳丁程。

一、町御奉行御支配ニ有、淺草寺領分年貢地ニ御座ル。

一、反別八反六畝拾三步餘。

一、峽田領ヲ唱申ル。

一、河岸地

河岸附之場所銘々屋敷附川岸地ヲ唱へ、炭薪置場又ハ大工普請小屋等有之、尤地頭淺草寺ハ年貢ニ出來ル事。

山川町

一、町名之起リハ譯承リ傳無之、年代相分リ不申ル。

一、町内東西ニ壹丁貳拾貳間、南北西之方八間貳尺、東之方九尺。

但、片側町ニ有、前通りハ大川ハ之枝川ニ御座ル。

一、町内儀ニ、神田川常浚上納地、并聖堂脇御藥園其外都合拾ヶ所辻番請負助

成地ニ御座ル。

内、四拾壹間裏行東之方九尺、西之方五間。辻番助成地

此坪百三拾九坪七合。

但、右町屋起立之儀ニ、下谷辻番屋敷ハ委細申上ル。

同四拾壹間裏行東之方五間、西之方八間貳尺。常浚上納地。

此坪貳百七拾貳坪程。

一、峽田領ヲ唱へ、反別壹反三畝拾參步餘。

一、町内小名、里俗山谷堀ヲ唱ル。

聖天町附横町。

一、町名之起リ、町内ニ待乳山聖天宮有之ハ故之名ヲ古ク申傳有之、町地ニ相成ル年代相分リ不申ル。

一、町御奉行御支配ニ有、淺草寺領分年貢地ニ御座ル。

一、反別三町壹反五畝貳拾六步餘、峽田領ヲ唱ル。

一、町内横町ハ懸ケ東西貳丁拾五間程、南北ニ三丁三拾間餘。

但、横町之内、南側隣地小出永之進殿、同町之内、北側隣地淺草寺地中遍照院。

一、武家町人拜領地并拜借地公役地助成地等無之、尤聖天横町之内ニ表口貳ケ所ニ有拾間有之地主の坂所持之家屋敷御咎ニ付寛政四子年十一月廿八日南御奉行池田筑後守様○長御勤役中、御取上ケニ相成、當時南御奉行所御懸りニ有上り地ニ御座也。

一、舊家

名主 作 左 衛 門

右名主作左衛門先祖之儀也、江口五兵衛盛次と申、最上義光之家臣、慶長之頃奥州畑谷之城を預食祿八千石を領し、其二男よて慶長八年之頃羽州山形を去り、夫々民間より下り、江戸より來り、淺草觀世音の傍聖天町邊住居いたし、寛永年中名主役相勤申由申傳也。初祖作左衛門義也、天正十二年羽州山形産、正保元年六月三日行年七拾五歳ニ有死去いたし、當作左衛門迄九代相續仕也。且居宅地面之儀也、表間口六間貳尺五寸、奥行拾三間半、御年貢御免ニ有、草創所所持仕也。尤町内入用と差出申也。

淺草寺割殘屋鋪

一、右屋鋪之義也、往古淺草寺の領分割付之節割殘也、町屋敷ニ有、町名之義淺草寺割殘屋敷と相唱、萬治二亥年町方御支配ニ相成申候。

一、町内不殘、峽田領ニ有御座也。

一、間口七間、裏行五拾八間。

山谷淺草町

一、町内之儀也、往古駒形町之邊ニ罷在也、御用地ニ相成也、二付、爲替地、本所龜戸村之内五町四方地所被下、銘々替地に引移也、處、場末ニ有渡世、後相成兼也、二付、天和二戌年中、元地に御返地被下置也、様申上也、二付、當時山谷淺草町に年月不相知、替地被下置也、趣申傳也。尤町内稻荷之儀也、龜戸村ニ在之、同時ニ當町に替社致し、社守之儀也、寛政之頃迄龜戸村東覺寺ニ有社守致也、義ニ御座也。尤舊記等燒失致し、申傳ニ有申上也。

一、町内東西に凡四拾四間、南北に東側凡九拾六間、四尺六寸、西側凡九拾三間三寸。

一、町御奉行御支配ニ有、淺草寺領年貢地ニ御座也。

一、反別壹町貳反四畝貳步八厘三毛、峽田領と相唱申也。——府内備考

觀音堂 本尊正觀音ハ、推古天皇三十六年三月十八日武州宮戸川ヨリ出現スル所ニシテ、其事蹟ハ寺院ノ條ニ辨スレハ爰ニ贅セズ。別當ヲ金龍山淺草

寺傳法院ト號シ、天台宗ニシテ、古ヘハ本寺無カリシカ、寛永年中ヨリ東叡山ノ末ニ屬セリ。境内ハ守護不入ノ地ニシテ、十一万四千五百九坪餘ト云フ。淺草寺地中三十四箇院借地町屋。是ハ淺草寺ニ屬スル所ノ支院及衆徒等ニ配當スル同寺境内地ニシテ、各其地ニ堂宇ヲ營ミ、本尊其他ノ諸佛ヲ安置ス。其餘レル地ヲ貸地シテ市塵ヲ建シ事ヲ請ヒ申テ境内町屋トシ、永ク町奉行ノ指揮トナレリ。許可ヲ得シ年代ヲ傳ヘサレド、衆徒醫王院カ門前町ハ元文三年ニ聽サレシ事、同院書上ニ見ユレハ、其頃ヨリ漸々貸地ノ願ハ協ヒシト見エタリ。抑三十四院ト稱スルモノハ、淺草寺衆徒日音院千七百五十二坪餘、同觀智院四百十六坪餘、同衆徒金藏院五百二十坪餘、同松壽院三百六坪餘、同實相院二百三十八坪餘、同梅園院六百二十六坪餘、同智光院五百九十七坪餘、同正福院二百坪餘、同圓乘院百四十五坪餘、同壽命院二百十九坪餘、同長壽院二百六坪、同正智院六百坪餘、同勝藏院八百八坪餘、同自性院千五百五十三坪餘、同壽德院五百二十坪餘、同顯松院五百四十四坪餘、同妙音院八百五十坪餘、同法善院四百四十五坪餘、同覺善院四百八十坪餘、同金剛院四百十坪餘、同醫王院二千八百六十一坪餘、同妙德院四百五

十坪餘、同修善院四百十坪餘、同泉凌院二百五十坪餘、同善龍院四百坪餘、同無動院三百五十坪餘、同教善院九百八十七坪餘、同誠心院千三百七十二坪、同延命院七百五十一坪、同德應院四百五十四坪餘、同吉祥院五百五十坪餘、同本龍院四十五坪、同返照院九百三十坪餘、同泉藏院四百坪餘アリ。以上三十四院ノ内、返照院カ貸地町屋ハ、文化十一年許可アリシヲ記セシノミニテ、其他更ニ年代ヲ傳ヘズ。里俗此地ヲ概シテ淺草寺地中三十四箇院借地町屋ト唱フ。

南馬道町 當所及ヒ新町北馬道町共ニ淺草寺ノ境内町屋ト唱フル地ナリ。馬道ト呼ヘルハ、其起リ詳ナラズ。事蹟合考ニ、此地昔ハ尋常往還ノ街道ナリ、サ云ト見エ、江戸志ニ、寛文ノ頃マテハ遊里ノ往來皆馬ナリシカハ、此邊馬蹄ノ絶ルコトナシ。故ニカク呼ナリト載タレト、共ニ採用シカタクシ。又市塵ヲ開キシ年代モ傳ヘサレト、古ヘヨリ本坊及ヒ境内ノ掃除等ヲ初トシテ諸役ヲ勤ムル者廿九人アリテ、爰ニ居住ス。是等カ助成ノ爲トシテ境内ニ出テ諸物ヲ鬻ク事ヲ聽シ、其地子ヲ免除ス。當町四區ニ分割シテ九百四十三坪餘アリ。此外數町元ヨリ町奉行ノ支配ニシテ變遷セサレハ、各町ニ贅セズ。

南馬道新町 此地ハ享保十五年傳法院僧正公英觀音堂修復アラン時ノ費

用ニ充ヘキ爲願ヒテ新ニ商家ヲ建テ其地子ヲ收納ス。千七百二十坪アリ。又當町背後ニ辨天横町ト唱フル一路アリ。

北馬道町 爰モ前町ト等シク淺草寺境内ノ諸役ヲ勤ムル者連住ス。市塵ヲ開キシ年代ヲ傳ヘス。表間數三十三間餘アリ。又南馬道町ヲ挾ミテ飛地二區アリ。其坪數二百坪ト云ヘリ。又閑地一區、里俗僧正カ馬場ト唱フルアリ。其縁故ヲ知ラズ。

金剛院 天台宗淺草寺支院ノ一ニシテ、南馬道町ニ接セリ。舊ハ金地院ト稱ス。

門前 明和元年乞ヒ申テ十箇年ヲ期トシ、門前ニ商家ヲ建ツ。表間數十八間ナリ。此地淺草寺領ナレドモ、市中ニ預レル事ハ町奉行ノ進退ナリ。

吉祥院 德應院 延命院 誠心院
以上四院共ニ淺草寺領ノ支配ナリ。

門前 天明三年ヨリ十箇年期ノ市塵ヲ門前ニ置事ヲ許可セラル。四院同時ニ聽サレシヲモテ、里俗四箇院門前ト唱フ。吉祥院ハ表間數十二間、德應院ハ二區ニ分割シテ、八間ニ、十二間半ナリ。延命院モ二區ニ分レテ、十間半

ニ、十五間アリ。誠心院ハ十五間ト云フ。共ニ淺草寺領ニシテ、其進退ハ同シク町奉行ナリ。

醫王院 淺草寺衆徒十二箇院ノ一ナリ。舊名ハ福壽院ト稱ス。

門前 元文三年許可ヲ得テ市塵ヲ建テ、四百八十一坪ノ地ニシテ、延享二年ヨリ町奉行支配ニ屬ス。

檜前齋頭 竹門ノ東側ニアリテ、淺草寺承仕三人ノ一ナリ。祖先ハ今三社權現ト祠レル濱成カ六十三世ノ孫ト傳フ。

門前 古ヘヨリ淺草寺配當ノ町屋敷ナリ。里俗齋頭門前ト唱フ。表間數十八間半ナリ。

檜前常音 前ト同所ニシテ、是モ承仕三人ノ一ニシテ、竹成ノ孫ナリト傳フ。舊ハ淺草寺境内中谷ニ住セシカ、今北谷ニ轉セリ。

門前 淺草寺ヨリ配當ノ地ニシテ、年代ヲ傳ヘズ。市塵ヲ置事ヲ聽サル。表間數二十三間餘ノ地ナリ。爰モ常音門前ト唱フ。

諏訪町 此地ニ諏訪社アルヲモテ名トス。淺草寺領年貢地ニテ、一町七段六畝九步。町内ニ御醫師坊主衆等ノ賜地少ク交レリ。其地ハモト銀座ニ屬セシ

役所アリシカ、正徳六年回祿ノ後廢シテ賜地トナル。當所字ニ紅屋横町、海老屋横町、淺利屋横町等アリ。

高札 淺草川ノ岸南ノ方ニアリ。此所ヨリ聖天町ニ至ルマテ、淺草川ニテ殺生停止ノ制札ナリ。

黒船番屋蹟 町並ノ内二百四十坪ノ地ナリ。由來ヲ傳ヘス。按スルニ正保五年奥州南部ニ漂著セシ蘭人五人、江戸ニ暫ク滯留セシ事アリ。此時彼寓舎ヲ當所ニテ賜リ、其警衛ノ者ヲ置レシ所ナトニヤ、猶黒船町ノ條併見ルヘシ。

駒形町 此地ニ馬頭觀音堂アリ、是ヲ駒形堂ト號セシニ因テ町名トナレリ。淺草寺領ニテ、段別一町一步。町内河岸ニ物揚場アリ。按スルニ寛明日記ニ、正保二年七月廿六日隅田川ニ成セラレ、淺草駒形堂ニ御船ヲ著サセラレシトアルハ此涯邊ナリ。駒形堂ノ傍ラニ元祿元年建ル所ノ戒殺碑アリ。又堂後ニ清水ト呼ル所アリテ、常ニ清泉湧出スト云フ。町内字諏訪町境横町、海老屋横町、八軒町境横町、三間町境横町、蕃椒横町、内田横町、百助横町等ノ唱ヘアリ。三間町 此地ハ昔民戸僅ニ三軒アリシ故、市廓ヲ開キシ時名ツケ、後今ノ文

字ニ改シト云フ。當所ハ八軒町・福川町ヲ隔テ二區ナリ。都テ段別二町六段四畝二十九步餘、淺草寺領年貢地ナリ。町内ニ行場ト稱シ、東西八間餘、南北五間餘ノ除地アリ。天台修驗理性院住居ス。是ハ元祿元年修驗祐海ト云者、町内西北ノ方西仲町境空閑ノ地ニ行場ヲ建テ居住シ、明和中宥實ノ時今ノ所ニ移轉ス。羽黒山參詣ノ者、此所ニテ行アリテ出立スト云フ。市街ノ字ニ竈横町アリ。

東仲町 此所ハ昔村民商家ヲ建、中畑村ト唱ヘシカ、寛永二十年檢地町割アリテ仲町ト改メ唱ヘ、寛文五年東西二町ニ別ル。町内五千五百二十三坪餘。北側ノ地ハモト淺草寺火除地ナリシカ、後年商家ヲ建ル事ヲ許サル。淺草寺領ニシテ、萬治二年ヨリ町奉行ノ指揮ヲ奉ハルト云フ。町内廣小路、常陸屋横丁、滿願寺長屋、杵屋横町、惠比須長屋等ノ字アリ。

西仲町 此地市廓起立、及ヒ東西分割ノ事ハ、東仲町ニ云ル如シ。南表間數百十間、北側ハ二區ニ別ル。都テ五十七間ナリ。

淺草寺裏門先番屋敷 此地ハ寛永二十年仲町町割ノ時割殘ノ地ナリ。淺草寺裏門ノ入口ニアレハ、同寺ヨリ番人ヲ置、傍ニ商家一字ヲ建テ、其地ノ設役

ヲ免除ス。纒二十六坪ノ地ナリ。

並木町 此町未開ケサル頃、淺草寺境内ヨリ續キ、道ノ兩側ニ松櫻榎ノ並木アリシ故、此町名アリト云フ。市廓起立ノ年代ヲ傳ヘス。按スルニ寛永ノ吾妻メクリニ、並木ノ花ヲ賞セシ事見ユ、又事蹟合考ニ、今ノ並木町ト云フハ、慶安ノ末マテハ松ノ並木ニテ、其間ニ草屋アリ、窓ヨリ草履草鞋ナト出シテ營ミ居ケルトアレハ、慶安ヨリ後ノ起立ナリ。淺草寺領ニテ、段別九段四畝二十歩、町内ニ大佛横丁ノ字アリ。

茶屋町 此町昔ハ淺草寺雷神門ノ内ニアリシカ、寛永十九年淺草寺回祿ニ依テ正保四年再營セラレシ時、火除ノ爲今ノ地ニ移サル。當所ハ舊地ヨリ狭キヲ以テ、淺草寺二王門外東側ニテ茶廊ヲ置ヘキ地今俗ニ二十間ヲ添賜フ。茶屋ト呼フ。爰モ淺草寺領ニテ、段別三段三畝十歩ナリ。俗字シテ雷神門前廣小路ト呼フ。材木町 此地ハ昔小濱宿ト唱ヘシト云傳フ。其後市廓ヲ起立セシヨリ、竹木ヲ鬻ク者多ク居住セシカハ、此町名ヲ唱ヘリト云フ。里俗竹町トモ呼フ。町内段別九段七畝二十歩餘、淺草寺領ニテ、町奉行支配ナリ。市廓ノ字ニ鉾長屋ト唱フルアリ。往昔一ツノ鉾此所ニ落タリシカハ此名アリ。今淺草寺三社權現神事ノ時

神輿ノ前ニ立ル鉾是ナリト云フ。又專堂坊長屋ト號スルハ、土師專堂所持ノ地ニテ、即チ居住ス。專堂ハ淺草寺三譜代ト稱スル其一人ニシテ、淺草寺三社權現ノ内、土師仲知ノ子孫ナリト云フ。仲知ノ墓ト稱スル五輪ノ石塔三基アリ。

渡船場 淺草川ニアリ。竹町ノ渡ト云フ。對岸本所竹町ニ渡ル故此名アリ。又古ヘ花方ノ渡ト唱ヘシト傳フ。正保改定ノ國圖ニ此邊ニ舟渡九十二間ト註セリ。

花川戸町 市廓起立ノ年代ヲ傳ヘス。サレド、正保田園簿ニ野村彦太夫御代官所花川戸町ト見エタレハ、其頃既ニ町地トナリシナラン。承應中淺草寺領トナリ、段別三町二段十八歩餘ノ地ニテ、町奉行ノ指揮ナリ。字ニ戸澤長屋、菱屋長屋、大長屋等アリ。町ノ入口木戸際ニ大地藏石燈籠アリ。六月十一日兵衛ノ七字ノミ僅ニ讀ヘシ、其餘ハ磨滅シ年代來由詳ナラス。紫一本ニ、鎌田兵衛カ寄附セシモノナラント載。或ハ久安ノ頃、鎌田兵衛カ寄附ナリトモ、慶安中ノ物トモ云ヘト、共ニ信シカタシ。サレト古代ノ物ナル事ハ疑ナシ。事蹟合考ニハ、往昔此邊宿驛ニシテ、石燈籠ノ所立場ナリシト云フ。

達磨ヶ池 大長屋ノ裏ニアリ、或ハ達磨ヶ淵トモ云フ、爰ニ片葉ノ蘆生セリ。

山之宿町 此地始ハ山之宿村或ハ山之宿ト唱ヘリ、其後町地トナリシヨリ、今ノ如ク唱フルナルヘシ、淺草寺領ニシテ、町奉行支配ニ屬ス、段別一町七段三畝十七步餘ナリ、藪ノ内ト唱ル字アリ。

金龍山下瓦町 此地ハ金龍山ノ麓ニテ、昔瓦ヲ製スル者多ク住ス、故ニ町名トス、町内二千五百九十三坪餘、爰モ淺草寺領ナリ。

高札 北ノ方ニアリ、淺草川殺生禁止ノ制札ニテ、諏訪町ニ建ラル、所ト同シ。

山谷淺草町 此町ハ昔駒形町ノ東八軒町及ヒ福川町ノ邊ニアリテ、智樂院門前ト唱ヘリ、後火除地トナリテ本所龜戸村ノ内ニテ方五町ノ代地ヲ賜ヒ、淺草智樂院門前本所淺草町ト號ス、然ニ僻地生業ニ便惡キ故、天和二年舊地ニ復セン事ヲ請フ、依テ當所山谷村ノ内ニ移サレシト云フ、按スルニ江戸町ヲ本所ニ移サレシハ寛文元年ナリ、其後天和三年本所中邸宅市廓トモ一圓ニ廢シテ田圃ヲ開レシニヨリ、貞享元年再ヒ江戸市中ニテ代地ヲ賜リシナ

リ、サレハ當町ノ變遷モ是ト同時ナルコト必セリ、又龜戸村ノ内ト云ルハ、今ノ猿江御材木藏ノ北豎川四ノ橋ノ邊寄場附地所トナリシ陸田ノ地ナリ、町内段別一町二段四畝二步餘、淺草寺領年貢地ナリ。

聖天町 此地ハ金龍山聖天社門前ニアレハ此名アリ、東側表間數百八十七間餘、西側二百六間半、淺草寺領ニテ、市廓起立ノ年代ヲ傳ヘス、三ツ股ト呼フ字アリ。

聖天横町 此地ハ聖天町ヨリ西ニ折スル地ナレハ、直ニ町名トス、里俗北新町ト唱フ、南側表間數六十八間、北側八十五間、淺草寺領ナリ、町内ニ上屋敷一所アリ、町奉行所ニ附セラル、聖天町及ヒ當町ヲ合テ九千四百七十六坪餘ノ地ナリト云フ。

田町 自一町目
至二町目 此町昔ハ淺草寺ノ西ニアリ、今材木町、花川戸、山之宿等三ヶ町持ノ水陸田其舊地ナリ、當時ハ慶印寺前石橋ノ邊マテ商家アリテ、今ノ淺草溜ノ前ナル路ハ町内ノ往還ナリシト云フ、材木町ニ藏スル稅帳ノ内田町家跡ト記セル田畑多シ、是證トスヘシ、延寶四年回祿ニ罹リ、同五年此地ニ轉ス、淺草寺領年貢地ニテ、段別三町三段二畝十四步餘、其初ハ新地奉行ノ支配

ナリシカ、寶永元年ヨリ町奉行ノ支配ニ屬ス。町内ノ字ニ砂利場ト稱スル地ハ、一町目ノ西側ニテ、萬治三年御天守臺ヲ再營セラレシ時、砂利取場ノ御用地トナリ、後故ニ復セラル。此外孔雀長屋二丁目。編笠茶屋等ノ字アリ。淺草寺割殘屋敷。淺草寺領ノ内町割ノ時ノ殘地ナリ。萬治二年ヨリ町奉行ノ支配トナル。南北七間、東西五十八間、此所往還ノ内ニ木戸アリ、竹門ト云フ。昔ハ村民農業ノ通路ニ當リシ木戸ニテ、當時竹ヲ以テ作りシ故ニカク唱へ、今ハ其邊ノ字ニ呼ヘリ。

府内誌殘編

〔參考〕淺草寺志ニ、

傳法心院 二王門の外南側に在、即ち淺草寺の院號にして、是を本坊と稱す。勝海上人慈覺大師を以て中興の開山とす。天正慶長の比は、觀音院と稱し、寶永の比よりは智樂院と稱せしが、貞享二年乙丑十二月東叡山御兼帶より、傳法心院とは稱せらる。傳法心院の號は、輪王寺宮の御院室中の一ツにして、元來淺草寺の院號にてはあきあり。○中

當院歴代過去帳に據。

勝海上人

慈覺大師

淺草寺中興、貞觀六年正月十四日。

傳法院覺鏤

康治二年十二月十二日壽四十九歲。元祿四年諡興教大師。

蜷川氏親常云、是根來寺の覺鏤にて、眞言新義の祖あり。傳法院の高野の傳法院か、又ハ根來にも大傳法院あれば是か。板行の古き過去帳にあるにより、混雜せしからん。覺鏤當寺に住せし事知るへからず。傳法院を以て、昔より當寺の號と思へるは謬也。

寂海

按するに、橋場長昌寺の鐘の銘の序に、開山寂海法印者、本啓台宗之肆、主金龍山也、逢中山日常上人、訂論宗義、登于身延、拜高祖大菩薩、宿蒙成散、悅擇投契、易衣改名、呼曰寂上人、歸構一字而居焉、遍言長昌寺、弘安九年丙戌十一月一日泊然化矣。門弟子日增、日可相次守之地、接隅田川、偶罹水難、堂樓漂流、鐘亦沈矣、其地曰鐘淵、今尙存也。元享辛酉年移于今地、爾來三百八十九年也とあり。ふれを見れば、寂海といふ僧、淺草寺に住せし事ありと

見へたり。

忠豪 權大僧都。或忠孝。○中興第一世。遠山丹波守直景子。慶長十四年乙酉八月四日死。

忠尊 權僧正。或忠存。第二世。伊丹三河守政富子。忠豪外孫。寬永十六年己卯十一月十八日死。日光山觀音院開基。淺草寺中興僧正跡。始紅葉山東照宮御別當祖。位牌在當院。

伊丹忠英が著す所の琵琶傳に、彼琵琶號千鳥。以撥面有之。故名之。太田持資入道道灌之所持、而至英勝院、讓與僧忠存、爲淺草寺之什寶。然有故、弟子忠運移轉於下總國法漸寺。此時寺寶悉分散、彼琵琶落于民手。岡村玄川得之高家、以秘藏焉と載す。

忠運 權僧正。第三世。伊丹勘八直吉子。忠存孫。貞享三丙寅八月廿七日死。位牌在當院。○下畧。

伊丹系圖 御小納戸 伊丹三郎右衛門家

藤原姓 伊丹

大職冠鎌足十二代加藤豊後守重光ヨリ加藤之稱重光ヨリ十二代伊丹兵庫頭景親攝津國河邊郡伊丹杜本住、以在名伊丹と相改、景親ヨリ六代伊丹因幡守頼與之三男伊丹左京亮經貞ヨリ武州久良岐郡釜利谷住居仕。旗之紋藤之丸、幕家紋同、替紋左万字九字割九曜。

伊丹左京亮經貞四代

永親 三郎兵衛。三河守。初將軍家仕、後武州釜利谷郷ニ居住。永祿元年閏六月十八日死去。同所禪林寺葬。法名雲峰。貞悅。

康信 龍夜叉丸。右衛門大夫。北條家屬。相州小田原仕來。永祿年中武州峯上之城ニ於テ、上杉景政戰而死。

政富 源三郎。三河守。妻遠山丹波守直景女。初京都將軍義輝仕。兄戰死之後、康信之家ヲ接メ北條氏十五戌年二月廿八日七十三才卒。武州牧田勝田寺葬。法名月秀。朱空。

光昌 滿壽丸。佐次右衛門。母直景女。北條家小田原落去後、慶長二十卯年大坂御陣之節、御當家奉仕、其後有故斷絶、右譯不詳。

政親 猿壽丸。仁兵衛。後宗仁。母同。北條落去後、肥前國居住仕、此家筋太田備中守家來罷成。

直吉 勘八。母同。天正三年武州釜利谷ニテ出生。初北條氏直仕、直之字得、天正十八年北條落去、節氏直從高野山ニ到、駿州ニ來、土井利勝松平正久ヲ頼御當家へ被召出。後加々爪民部下、爭論之儀ニ付、慶長七年蒲生秀行へ御預、奥州會津罷在、秀行伺之上、生涯無役ニテ、領地五百石合力、寛永十一年十二月六拾一歳死。會津法林寺葬。法名月叟。衛廻。

忠尊 觀音院。知樂院。權僧正。母同。觀音院。法印。忠豪之弟子ニ相成、後金龍山淺草寺別當相成申。元和三年紅葉山御宮御別當罷成、寛永十三年武州久良岐郡金澤内坂下村ニテ別當領貳百石被下置、同十六年十一月十八日遷化。

某 勘七良。喜右衛門。日向國病死。

女 尾州家來遠山六左衛門某妻。
女 御代官蒞部長兵衛忠義妻。

遠山系圖

直景 遠山丹波守。北條氏康家老。江戸城主。永祿七年正月八日於下總國國府臺戰死。

綱景 伊賀守事。北條家。

忠孝 又忠豪。淺草寺觀音院。

女子 伊丹三川守政富室。

女子 康資室。

女子 右之外、男子、女子共多略之。

重正 太田新六郎。母遠山丹波守直景女。天正十八年始奉謁。東照大權現時賜食祿。

女子 諱ハ勝。英勝院。母同上。又天正十八年始奉謁。東照大權現時賜食祿。即奉仕。夜恩寵不少。舉世知焉。水中納言頼房卿ノ養母。

資宗 備中守。太田家之中興。當時備中守資晴高祖。

政親 仁兵衛。母遠山丹波守直景女。當時伊丹平藏忠英高祖。東照大權現之御時、御書院番組ニ入。

直吉 勘八。母同上。當時伊丹三郎右衛門、同三郎左衛門、同勘左衛門高祖。東照大權現之御扨從。

忠存 知樂院權僧正。淺草寺中興。英勝院由緒ニ因テ、東照大權現、勝カ坊主ト上意アリテ、恩遇殊ニ厚ク、紅葉山ノ御祈禱、初テ被仰付。台徳院様御代龍ノ口ニテ、装

東屋鋪拜領。皆是英勝院樞機ヲ以ノ故也。仍英勝院所持ノ琵琶、其ノ重器セラレ云々。知樂院忠存ニ送リ納メラル、也。右ノ琵琶即弟子忠運權僧正ニ讓與セラレ云々。

直隆 勘左衛門。

忠運 知樂院權僧正。忠存遷化ノ後、知樂院住職被仰付。紅葉山御祈禱、忠存之通、相勤可申旨被仰付。然處當憲院様御代、犬ノ御制禁之節、寺中ニ怪我犬有之、其子細村法漸寺ニ隱居被仰付。○下略。

廿五日癸未 慶長十八年紀元二二七。立花直次 膳正。ニ邸地ヲ與フ。○寛諸

圖家系傳。

立花氏賜邸 往古江戸繪圖神田紺屋町邊ニ立花主膳ト有ル者是ナル可シ。西

松倉豊前邸ニ隣リ、北遠藤但馬邸ニ隣ル。

直次 主膳。立花。

慶長十八年三月廿五日、江戸ニ於テ屋敷を賜ふ。——寛永諸家系圖傳

直次ハ棚倉代國。城主立花宗茂ノ弟、是時常陸國筑波郡の内五千石を領す。

是月 慶長十八年紀元。佐倉 城主土井利勝 原別業 市内本郷。及

久保屋敷 市内小 ヲ賜フ。○土井利勝年譜。子爵土井家。回答。開府以降舊藩賜邸調。

土井氏別業賜給 慶長十八年土井利勝原別業ヲ賜フ。駒込大塚下屋敷是也。今

市街恢弘時代

立花氏賜邸

立花氏賜邸 事蹟

土井氏別業 賜給

土井氏別業 賜給事蹟

ノ本郷區駒込曙町富士前町小石川區巢鴨駕籠町ニ亙ル。同時ニ賜フ所ノ大塚添屋鋪即チ久保屋敷ハ、今小石川區原町ニ屬ス。

茲年^{〇慶長十八年}賜原別業使千賀太郎右衛門從奉行人受之、則命樹木等之事。此時^{〇地}凡竪九町横四町坪數八万七千三百二十三坪、後元祿十年丁丑冬西方一万五千坪就公用、献之、又寶永元年甲申秋西北方九千餘坪、入於松平美濃守吉保亭内、又享保六年辛丑仲夏、一万餘坪就公用、献之、今所存四万四千四百九十二坪。前道者自昔時東山道也、南方者始酒井忠世之亭内也、利勝相謀易于蠣殼町東北方而後配分利長利房利直、只窪之地已其餘分也。昔時世稱大炊原此邊呼大塚、其號既久焉。

華族 土井利與

屋敷	町名	位置	坪數	給收年月
下	駒込大塚屋敷	今ノ本郷區駒込曙町富士前町小石川區巢鴨駕籠町邊	竪九町横四町八万七千三百二十五坪	慶長十八癸丑歲三月、初代利勝拜領
	西ノ方	今ノ小石川區巢鴨駕籠町岩崎邸隣地	壹万五千坪	元祿十丁丑年五代利益ノトキ上ル
	北ノ方	今ノ小石川區駕籠町ノ内里俗新屋敷ト云	九千〇〇九坪三合	寶永元甲申歲利益ノトキ上ル
	西ノ方		壹万八千〇廿二坪	享保六年丑歲六代利實ノトキ上ル

下	殘現地	今ノ東京市本郷區駒込曙町一番地ヨリ十六番地マテ	坪數	明治元年十一月九日改曙町
	大塚添屋敷チ久保屋敷ト云	今ノ小石川區原町ノ内	四万六千七百六十一坪五合五勺	慶長十八丑歲三月、初代利勝ノトキ給リ、享和三癸亥歲利厚相對替願上ル
			千七百〇五坪	

明治十二年五月 開府以降舊藩賜邸調 大正二年九月再調

一、慶長十八年癸丑三月^{駒込大塚}兩屋敷凡竪九町横四町此坪數八万七千三百貳十三坪餘。 初代利勝君拜領

寶永元申年七月廿三日、松平美濃守吉保深川屋敷七千八百八十八坪六合三勺、土井周防守^{五代目利益君}大塚屋敷之内八千貳百八十坪餘外道敷六百九十坪、右之通替屋敷奉願^ハ。

寶永元申年八月九日大塚邸之内松平美濃守候へ引渡有之、同年八月十五日松平美濃守候之深川邸引替、今日松井孫七、高橋勘介罷越受取、坪數七千八百八十八坪六合三勺、御普請奉行立合。

一、正徳二年壬辰六月廿九日、左之書付貳通、御旅中利益君^ハ御書被仰遣、秋元但馬守侯^ハ被差出、屋敷御改中川淡路守島田佐渡守殿へ被差出。

下屋敷

一、大塚一ヶ所、此坪數六萬三千拾四坪五合。
同所向屋敷、此坪千七百五坪。

一、蠣殻町一ヶ所、此坪數七千八百四十五坪八合。

一、猿江壹ヶ所、此坪數四千四百九十壹坪八合八勺五才。

一、深川永代島壹ヶ所、此坪數七千八百八十八坪七合三勺。

右下屋敷之外、御預り并抱屋敷無之。六月廿七日 御名

一、正徳三巳年四月廿二日、土井周防守利益君預下屋敷數多く御座ハ間、
深川永代島七千八百八十八坪餘ニ、下屋敷差上申度奉存ハ以上。井上河内守
侯へ。

一、享保三戊戌年六月十七日 土井大炊頭 利實君時代 平山六左衛門殿へ書付被遣、御
名。

大塚屋敷坪數八万七千三百廿三坪八合、内壹万五千坪上ル、九千九坪
三合、松平美濃守へ入ル、殘六万三千三百十四坪四合。

一、享保三丙戌年十二月五日、白山御殿邊か極樂水より出火、南風、原邸類
燒、土井大炊頭大塚兩屋敷ノ内、御成殿一ヶ所、御亭壹ヶ所、厄介共差置ハ

所共住所三ヶ所。一、家中屋敷内長屋足輕家不殘。一、土藏四ヶ所。右之分、昨
日之大火ニテ類燒仕ハ、小屋相残り申ハ。

一、享保六丑年三月四日巳中刻、半込田町貳丁目カ出火、南西風ニ及、大
火、原邸御殿御長屋等不殘延燒、御土藏而已殘る。久保屋敷も同斷。

一、享保六丑年五月十六日、井上河内守侯カ御留守被召呼、野村金左衛門
罷出ハ處、駒込下敷内西之方、爲御用地、壹万八千四百貳十坪可被差上ハ。
委細之義ハ、朽木丹波守カ可被談旨、以御書被仰渡。

同年六月廿三日無滯上地相濟ハ。

一、享保十巳年二月十四日未之刻、青山久保町カ出火、南風強ク、四ツ谷、牛
羽、駒込、谷 巢鴨邊燒拂、原御屋敷御殿不殘延燒、御土藏無別條、御家中長屋
中金杉迄 少々燒失。

一、天保何年度三月日赤城邊より南大風出火、原邸奥長屋類燒。

一、嘉永七寅年五月廿三日土井大炊頭 利則君時代 原邸内壹万八十坪上地

被仰付ハ處、同年八月十七日上半上地ニ減シ、九千坪上地被仰付、同年十
月廿六日御普請奉行ニ渡。

一、文久二年壬戌年四月十四日、土井大炊頭利則君、十三代目原邸内上地九千坪御戻し被下。九年間上地。

一、明治四年八月廢藩以後、東京府本郷區駒込曙町壹番地より十六番地迄所有地、坪數四万六千七百六十壹坪五合五勺。——子爵土井家回答

鷄聲り窪 駒込竹町の西

むりし土井大炊頭利勝のやしき乃邊、板おとに鷄の聲あり。あやしめてその聲をまゝひその所をもとむるに、利勝のやしきの内の地中、聲あり、うちち見るは金銀の鷄を掘出すより、く名づくといふ。——江戸砂子

町奉行町内取締ヲ令ス。家忠日記追加。

町内取締 家忠日記追加ニ、

條々

一、一季居之事、堅被停止之。諸目前々商人之外、奉公相止お輩、又お百姓おふりうと一錢そりすへりらひ。從先規仕來者、勘兵衛米津田政。町奉行。兵四郎島田利正。町奉行。手札を取へき事。

一、於町中自然火事出來之時、奉公人一切不可出合事。

一、手負たるをの不可隱置事。

一、門立すへあらざる事。

一、やうからけ、其外何なるも面抜ふりくつつま、又ハ夜半何ミ笠を着る族あらひ、見合次第は可斬罪事。

右條々、於違犯之輩を、忽可處嚴科者也。

慶長十八年三月 日 奉行

是頃慶長十八年紀元二七三年三月。徒士頭島田利正兵四郎。ヲ江戸町奉行ニ任ズ。東

武實錄。見聞傳記。續武家補任。寛政早譜。寛政重修諸家譜。柳營補任。御役人代々記。

江戸町奉行任命 續武家補任見聞傳記之ヲ五月ニ繫クルモ、前項禁令兵四郎

利正島田ノ名見ユレハ、任命ハ其前ニ在ル可シ。

是日寛永二年正月朔日。島田次兵衛利政次兵衛重次次男、落髮以後幽也ト号ス。從五位下ニ叙シ、彈正少

弼ニ任ス。是ヨリ先キ慶長九年御使番トナリ、同十三年御歩行頭トナル。同十八年江戸町奉行ヲ勤ム。

——東武實錄

江戸町奉行目錄

南ノ方

一、慶長十三年申九月

土屋權右衛門重成。

市街恢弘時代

六五五

江戸町奉行任命

江戸町奉行任命事蹟

一、同十八年巳五月

島田 彈正忠

暫壹人にて勤ル。

見聞傳記

源利正島田 兵四郎。長四郎。治兵衛。天正四年生。

次兵衛重次第五男。母多田三吉慶忠女。

慶長九年御使番。

同十三年御歩行頭。

同十八年五月町奉行。

寛永二年正月朔日從五位下彈正忠。

年月賜五千石。

年月剃髮号幽也。

年月辭職。

同十九年九月十五日卒。年六十七。

利政兵四郎。次兵衛。彈正忠。隱居幽也。島田。

同○慶十三戊申御徒士之者被遊御預。

同十八癸丑年江戸町奉行。

續武家補任

寛永二乙丑年正月朔日任彈正忠。

同十二乙亥年隱居。

是年○慶長。島田治兵衛利政、江戸町奉行トナル。寛永元甲子彈正忠ニ任ス。後

入道幽也ト號ス是ナリ。——武徳編年集成

町奉行

慶長十八丑年任、御徒頭也。寛永八未年。

島田治兵衛利政

柳營補任

江戸町奉行

慶長十八丑年御徒頭也。島田治兵衛彈正忠守利。

累代武鑑

御役人代々記、島田彈正忠利政、家光公御代寛永八未御徒頭也。同十二亥御免。ニ

作ルハ誤カ。

〔参考一〕 島田利正

一、町奉行島田彈正忠殿○利は、島田治兵衛とて御使番成しを、當役より被

仰付より、武功も有り、徳も有、才智も有て、世の物語ニ残る事共多し。

御役人代々記○大藏省本。

利正 ○兵四郎。長四郎。次兵衛。彈正忠。從五位下。剃髮號幽也。

台徳院殿につかへたてまつり、慶長五年小山をよび眞田陣に供奉す。九年御使番となり、十三年御歩行士を預る。十八年町奉行にすゝみ、寛永二年正月朔日從五位下彈正忠に叙任し、十二年こふて剃髮し幽也と號す。こをよりさき三千石を加増ありて、すべて五千石を知行し、十八年三月加恩の地三千石を武藏國入間比企二郡のうちにつさる。十九年九月十五日死す。年六十七。法名幽也。

——寛政重修諸家譜

〔參考二〕町奉行

町奉行

慶長十七年壬子、始置二員。

〔關外〕江戸町奉行の始、板倉四郎左衛門彦坂小刑部、御入國の時分仕候。其後

土屋權右衛門米津勘兵衛、其後一人よて島田兵四郎廿年計も相勤申候。其

後加々爪民部後、大目付。堀式部後、寺社奉行。仕候。松園雜記。

——吏徵別錄

四月 ○慶長十八年(紀元二二七三年)。是頃六郷橋○武藏國荏原郡、橋樹郡。ヲ改架ス。○時慶

六郷橋改架 慶長五年六郷橋ヲ架スルコト、既ニ之ヲ記ス。十八年ニ至リ之ヲ

六郷橋改架
事蹟

改架セシ者歟。時慶卿記ニ左ノ如ク見ユ。

十四日 ○慶長十四年四月。朝天如時雨、午晴。○中六郷橋今改懸之、仍船渡也。玉川ト云ト

後ニ聞。○中

廿二日、天晴。○中巳刻ニ立品川ニ妙國寺海遠寺禪ノ寺也、大井ハ同西ノ續也。

玉川橋未成就、如先日船渡也。川崎共云、又六郷トモ。○下

八月十日丙申 ○慶長十八年(紀元二二七三年)。幕府佃村○市内京橋區。網ノ者ニ、江戸

近邊海河ノ魚獵ヲ免許ス。○御

江戸近邊海河魚獵免許 御由緒○大日本史料所收。二、

御奉書佃村網之者共被成下由來書○延寶五年巳十二月大柴六兵衛書上。

御江戸御繁昌ニ付、六拾年以前ニ罷下、御江戸ニテ、網引申、川口へ御成之刻、御役網相勤、并白魚取初、毎年御公儀様差上ケ、則爲御褒美、毎年金子貳兩宛被下成、頂戴仕。殊ニ網之者居屋敷迄御拜領仕。然處ニ、其節網之者共、御訴訟申上、得、淺草川、稻毛川兩所、御法度之場を除、御江戸御近邊之海川御赦免之御奉書頂戴仕、于今無恙獵仕來。以上。

此網引、江戸近邊之於海河、可かけ事、不可有相違、但、淺艸、稻毛御法度

市街恢弘時代

六五九

江戸近邊海河魚獵免許

江戸近邊海河魚獵免許事蹟

之場ニあり、不可引者也。

慶長十八
丑八月十日

米 勘兵衛 ○米津田政

島 兵四郎 ○島田利正

青 圖 書 ○青山成重

安 對馬守 ○安藤重信

土 大炊頭 ○土井利勝

是月 ○慶長十八年(紀元)八月 佐賀 ○肥前國 城主鍋島勝茂 ○信濃守 子直元 ○三平 江戶

ノ證人トス。 ○鍋島勝茂譜考補。寛政重修諸家譜。

鍋島氏江戸証人

鍋島氏江戸証人

鍋島氏江戸証人事蹟

慶長十九年甲寅、公三十五歳。御在江戸。偕又三平殿 ○鍋島直元 東上ノ事等ニ付、鍋島生三へ數度下サル御書アリ、合セ略シテ云。

○上 三平儀、六月廿七日相立ハ様ニ、加州 ○鍋島直茂 被仰付ル。 ○中 去十九日本

佐州へ申上ルハ、三平儀可差上ト加賀守へ申遣ル處、御所様、八月時分御上

洛之様國許へ相聞へ、御上洛の前ニ被存ル、今月五日差し立申之由申

越ル間、近日可罷着ト存ル。左ハへハ、三平儀幼少者と申、始ル御前ニ罷出儀

ニハ間、十方御座有間敷ル條、拙者召連罷出、上州得御意、御目見させ可申ト、内々存ル。 ○中 駿府へ罷出可申儀、如何敷存ル條、三平直ニ先此地 ○江戸 へ召寄せ、將軍様へ御目見ルさせ、御普請成就之刻、拙者御暇被下ル節、三平召連參府仕、御所様へ御目見仕らせ申儀ト、如何可有御座哉之由、得御意ル得ハ、御尤ニ被思召ル條、其分ニ可然由被仰ル。右之段本上州へ以書狀申上ル。其二付ル、三平へも直ニ江戸可罷通段申遣ル。 ○中

七月廿二日

生三

信濃守

勝

茂

三平殿江戸着ノ上、岡田太郎右衛門案内ニテ、佐州へ對面アリ。

鍋島勝茂譜考補

元茂 ○鍋島初直元。三平。紀伊守。從五位下。

鍋島信濃守勝茂が長男、母ハ小西氏。慶長七年肥前國蓮池ニ生る。十九年八月はじめ、台徳院殿に拜謁す。十三才。是年証人として江戸にありて、廩米千俵を賜ふ。

寛政重修諸家譜

往古江戸繪圖幸橋内鍋島下屋敷ニ隣リテ、かべ島きのかみ下有リ、或ハ是時ヲ

市街恢弘時代

以テ賜ヒタル者ニ非サル歟。元和六年火災ニ由リ營作料ヲ給セラレタルコト見ユ。

元茂鍋島。

六年和元。邸宅火災にかゝるによりて、時服三十領、及び白銀二萬三千二百五十六兩をたまふ。
——寛政重修諸家譜

鍋島紀伊守元茂

全和元。六年庚申江府出火、幸橋屋鋪類焼スルヲ以テ、秀忠將軍ヨリ家作助力

トシテ白銀貳萬三千二百五拾六兩ヲ賜ハル。

——鍋島家譜城藩。

竹中氏遠藤
氏江戸証人

冬慶長十八年。岩手濃國。邑主竹中重門後守丹。家屬ヲ江戸ニ移ス。竹中丹州府君碑銘。

此頃ニ在リ。遠藤家舊記。

竹中氏遠藤氏江戸証人 美濃國岩手邑主竹中重門ノ江戸証人ハ、

竹中氏遠藤
氏江戸証人

府君姓源氏、氏竹中、諱重門、字以敬、中十八年慶長。冬、府君帥家屬寓居江戸。

居邸地詳カナラズ。

——竹中丹州府君碑銘

同國郡上城主遠藤慶隆ノ江戸証人ハ、

慶隆様 慶長十八年諸大名様奥様方御子様達、江戸へ御引越被成ハニ付、智

勝院様慶利様御下向。此節權現様駿州ニ被爲成御座ハ付、御登城被成、安藤帶

刀殿御取次ニ、御目見被仰付ハ。慶利様三郎四郎様ト申、五之御年ニ、御座

遠藤家舊記大日本史料收。

慶隆遠藤。

十八年慶長。はじめて妻子を郡上より江戸に移す。

——寛政重修諸家譜

邸ハ往古江戸繪圖神田立花主膳直邸ノ北隣ニ、遠藤但馬下記ス者是ナル可

シ。西隣ハ松浦肥前邸也。

是年慶長十八年。若干寺院起立又ハ轉地ス。文政寺社書上。文政町方書上。府内誌殘編。續府内備考。

寺院起立轉地 慶長十八年度ニ於ケル寺院ノ起立轉地ヲ左ニ擧ク。

真淨寺 神田連雀町片町ニ起立ス。

橋場總泉寺末本郷追分海藏寺御朱印地
境内六千四拾八坪之内古跡借地千坪。

京都東六條本願寺末本郷追分
淨土真宗 泥垣山真淨寺

市街恢弘時代

寺院起立轉
地事蹟
真淨寺

正定寺

一、拙寺起立之儀、慶長十八癸丑年神田連雀町片町自分屋敷ニ三拾七年罷在〇下處、〇下 文政寺社書上

正定寺 神田元岩井町通ニ起立ス。

本寺増上寺

淺草新堀

普照山受光院正定寺

開山法蓮社淨譽上人傳問和尙元和三年三月十五日寂。〇中畧。

當山起立慶長十八癸丑年其頃神田元岩井町邊ニ罷在〇下由、〇下

文政寺社書上

正定寺門前

一、右正定寺起立之儀、慶長十八丑年寺地神田元岩井町邊ニ有之〇下由、寛永九申年中、右地御用地ニ相成、替地下谷新寺町ニ移拜領有之〇下處、右地又々正徳四年御用地ニ移上地ニ相成、當地三拾三間堂跡九百坪餘、代地拜領仕〇下。

文政町方書上

大圓寺

大圓寺 淺草藏前ニ起立ス。

天台宗東叡山末

淺草御藏前

大圓寺

一、宗旨天台宗東叡山末、眞鏡山寶現院大圓寺〇中

一、十王堂、五間四面、本尊地藏菩薩、御丈三尺、左右二十王安置。

此堂之儀、台徳院様御代慶長十八丑年島田彈正少弼殿、米津勘兵衛殿承ニ、始、十王尊像并堂共、御造立被爲遊〇下。 文政寺社書上

東岳寺

東岳寺 淺草元鳥越町ニ起立ス。

下野國富田大寺末

南昌山東岳寺

淺草新寺町

境内拜領地七百五拾六坪。

起立之儀、慶長十八癸丑年元鳥越町ニ有之、現住全達代寛永十丙子年替地被仰付、只今場所拜領仕〇下。 續府内備考

東岳寺 同所〇淺草新寺町ニアリ、南昌山ト號ス。〇中 開基長林慶長十八年元鳥越

ノ地ニ草創セシト云フ。〇下 府内誌殘編

東國寺

東國寺 淺草新寺町ニ在リ。

一、境内古跡拜領地九百九拾四坪餘、表間口東西貳拾三間、裏行南北四拾三間。

内門前地表門、東ノ方拾間、同西ノ方横町、折廻シ拾六間ニ路次有之、北ノ方拾五間、右之續北之方、惣墓所ニ御座〇下。

禪曹洞宗。

市街恢弘時代

野州富田大中寺末。

淺草山東國寺

慶長十八癸丑年當地ニ起立、其後寛文八戊申年ニ書上申由ニ御座也。

文政寺社書上

武州豊島郡 淺草東國寺門前

一、右寺地起立、慶長十八癸丑年地面拜領被致由、其後寛文八申年御改之節、書上由、往古方當所ニ地所拜領被致也、替地引地ニ當所ニ罷在也、舊記書留度之類、燒故相分不申由。〇下 文政町方書上 〇淺草東國寺門前

東國寺 同所 〇淺草新寺町ニアリ。淺草山ト號ス。本寺前寺 〇富田大中寺末東岳寺ニ同シ。慶長

十八年ノ起立ト云フ。元ハ藥師堂タリシカ、台徳院殿御放鷹ノトキ、御休憩アラセラレ、台命ニ依テ一寺トス。山寺號モ命ニヨレル由云傳フ。開基通天了達

ハ、寛永十八年十月十八日寂セリ。本寺十五世ノ僧獨步秀作ヲ請提シテ開山トセリ。本尊釋迦及ヒ藥師 往古ノ像ハ、明和九年ノ火災ニ鳥有シ、コノ像ハ後世摸作セル物ナリ。 地藏ヲ安ス。境内拜領地九百九十四坪餘、門前ニ商壓アリ。〇下 府内誌殘編

崇福寺

崇福寺 淺草田原町ニ起立ス。

拙寺儀古來、濱町邊ニ崇福庵ト申有之由處、慶長十八癸丑年此地ニ起立仕也。

一、境内拜領地 千三百五坪二合五夕。

一、宗旨 曹洞宗本寺下總國國府臺總寧寺。

一、山號 海鳴山。寺號 崇福寺。

一、開闢 慶長十八癸丑年改庵號海鳴山崇福寺ト。 文政寺社書上

崇福寺 田原町 〇市内淺草區ニアリ。海鳴山ト號ス。本寺前寺 〇下總國國府臺總寧寺ニ同シ。古

ハ崇福庵ト號シ、濱町ノ邊ニアリシカ、慶長十八年酒井雅樂頭忠世此地ニ開基シテ一寺トナシ、本寺十七世骨山恕徹ヲ招待開山トシ、香山泰嚴ヲ中興開

山ト稱セリ。徹ハ元和九年八月十一日寂シ、嚴ハ寛文元年六月十三日寂ス。本尊釋迦文殊普賢ヲ安ス。又位牌堂ニ如意輪觀音ヲ置ケリ。巡拜札所ノ一番ナリト云フ。境内千三百五坪餘、拜領地ナリ。〇下 府内誌殘編

慶印寺

慶印寺 淺草ニ起立ス。

覺

一、境内貳千四百五坪半。

市街恢弘時代

右之内古跡拜領地千七百拾五坪半。

明和九辰年類燒之節書物等燒失仕、拜領之年月相知不申候。

古跡淺草寺借地六百九拾坪。

明和九辰年類燒之節書物燒失仕、借地年月相知不申候。尤永借与申傳候。

一、京都妙滿寺觸頭

一、日蓮宗淺草長遠山慶印寺。

一、當山開基日忠上人、法名慶印。

但、慶長十八丑年開闢也。小野次郎右衛門忠明次男俗名相知不申候。寛永十

二千子年十一月三日化。

一、開基檀方 小野次郎右衛門忠明

寛永五戌十一月七日卒。法名清岸院殿妙達大居士。位牌廟所御座候。

于今事蹟相續仕候。

子孫濱町八百石小野次郎右衛門一刀流劔術師範イタス。○中

塔中

一、南側 壽仙院

開基日好上人、時代相知不申候。古の仙林院ト申候。天明五巳年改院仕候。

一、派觸頭ニテ諸役相勤候處、奉願改号ニ相成候。

一、北側 圓乘院

開山日相上人、時代相知不申候。古の利圓坊与申候。天明五巳年改院仕候。○中

一、北側 寛受院

開山右同斷、古之勸成坊と申、天明五巳年改院仕候。

一、本成院

開山日遠上人、時代相知不申候。明和九辰年燒失後再建不仕候。古の本成坊与

申候。天明五巳年改院仕候。

長遠山慶印寺

淺草 不唱小名。

境内 古跡拜領地千七百拾五坪半。

慶長十八癸丑年起立之由申傳候得共、拜領地借地等之年月、明和九辰年類

燒之節書物燒失仕、相知不申候。

續府内備考

覺真寺 西久保ニ起立ス。

西ノ久保淨土宗天徳寺末

淨土宗 芝一本榎 鏡智山大圓院覺真寺

市街恢弘時代

六六九

一、拜領地

境内六百參拾坪。内七拾壹坪半門前。但し町方支配。

當寺起立之義を慶長十八丑年西ノ久保ニ罷在〇下畧。

——文政寺社書上

松源寺

松源寺 四番町 〇市内麴町區ヨリ牛込ニ轉地ス。

禪宗濟家京妙心寺派觸頭
蒼龍山松源寺

右基立之義を、開山蓬山宗丘大和尚道德人故、松平越中守殿先祖定綱公禪學の師範ニ付、御吹擧有之〇、權現様〇達御上聞、御目見被仰付、御法聞御座〇處、一々御答申上〇義、殊之外御機嫌ニ被爲思召、御料理御相伴被爲仰付、御茶碗杯拜領仕、今ニ什寶所持仕〇。定綱公御願被下、四番町ニ〇寺地拜領、一字造立仕、蒙公許蒼龍山松源寺ト号罷在〇處、慶長十八丑年右地面御用地ニ付被召上、只今之牛込ニ〇代地拜領引移申〇。

境内拜領地 千五百五拾八坪。但表間口四拾貳間。
北西之方添地 四百九拾四坪。但シ元祿六酉年本多紀伊守殿寺社御奉行御勤役中御免。

御年貢地 支配名主 五三郎

西之方添地 貳百六拾四坪餘。但シ正徳三辰年本多彈正少弼殿寺社御奉行御勤役中御免。

無年貢地 支配名主 金次郎

右二百四拾六坪餘

表間口拾壹間之所

貸店 五軒

横町北ノ方地借 壹軒

裏店 家主 壹軒

右門前地を、正徳年中添地御免之節同様願濟ニ相成、寺社御奉行支配之處、延享年中方町奉行所之支配ニ相成申〇。

惣合貳千貳百九拾六坪半餘

——文政寺社書上

牛込松源寺門前

一、右松源寺之儀往古四番町ニ有之〇所、慶長十八丑年中御用地ニ被召上、當時之地所〇代地被下置引移〇。〇下畧。

——文政町方書上

市街恢弘時代

諸大名第壯麗

十九年○慶長○紀元二二七四年正月、是頃江戸諸大名第壯麗ヲ競フト云フ。○當

諸大名第壯麗事蹟

諸大名第壯麗

慶長諸大名ノ第邸壯麗ヲ競ヒタルコトハ已ニ之ヲ記ス。

廿三日○慶長十九年正月○中畧

此一兩年中、諸大名江戸屋敷々々之家屋を盡美。門は上總主大御所江戸一番也。家は加賀國松平筑前守將軍一番也。

淺草寺領安堵狀

二月十八日辛丑○慶長十九年○紀元二二七四年○辛丑三正綜覽將軍秀忠○德川淺草寺○市内二寺領ノ黑印ヲ與ヘ、寺規ヲ定ム。○淺草寺志慶祿記

淺草寺領安堵狀事蹟

淺草寺領安堵狀 慶長十八年前將軍家康淺草寺ニ寺領ヲ與ヘ、金地院崇傳ヨリ、本多正信土井利勝ニ書ヲ贈リテ將軍秀忠ヘノ取成ヲ請ヒタルハ上記ノ如シ。

台德院様御黑印

淺草寺

武藏國豊島郡○寛永五年ノ安堵狀ニハ、千束村三字ヲ加フ。

淺草寺

一、當寺領五百石此内別當分貳百五十石。但、修理料共。

一、衆徒之跡、濫凡僧不可居住。同寺院之明屋敷、不可抱置事。

附、諸式法度以下、可隨寺務之下知、并公役修造之節、有令怠慢輩、忽可召放坊領事。

一、山林竹木門前屋敷等、如先規諸役令免除事。

右任去慶長十八年三月十三日先判旨、永不可有相違者也。

慶長十九年二月十八日

御黑印○德川秀忠

淺草寺志○慶祿同

十八日○慶長十八年二月武藏國豊島郡淺草寺に寺領の御朱印を下さる。その文にいふ。寺領五百石の内二百五十石は、別當領并修理料たるべし、衆徒の缺あらん時、凡僧みだりに居住すへからず、同寺院空宅抱置へからず、諸事寺務の指揮をうくべし、公役修造のとき怠慢する徒は、忽にその坊領放去すべし、山林竹木並に門前宅地、先規のごとく免除せしむへし、すべて慶長十八年三月十三日先令のごとくなく相違あるべからずとなり。——台德院殿御實紀

三月十三日乙丑○慶長十九年○紀元二二七四年○乙丑三正綜覽幕府守隨兵三郎○正次ニ關東

秤所ヲ命ス。○守隨文書。由緒書。

關東秤所 相傳フ、

關東中秤目事、任天正十一年十月五日先御判旨、如年來、彌全可令沙汰之趣、所

關東秤所

關東秤所事蹟

被仰下也。仍執達如件。

慶長十九年三月十三日

○阿部重次。對馬守花押
○土井利勝。大炊助花押

守隨兵三郎殿

守隨文書

〔參考〕

由緒書○安永四年八代目彦太郎ニ、
後○前。天正十年十一月廿六日御朱印頂戴仕。後○前。天正十年十一月廿六日御朱印頂戴仕。

御文言

甲州金秤子之事、如前々不可有相違者也。仍如件。

天正十年十一月廿六日
御朱印

榊原 小兵衛

神谷 彌五助

奉之。

守隨彦太郎殿

此節稱号相改、吉川彦太郎義守隨彦太郎と名乗可申旨、被爲仰付。同十一年十月五日御分國中壹人ニ秤所之御朱印並御扶持御切米頂戴仕。寛永五年日記中、同年十一月差出シタル願書御分國御朱印頂戴云々ノ下、左ノ文言アリ。

風災

八月廿八日戊申○慶長十九年(紀元二二七四年)○戊申(三正綜覽)江戸大風雨、家屋多ク倒壞ス。

○變災
篇參照。

風災 變災篇ニ記載ス。

同○慶長十九年八月二十八日未尅、關東江戸大風、大名小名屋形一字モ不全。其内顛倒

之屋形多之。民屋以下可察之。伊達正宗松平筑前守○前田利常千疊敷ノ家、同門以

下倒、況哉其外ノ家屋、不可勝計。五十年以來之大風ト云々。其中ニ酒井與四郎

家門、不殘悉倒。駿河遠州三河ハ風不吹。

——當代記

市街恢弘時代

六七五

里見氏邸收

九月九日己未○慶長十九年(紀元二二七四年)○己未(三正綜覽)館山○安房國城主里見忠義○安房守收封

里見氏邸收
公事蹟

セラル。其江戸邸收公亦此時ニ在ル歟。○當代記
里見氏邸收公 里見氏江戸邸ハ、慶長江戸圖西九下東南隅堀端ニ、里見安房守ト有ル者是也。其賜邸ノ日ヲ知ラサレドモ、其收公ハ收封ノ時ニ在リタル者ナル可シ。寛永ノ往古江戸繪圖其永井信濃守○尙邸ト爲レルヲ見ル。里見氏收封ハ、

九月九日○慶長十九年里見安房守○忠出仕之處、從將軍以使曰、安房國可致國替トノ儀也。扱安房守一僕ニテ、大久保千賀○相模守孫加賀守子也所ニ可居トノ命也。任貴命居彼廣間安房ヘハ本多出雲守○忠内藤左馬介○政其外那須衆、彼是十頭計被遣、安房守家老之者若及難澁拘城ハ可責殺ト也。無異儀於令出國者、日比安房守領分可移鹿島トナリ。此安房守ハ、嫁大久保相模守孫女之處、彼縁坐歟云々。是去々年山口但馬守ト相模守公事之時、就縁者、專及荷擔儀歟。
十月十日、里見安房守伯父正木大膳在駿府、自大御所以使曰、安房守並大膳、伯耆國に可被相上、於彼國知行可被出ト也。
——當代記

將軍江戸出發

十月廿三日壬寅○慶長十九年(紀元二二七四年)○壬寅(三正綜覽)將軍秀忠○德川大軍ヲ率井テ、

江戸○武藏國ヲ發ス。豐臣秀頼兵ヲ大坂○攝津國ニ舉クルヲ以テ也。松平忠輝○上總介以下留守ス。前將軍家康○德川亦是ヨリ先十一日庚寅○慶長十九年(紀元二二七四年)十月廿三日京師ニ入

將軍江戸出發
發事蹟

ル。○和田文書。條令。吉川文書。譜牒餘錄。寛永諸家系圖傳。松平家譜。台徳院殿御實紀。
將軍江戸出發 大坂冬ノ陣、藤堂高虎先鋒トシテ慶長十九年十月八日先ツ發シ、十一日前將軍家康一万餘騎ヲ率シテ駿府ヲ出馬シ、廿日先手一番伊達政宗、廿一日同二番上杉景勝江戸ヲ發シ、廿三日將軍秀忠松平忠輝以下ニ留守セシメテ江戸ヲ發ス。

留守居仕置等丈夫申付ハ間、今日廿三日神奈河まで出馬仕ハ、やがて上着可仕ハ之間、御とりつめ被成ハ儀、我等まかり申ハ、御待被下ハ様可申上ハ、誠自由成申上様マてハ、此時マてハ間、能々可然様可申上ハ、猶小澤瀨兵衛口上申含ハ也。

十月廿三日○慶長十九年

秀忠 花押

本多上野介殿○純

——和田文書○大日本史料收

定

市街恢弘時代

一、於在々所々、雜說申廻ひ者可相改事。

一、人質躰之者、其外女又老童、船渡こる可相改事。付、不審成者於有之也、何方ニテモ押置、江戸御留守居中に可申改事。

一、大道之外、人數不可通事。

一、御留守中、東エ通人數有之、相改可申事。

一、若黨小者并夫丸御陣ヨリ致欠落、在々ニ在之ニ付、御領私領ニヨラズ、主人ヨリノ理次第、押込トラへ可申事。付、御陣ヨリ欠落仕、者隱置、宿之儀不及申、郷中迄可爲曲事。

一、小者夫丸御陣ヨリ罷歸ニ付、主人ヨリノ手形ヲ取可參。若手形無之、罷下者有之、可相改事。

一、御年貢難澁仕、ニ付、急度可申付事。

慶長十九年 甲寅十月十一日

—— 條 令 ——

留守ニ關スル諸命令ハ、

今度留守中、縱如何様之儀有之トイフトモ、城中ヲ出ヘカラズ。但、酒井河内守○重相談セシメ、折々ハ手前之番所マテ出ラレ、諸法度以下カタク可申

付也。

十月廿三日○慶長十九年

越後少將○松平忠輝 どのへ

今度留守之儀申付上、萬事遠慮ヲカヘリミズ、諸法度以下堅申付ベシ。然、最上宇都宮會津之人數、米津勘兵衛○田島田兵四郎正利ニモ、右之旨仰出サレ、違背スヘカラサルノ條、相談セシメ、萬端念ヲ入申付ヘキ事肝要也。

慶長十九年十月廿三日

鳥居左京亮○忠政 どのへ

今度留守之儀申付上、鳥居左京亮米津勘兵衛、島田兵四郎相談セシメ、念ヲ入申付ヘキ事肝要也。

慶長十九年十月廿三日

最上駿河守○家親 殿へ

會津○蒲生忠郷

年寄中

今度留守之儀申付上、諸法度以下、鳥居左京亮、最上駿河守、會津、宇都宮之人

市街恢弘時代

數、相談セシメ、萬端念ヲ入申付ヘキ者也。

十月廿三日

米津勘兵衛尉とのへ

島田兵四郎とのへ

今度留守之儀申付上之、縦如何様之事有之トイフ共、城中ヲ出ベカラズ。諸法
度以下、萬事相談セシメ、堅申付ヘキ者也。

十月廿三日

酒井備後守利。忠。このへ

内藤若狭守次。清。このへ

高木主水正次。正。このへ

朝倉藤十郎正。宣。このへ

諸法度

關東之儀、丈符ニ被仰付、江戸ニ上總殿御留守居マてハ中。大夫殿。正。則。島

筑前殿長政。黒田。左馬殿。嘉明。の。江戸ニ居住ハ。吉川文書史。料。收。大。日。本。

此外内藤政長馬助。左ノ留守シタルコトハ、譜牒餘録ニ見エ、溝口宣勝者守。伯。ノ留守

シタルコトハ、寛永諸家系圖傳ニ、松平重勝前守。越。ノ留守シタルコトハ、杵築松平

家譜ニ見ユ。

廿三日九。慶。長。十。年。十。月。御所江城を御發駕あり。よて御留守は、若君大。猷。院。殿。を。こ。ッ

め給ひ、酒井河内守重忠、酒井備後守忠利、内藤若狭守清次、内藤左馬助政長、高

木主水正、次朝倉藤十郎、宣正、諸事を沙汰せしめ、越後少將忠輝、朝臣松平下

野守忠郷、最上駿河守家親、鳥居左京亮忠政に番衛せしめらる、忠輝朝臣には、

何様の事ありとも出城せず、河内守重忠にはからひ、時々番所に出所し、法令

を嚴にすべし、備後守忠利若狭守清次、主水正、次藤十郎、宣正に、何様にも城

をはなれず、每事相議してはからふべし、左京亮忠政に、每事忌憚なく、法令禁

戒を嚴にし、最上宇都宮會津の人数、并米津勘兵衛、田政、島田兵四郎、利正にも

令せられたれば、彌違背せざらんやう相議し、よく心入て令を施すをもて專

要とすべし、勘兵衛、田政、兵四郎、利正には、鳥居、最上、并會津、宇都宮の人数と相

議し、法令禁戒のこころもちふべしとなり。最上駿河守家親は、留守の命蒙り

たれば、鳥居、并米津、島田と會議し、万事こころ用ひん事肝要たるへしとなり。

會津、并宇都宮の家司等へも、おなじさまに御黒印もて令し下さる。會津は忠

の、子千福、幼稚ゆへ、命せられ、家司も、宇都宮も、奥平忠昌死して、そ郷。幼。稚。ゆ

市街恢弘時代

の番、渡邊囚獄長は沼津の番、小笠原安藝信盈、同新九郎廣信は相州三崎の番、向井兵庫助正綱は走水の番、松平玄蕃頭清昌は三州本坂の番、遠山久兵衛友政は桑名城番、内藤紀伊守信正は江州長濱、戸田左門氏鐵は膳所、本多彦八郎康俊は、その加勢としてつかはさる。其他の城々、番衛嚴に命せらる。西郷孫六郎正員は、内藤左馬助政長と共に、房州の押を命せらる。また福島左衛門大夫正則、加藤左馬助嘉明、黒田甲斐守長政、平野遠江守長泰、谷出羽守衛友は、江戸にこゝめらる。世に傳ふる所、福島は秀頼にちなみあり、其外加藤、黒田、谷、平野、さみな豊臣家功臣なるが故、わざと江戸にこゝめられしといふ。さて又法令を下されしは、各所にて雑説流言をあすもの査檢すへし、人質の外、婦女幼童は、船渡場にて査檢し、あやしげあるものは、江城留後のともがらへ訴出べし、街道の外、往還せしむへからず、東國へ行ものあらは査檢すべし、若黨奴僕役夫等、陣中を亡命し、隠れすむものあらんには、その主の心まかせに、公私領をわかず、おしよせ召取べし、かくし置たるものはさらあり、その郷中曲事たるへし、陣中より歸る僕卒は、そのぬしの券をもて往來せしむべし、無券のものは査檢すへし、賦税の澁る者は、嚴に命せらるべしとあり。今日供奉の一番、酒井左衛門尉家次、松平甲斐守忠良、松平土佐守忠實、設樂甚三郎貞代、

小笠原若狹守政信、根津小五郎是宗、水谷伊勢守勝隆、仙石兵部少輔忠政、同大和守久隆、相馬大膳亮利胤、六郷兵庫頭政乗、政乗明年夏は、本多出雲守忠朝に屬す。二番は、本多出雲守忠朝、眞田伊豆守信之、秋田城介定季、淺野采女正長、重松下石見守重綱、一色宮内義直、須賀攝津守勝政、三番は、榊原遠江守康勝、松平丹波守康長、北條出羽守氏重、成田左衛門尉氏宗、丹羽五郎左衛門長重、四番は、土井大炊頭利勝、佐久間備前守安政、同大膳亮勝之、堀美作守親良、同淡路守直重、筒井主殿助正次、溝口伊豆守善勝、高力左近大夫忠房、由良信濃守貞繁、五番は、酒井雅樂頭忠世、忠世は御側にあり、その子万千代忠行、その人數引つれて、こゝに押したり。細川玄蕃頭興元、牧野駿河守忠成、脇坂主水正安信、土方掃部頭雄重、新庄越前守直定、杉原伯耆守長房、鳥居士佐守成次、稻垣平右衛門重綱、御傍には、本多大隅守忠純、立花左近將監宗茂、同主膳正直次、前田大和守利孝、日根野織部正吉、明岡部美濃守宣勝、藤田能登守信吉、菅谷左衛門尉範貞、其外那須衆、由利衆、芦田衆、津金衆、其次は、秋元越中守長朝、玄たかへり。凡て供奉の有司、老臣は、雅樂頭忠世、大炊頭利勝、安藤對馬守重信、旗奉行は、島田次兵衛重次、翌年は、屋代越中守。三枝土佐守昌吉、鏈奉行は、小林勝之助正次、米津梅千之助康勝、永田善左衛門重利、多門縫殿信清、安藤次右衛門正次、小宮山

又七郎昌純・戸田平左衛門光定・伊東左馬允政世・小坂新助勝吉・松田六郎左衛門玄勝・室賀源七郎満俊・寛勘右衛門元成・大番頭は阿部備中守正次・牧野豊前守信成・渡邊山城守茂土岐山城守定義・松平丹後守重忠・書院番頭は水野隼人正忠・清遠山伯耆守忠俊・松平越中守定綱・花島番頭は水野監物忠元・井上平九郎正就・板倉周防守重宗・成瀬豊後守正武・使番は小澤瀬兵衛忠重・山田十大夫重利・朝比奈源六正重・阿倍四郎五郎正之・今村彦兵衛重長・牟禮郷右衛門勝成・近藤勘右衛門用政・石川八左衛門政次・渡邊半四郎宗綱・村瀬左馬助重治・中川半左衛門忠勝・溝口外記常吉・鶴殿石見氏長兼松源兵衛正成・服部與十郎政光・三宅半七郎重勝・青山石見守某・石河三右衛門勝政・川口長三郎近次・大田善太夫吉正・久貝忠三郎正俊、一説、中山勘解由照守・村瀬左馬助重治、安藤次右衛門正次は、翌夏の使番とす。鐵炮の奉行は、秋山平左衛門昌秀・荒川又六郎忠吉・弓奉行は中山勘解由照守・神谷與七郎清正・具足奉行山角又兵衛正勝・伊東長兵衛弘祐、一説、長兵衛弘祐・小野次郎右衛門角又兵衛正勝・青木五左衛門高明・石川市右衛門某は、明年の諸道具奉行とす。目付は山岡五郎作景長・加藤伊織則勝・永井彌右衛門白元・高木九兵衛正次・木村源太郎元正・太田新左衛門信勝・宿割役は、淺井六之助道多・五味金右衛門豊直・柴山九右衛門吉次・須田次郎大夫廣莊

市川茂左衛門満友・青木小右衛門正定・高田小次郎直政・藤川庄次郎重勝、夏陣は横地左衛門安信を加ふ。幕の奉行は朝比奈彦右衛門眞直・内藤平右衛門某・持弓頭は内藤外記正重・持筒頭は青山善四郎重長、家譜に使番より兼る。但、重長は先手弓頭は、久永源兵衛重勝・本多太郎左衛門信勝、同じ鉄炮頭は、近藤平右衛門秀用・屋代越中守秀正・加藤喜助正重・森川金右衛門氏信・服部中保正・細井金兵衛勝久・駒木根右近利・久倉橋匠助政勝・歩行頭は、植村志摩守家政・内藤市正信・廣松平内膳重利・安部彌一郎純盛・奥扈從は、菅沼主殿頭定官・小山左源太某・本多主水正某・松平伊賀守定時・三浦作十郎重成・鳥居讚岐守忠頼・内藤左兵衛政次・神尾猪之助守勝・伊澤吉兵衛政信・太田新六郎資宗・安藤甚助某・川口左門正武・井上半三郎某・内藤小一郎某・木造長吉某・三宅惣十郎正勝・小納戸役は、牧又十郎長重・三宅藤五郎政吉等、すべて惣軍二十万餘騎、整々堂々と隊伍をとゝのへ、旌旗日にかゝやきて、江戸より伏見まで百二十里が間、透間もなく、野にも山にも絡繹たり。此日は神奈川の驛にとまらせ給ふ。大御所徳川には、今朝永原の御旅館を出立たまひ、矢橋より御船を召る。四十八挺立の早船なり。膳所の城主戸田左門氏鐵船中にて御膳を献ず。午刻御入洛ありて、二條の城に

いらせたまふ。片桐市正且元并にその子出雲守孝利拜謁して、大坂城中反逆の事状を聞え上る。吉田の神龍院梵舜も參謁す。福島左衛門大夫正則より大坂へ遣はしたる使者歸り來る。城中さらに返答の旨なしといふ。市正且元藤堂高虎二人を召て、大坂城溝の淺深をこはせ給ふ。又地圖を以て攻城の計略を議し給ふ。青山善四郎重長、關東の御使として參り御けしきを伺はせらる。いそぎ江戸御出馬あるへしと仰せまいらせらる。

台徳院殿御實紀

今川氏眞葬

十二月廿八日丙午

○慶長十九年(紀元二二七四年)○丙午(三正綜覽)

今川氏眞

○入道

江戸ニ卒シ、

牛込万昌院

○現時武藏國豐多摩郡中野町

ニ葬ル。

畧譜。牛込御殿山久寶山万昌院鬼簿。譜。及聞秘録。東京通志。

今川氏眞葬瘞事蹟

今川氏眞葬瘞

左ノ如シ。

氏眞○今

永祿三申年五月八日四品、同年五月十九日父義元依戰死家督、同十一月辰年十二月十二日叔父武田信玄駿府へ亂入、領國屬信玄。此時氏眞駿城去る遠州掛川ニ移。同十二年巳年五月六日舅北條氏康館ニ至る。暫時在住。元龜元庚午年十二月十七日遠州濱松ニ至、御當家倚賴。其後薙髮宗閻も改名。慶長年

中御當家に御從屬奉願、西丸下并於品川兩所、屋鋪被下置。此時持傳ハ近江國野洲郡長島村之知行五百石、如先規被下置。慶長十九寅十二月廿八日、七十七歳ニ死。牛込万昌院葬。

妻北條左京大夫氏康女。

略譜

今川氏眞入道宗閻、七十七歳、慶長十九寅十二月廿八日。法名仙岩院殿量山泰榮大居士。

牛込御殿山久寶山万昌院鬼簿

家康公關東八州ヲ領シ玉ヒ、武州江戸ニ御居城ヲ定メ玉フ。此時氏眞ハ彌浪々ノ身トナリ、往昔ノ御好ヲ慕ヒ、江戸ニ來リ、家康公へ色々ト御歎キ被申故、内府公義元ノ御入魂ヲ思召、有御對面、御懇意ヲ加ヘ玉フ故、氏眞夫ヨリ度々御城へ參リ、不遠慮ニ長咄セラル、ヲ、内府公ウルサク思召、度々不參様ニト、品川ニテ屋布ヲ被下、食祿ヲ賜フ。是ハ品川ハ御城へ程遠ケレバ度々參ルマシトノ御思慮ナリ。去レハ氏眞ノ子孫、是ヨリ品川ヲ以テ氏トシ、御家人トハナリス。

及聞秘録

今川氏眞墓

牛込區築土八幡町萬昌院ニアリ。今川氏眞慶長十九年甲寅十二月廿八日

卒ス。年七十七。本寺開基僧長得月ハ、今川義元ノ第三子ニシテ、氏眞ノ弟ナリ。因テ之ヲ葬リ、仙巖院豊山恭英ト諡ス。時ニ寺今ノ市谷左内坂町ニアリ。寛文二年壬寅、今ノ地ニ移リ、亦之ヲ改葬スト云。○寺今豊多摩郡中野町ニ移ル。

東京通志

是年○慶長十九年(紀元二二七四年)幕府中間及小人ニ組屋敷ヲ西久保○市内芝區ニ給與ス。○文政町方書上。

中間小人組屋敷給賜
中間小人組屋敷給賜事蹟

中間小人組屋敷給賜 文政町方書上○神谷町書上。左ノ如シ。

神谷町

一、當町起立之儀也、乍恐權現様御代、於參州御手廻り御中間相勤、所々御供仕以者、天正十八寅年御入國之節、御當地以被召連、慶長十九寅年於當西久保ニ、預組共大繩組屋敷拜領仕、元和二辰年御供役御免被仰付、御本丸御長屋御門番、永々相勤以様被仰付以旨、青山伯耆守様酒井備後守様被仰渡。○中畧又町内御小人方繩拜領町屋敷之儀も、御中間方同様從參州御供之面々以、慶長十九寅年大繩組屋敷ニ拜領被致。○中畧一、拜領屋敷町内壹圓以、大繩地共七ヶ所、

東側、表田舎七拾五間三尺五寸、裏幅八拾四間四尺、奥行南之方廿二間、北之方拾九間、但不同。此坪數千六百廿貳坪四合壹夕。
西側、表田舎九拾六間五尺五寸、裏幅同斷、奥行南之方貳拾壹間、北之方廿六間五寸、但不同。此坪數貳千八百拾壹坪五合二夕五才。
貳ヶ所合坪數三千八百三坪九合三夕五才。

御中間頭 古澤茂右衛門組 御長屋御門番 梶田伊右衛門 山本長六 畑定次郎 畔柳儀藤次

畔柳惣吉 戸川彦四郎 小林彦八郎 倉地八三郎

近藤十三郎 御中間頭 古澤茂右衛門組 仲ヶ間觸番 松村太兵衛 猪野彌吉 清水市兵衛

高橋又平 御中間頭 古澤茂右衛門組 用金屋敷 所太田金之助 右同斷 猪野三郎助

頭同組 御馬預り村松四郎兵衛 所定番役 鈴木龜次郎 御目付支配幼年ニ付無役 右同斷 池内徳次郎 古澤茂右衛門組 御扶持方賄役 加藤源内

同組同斷役 小普請組 長井五右衛門支配 御作事方御披官 元御中間方 栗原清九郎 鈴木勝五郎 川口宗兵衛

右之分當町起立之廉ニ申上以通り、慶長之度拜領被致以御中間方大繩地之分ニ御座以。

市街恢弘時代

東側、表田舎間三拾九間壹尺五寸、裏幅同斷。奥行北之方拾間。此坪數七百六拾九坪三合六夕壹才。

紅葉山火之番

元御小人

大竹龜三郎。

御小人頭

岩崎傳兵衛組

御小人目付

小倉要藏。

御小人頭

兼松彌助組

御小人

木村滿三郎。

小普請方手代

元御小人

廣瀬五郎右衛門。

御小人頭

兼松彌助組

御小人目付

持田登平。

御小人頭

兼松彌助組

御小人

木村滿三郎。

右之分御中間方同様慶長之度被致拜領。御小人方大繩地分二御座也。

東側里俗廣小路入口北角

一、表田舎間七間五尺五寸、裏幅同斷。奥行北之方拾壹間壹尺。此坪數百五拾五坪。

寄合御醫師

吉田貞順

右之古來御中間方大繩屋敷之内、御中間坂田十兵衛拜領屋敷二有之也。享保九辰年八月同人出奔致也。付跡明屋敷二相成、同拾一巳年四月奥御醫師内田玄勝様御拜領ニ相成、寛延元辰年八月御番御醫師吉田一庵様拜領屋敷ニ相對替被致也。

西側北角

一、表田舎間五間、裏幅六間。奥行北之方拾貳間四尺五寸。此坪數六拾七坪五合五夕。

小普請組長井五右衛門様御支配

伊達本覺

右之元御中間方拜領大繩屋敷之殘地有之也。處、年月不知、二之丸火之番作田平右衛門様御拜領屋敷ニ相成也。所子細不知、安永五申年十月中、五代以前伊達本覺様拜領被致也。

同所北角西之方裏續

一、表田舎間六間、裏幅同斷。奥行北之方拾壹間三尺五寸。此坪數六拾七坪五合五夕。

小普請方吟味手傳役

篠原小十郎

右之元御中間方大繩拜領町屋敷殘地有之也。處、奥山三阿彌山本傳阿彌支配御小納戸口上番被相勤也。篠原小八郎様、正徳二辰年六月拜領被致也。

西側南角

一、表田舎間七間、裏幅同斷。奥行北之方拾壹間五尺五寸。此坪數百五拾七坪八夕。

當町住居浪人

下條太市郎幼年二付

後見同

下條重三郎

右拜領町屋敷之儀、乍恐權現様御代大奥ニ御名前不知、御乳差上之御乳母様申御方様、先祖下條又左衛門儀被召仕罷在也。其節居屋敷拜領仕度旨右之御方様に申上置也。所、其後西久保ニおゐる御中間方大繩組屋敷拜領被致也。殘地有之也。付、慶長十九寅年拜領仕也。尤町屋敷ニ相成也。儀も御中間方同時ニ、一圓神谷町之内へ相籠申也。先祖又左衛門殿、當時太市郎殿迄十三代ニ相成申也。

湯島天神門前町

○市内。麻布市兵衛町。○市内。等起立ス。○文政町

市街起立事
蹟

湯島天神
門前町

市街起立 慶長十九年度ニ於ケル市街起立、左ノ如シ。

湯島天神門前町 慶長十九年度ニ起立シタル者ノ一也。

湯島天神門前町

一、當所往古ノ百姓地ニ有、武州豊島郡峽田領湯島郷ニ相唱ル由、尤古來當所天神邊ノ温泉湧出ル場所所有之ルニ付、湯島ニ号シ趣申傳ル。

一、町銘起立之義、年來相立、睨ル相知レ不申得共、天神社地之内ニ有、慶長拾

九年町家ニ相成ル由ニ御座ル。其後寺社御奉行所様御支配之處、寛文四辰年

二月中町御奉行所様御支配ニ相成申ル。尤天滿宮門前之義故湯島天神門前

町ニ相唱申ル。

一、町内之義ニ坂上坂下ニ有之ル間、里俗ニ上町下町ニ相唱來申ル。

一、町内ニ隣町三組町境ニ、古來家根付黒門有之、天滿宮惣門ニル處、正徳六申

年正月、中類燒致ルニ付、其後木戸ニ相成ル得共、今以黒門ニ里俗相唱申ル。

一、湯島男坂

高サ一丈五尺餘
道幅九間程
登リ九間程
高サ一丈五尺
道幅一丈五尺
登リ一丈五尺
同所女坂

同所中坂

高サ一丈一尺
道幅三間程
登リ三間程

右ノ男坂ニ申ルニ、一體登リ急成坂ニ有之ル故、男坂ニ相唱、女坂之方ニ、所々

足休メ等有之、緩成坂ニ有之ル間、女坂ニ相唱來ル趣、中坂之義ニ、湯島妻戀坂

ニ同所男坂ニ有之ル故、中坂ニ相唱來ル趣申傳ニ御座ル。

但、男坂女坂ニケ所之義ニ、當所坂下家主共ニ引請修復等仕ル。

中坂之義ニ、喜見院並畦下小普請方手代御組屋敷持合場所由ニ有、双方よ

リ修復仕ル義ニ御座ル。

一、御手洗跡

家持 長 兵 衛

同 彦 兵 衛

同 市 郎 兵 衛

右ノ町内南西之方ニ有之、右三人所持地所續裏之方ニ、往古天滿宮地主戸隠之御手洗之由申傳ル得共、右三人之ニの地所ニ入込、凡南北ニ拾四間程、東西ニ七八間程之所を申ル。當時家作等有之、何之頃カ取潰レハ哉、古來之義故、睨ル相分リ不申ル。尤當所ノ高場ニ有得共、今以地を纔堀明ケルも、自然ニ出水致ル趣、申傳之風聞ニ御座ル。

市街恢弘時代

一、

名主

勝

後見 八郎右衛門

右勝五郎父後見八郎右衛門義、山田氏ニ有、當所草創人之由、往古百姓ニ有之
 以哉、慶長年中、先祖佐右衛門義、名主役相勤、夫々連綿仕、役義相勤、是迄拾三
 代所持地面ニ住居相續仕、處、再三類焼致し、土藏共焼失致、間、器物並古書
 留等無御座、由緒等、宛々相分り兼申、且私支配町々々、不殘天滿宮氏子ニ
 有、殊ニ湯島天神社地門前、別當喜見院地所ニ有之、同所天神門前町之義、
 天滿宮宮本ニ有、萬年御本社並末社向境内之義共、不依何事ニ世話致、以ニ付、
 同院より上野表、申立、先年、上野御本坊、三本入臺付扇子献上、御年頭ニ
 罷出、日光御門主様御通懸り御目見、湯島名主とも之旨御披露有之、御禮
 申上、引續同様毎年罷出申、湯島切通町玄桂屋敷之義、古町ニ有、臨時御能
 之節、家持共拜見被仰付、處、外古町名主共、毎年正月三日御城、御禮ニ
 罷出、以得共、何之頃、私義相洩、以哉、罷出不申、
 文政町方書上

門前町○湯島
天滿宮。

右ニ古來百姓地之處、慶長十九年町屋ニ相成、以由、以得共、願濟等之始末、詳
 ニ相知不申、且隣町三組町境ニ屋根付黒門有之、天滿宮惣門ニ有、處、正徳六申

年正月類焼ニ付、其後木戸ニ相成、以得共、今以俚俗ニ黒門、相唱、以、但天滿宮
 門前之町屋故、門前町、相唱、以、由、ニ、
 文政寺社書上

麻布市兵衛町

麻布市兵衛町 慶長十九年後ノ起立ニ係ル如シ、今姑ク茲ニ附録ス。
 麻布市兵衛町

一、當町之義、慶長十九年之頃畑地ニ有、今井村之内ニ有之、以哉、其後臺町、
 唱、以、由、申傳、草創人之儀、當名主市兵衛先祖ニ有、由緒等相知不申、
 〇中

一、舊家

名主 市兵衛

右先祖之儀、巨細ニ相知不申、慶長年中、當町今井臺町、唱、以、節、罷在、以、處、
 郷民之勸めニ任せ、名主役相勤、草分地面所持仕、苗字之儀、黒澤、申、往古
 西上州ニ黒澤八左衛門、申郷士有之、今以同性之者御座、以、由、右家筋之類族
 ニも有之哉、宛々相知不申、當市兵衛迄十代名主役相勤相續仕、正徳年中町御
 奉行御支配ニ相成、其以後町方并御代官所名主役兼帶ニ相勤罷在、先年、
 度、類焼仕、間、古き記録書物等焼失仕、委細之儀、相知不申、
 文政町方書上

〇麻布市兵衛町書上。

寺院起立轉移

寺院ノ起立轉移シタル者若干有リ。

〇文政寺社書上。府内誌。殘編。東京府志料。東京府誌。

市街恢弘時代

寺院起立轉
移事蹟

寺院起立轉移 慶長十九年中起立若クハ轉移シタル寺院、左ノ如シ。

栖岸院 三河ヨリ移リテ麴町ニ起立ス。

栖岸院村高山ト號ス。淨土宗京都知恩院末。慶長十九年起立。開山妙譽。寺地千四百八十坪。
東京府志料

栖岸院町○市内麴町八町目。北ニ在リ。寺地東西一町十九間四尺、南北二十五間四尺、面積三百三十坪七合。淨土宗京都知恩院末派。初メ三河ニ在リ。長福寺ト號ス。慶長中此地ニ移リ、今號ニ改ム。安藤重信開基。僧妙譽開山。

東京府誌

本壽寺 神田北寺町ニ起立ス。

谷中川端
榮源山本壽寺

一、當寺開基本壽院日榮聖人、正保三丙戌年二月廿二日死去。
右ハ、俗名字之儀ハ相知レ不申也。

一、寺起立慶長十九甲寅年。慶安二己丑年迄三十六年之間、神田寺町ニ罷在也。

文政寺社書上

○下
京都本國寺末
榮源山本壽寺

谷中川端

境内玉林寺境内借地四百五坪。

慶長十九甲寅年起立、慶安二己丑年迄三十六年之間、神田寺町ニ罷在也。其後慶安三庚寅年谷中玉林寺境内前書坪數之通借地仕也。

續府内備考

本壽寺 善光寺坂下ニアリ。榮源山ト號ス。京本國寺ノ末ナリ。慶長十九年神

田寺町今ノ須田町ノ邊ヲ云フ。ニ創立。○下 府内誌殘編

無量院 神田ニ起立スト云フ。

京都知恩院末
小石川
淨土宗 藥王山能覺寺無量院

境内五千五百貳拾七坪。内傳通院領地千三百貳拾七坪借地。御朱印寺領貳拾石。

一起立ト慶長十九甲寅年依神君之上意起立被仰付、古記録等明曆三酉年類燒之砌燒失仕、粗記録有之ハ得共、委敷相知不申也。元寺地ト神田、後三宅土佐守殿屋敷ニ相成也。由申傳ニ御座也。
文政寺社書上

蓮乘寺 芝金杉橋邊ニ學堂ヲ創ス。

下總國葛飾郡中山村法華經寺末。谷中妙法寺配下。
光秀山蓮乘寺

三田○中

市街恢弘時代

開闢起立之儀之、慶長十九甲寅年淨蓮と申僧、元來叡山之學徒也、同年關東に下り、下總國正中山法華經寺法宣院之附弟二成、御府内芝金杉町邊に學堂を營、三寶祖師子育鬼子母神等奉安置、日夜法華經讀誦無懈怠、法味備居に。○下

續府内備考

瑠璃光寺

飯倉ニ起立ス。

本寺芝貝塚萬年山青松寺末

禪曹洞宗 飯倉 金龍山瑠璃光寺

一、境内御年貢地 坪數千五百七拾坪。

右御年貢地ニ相違無御座に。

一、開闢起立之儀之、慶長十九甲寅年御座に。

一、開山一峰麟曹和尚遷化、元和九癸亥十一月八日。○下

文政寺社書上

松光寺

西久保ニ起立ス。

京知恩院末

芝貳本榎町 淨土宗 清涼山長昌院松光寺

一、境内千貳百六坪。

内、七百五拾六坪拜領地。四百五拾六坪年貢地。

拜領地 東表口貳拾五間。南奥行參拾間。西裏通貳拾五間。北奥行參拾間。

年貢地 南之方、東に五間貳尺。東之方、南北に三拾間貳尺。北之方、東西に九間五尺。西之方、南北に折廻し參拾貳間八尺。

右當寺之儀之、本西之久保ニおゐて頂本寺と申し、慶長十九甲寅年起立之處、

○下

文政寺社書上

大法寺

麻布一本松ニ起立ス。起立年次ヲ詳ニセズ。開山日利慶長十九年ヲ以

テ寂スレバ、姑ク茲ニ記ス。

房州長狹郡小湊小湊山誕生寺末

麻布一本松 日蓮宗 榮久山大法寺

一、御年貢地境内貳百拾五坪。

但シ、開闢起立之譯引地代地等之儀、相知を不申に。

一、開山慈眼院日利聖人 慶長十九甲寅年十一月十三日遷化。

文政寺社書上

報土寺

赤坂三分坂ニ起立ス。

武州豐島郡江戸赤坂三分坂

京東六條本願寺末 淨土眞宗 笑柳山報土寺

一、境内三百四拾坪餘。

内、百八坪拜領地。内、貳百三拾坪餘借地。

但シ拜領地借地書出之坪數ニるを三百四拾坪ニ不足ニ御座に得共、古來

右之通り書上來りハ義ニ御座也。

右地所遷替之儀也、慶長十九年赤坂大澤町百性地ニ起立有之也。〇下

——文政寺社書上

妙行寺

妙行寺 四谷南寺町ニ起立ス。

甲州身延山久遠寺末
武州豐島郡四ツ谷南寺町
稻荷山妙行寺〇中

一、開山ハ本立院日純ニ御座也、慶長年中迄ハ菴室ニ御座也、日純之代ニ資助有之、慶長十九年一寺建立相成也。〇中

——文政寺社書上

保善寺

保善寺 牛込通寺町ニ起立ス。年代明カナラズ。開山門龍慶長十九年遷化スルヲ以テ姑ク附記ス。

本寺甲州山梨郡小佐平村東林院末
牛込通寺町
禪曹洞宗 龍峯山保善寺

一、境内拜領地貳千貳百七拾九坪。
右之内九坪、御用地ニ上ル。時代相分り不申也。

同貳百八拾九坪、慶安二丑年ハ盛高院ハ借シ來り申也。

同間口三尺、奥行廿九間、安養寺ハ往古ハ借シ來申也。尤享保年中數度之類燒ニ付其以前之借地證文ハ無御座也。元文三年ハ安養寺代替り之節、借地證

文數通取置申也。

一、開闢起立

右年代之義ハ、享保六丑年二月類燒仕也、節、舊記等燒失仕也ニ付、相分不申也。

一、開山蟠翁門龍大和尚。本寺二代。

右慶長十九年六月八日遷化。

——文政寺社書上

長明寺 牛込原町ニ起立ス。

長明寺

豆州玉澤妙法華經寺末
牛込原町神明宮別當
日蓮宗 神照山長明寺

一、神明宮境内除地百三拾五坪、表間口五間、裏行廿七間。

一、右除地之儀也、元祿五壬申年御代々井九右衛門様伊奈半左衛門様ハ被仰渡也。

一、社往古ヨリ有來御座也、處破滅仕也ニ付、慶長十九甲寅年當所名主長兵衛取立申也。當曆文政十丁亥年迄凡貳百拾六年ニ相成申也。

一、天照皇大神宮御神躰木座像御丈六寸、作人相知不申也。

一、當寺開闢之儀、慶長十九午年神明宮同時ニ當所名主長兵衛開基仕也。右長兵衛義子孫無御座、法名等相知不申也。

——文政寺社書上

市街恢弘時代

覺王寺

覺王寺 深川六間堀ニ起立ス。開山崇順慶長十九年ヲ以テ寂ス。
法號山花藏院覺王寺 龜戸普門院末 本所猿江

境内拜領地四百四拾六坪。御年貢地三百五拾三坪。

當寺儀、元六間堀ニ御座ル處、御用地ニ相成ルニ付、元祿六四年當地ニ替地
被仰付但六間堀ニ花藏院と申。開基相分不申。

開山宗順慶長十九寅年二月廿一日寂。

續府内備考

覺王寺 猿江ニアリ。法號山華藏院ト號ス。中起立ノ年代詳ナラズ。開山ヲ

崇順ト云フ。慶長十九年二月二十一日寂ス。當寺モト六間堀ニアリテ、華藏院

ト稱ヘシカ、後今ノ寺號ヲ唱フ。下

府内誌殘編

光專寺 起立元地ヲ知ラズ。

光專寺

芝増上寺末 麻布龍土六本木 淨土宗 遍照山攝取院光專寺

一、開關起立之儀、元地之儀と相知不申。四代目專譽慶長十九甲寅年住職仕。
署。下 文政寺社書上

〔附記〕 慶長中起立轉移寺社

慶長中ノ轉移ト傳フル寺社ヲ左ニ掲グ。

附記 慶長中起立轉移寺社

三圍神社

三圍神社 慶長中移地ノ説有リ。左ニ附載ス。

三圍稻荷社 村 〇武藏國葛飾郡小梅村。 鎮守ナリ。小梅代地町延命寺持。古ハ田中稻

荷ト號ス。緣起ニ云、當社ハ昔弘法大師ノ勸請ニテ、文中年中近江國三井寺

ノ住侶源慶僧都再興ス。或書ニ、文和元年壬辰ノ起立トアリ。 其由緣ヲ尋ルニ、源慶常ニ傳教

大師ノ刻メル延命地藏ヲ持念セシカ、或夜夢想ノ感ヲ得テ、東國ニ來リ、隅

田川邊牛島ヲ過、林中ニ壤社アリ、偶老農ニ逢テ尋ヌレバ、弘法大師ノ建ル

所ナリ、大師當時ニ於テ自ラ稻荷ノ神體ヲ彫刻セシ時、酒水器ノウチニ忽

然ト梅一粒ヲ感得ス、大師誓テ云、梅ニモシ瑞アラハ有縁ノ地ニ生ヘ我ヲ

待ヘシトテ、虚空ヘ投ケルニ、不思議ヤ此嶋ニ生シテ此所ヲ梅香原ト云、後

ニ大師コ、ニ尋來テ社ヲ築キシニ、時移リテ一燈ヲカカクル人モナク、堂

宇塊トナリ侍リト語リ終リテ去レハ、源慶泪ヲ催シ、梅樹ノ下ニ立ヨリテ、

カクナン、春ハナヲ色マサリナン梅ヶ原、宮戸ニヒラク花ノ玉垣。其夜奇異

ノ告アリテ、翌日衆人ヲ集テ共ニ社壇ヲ堀、一ツノ壺ヲ得タリ。是ヲ開クニ、

神體老翁ノ姿ニテ、白狐ニウチノリ、右ノ手ニ寶珠ヲ持、左ニ稻ヲ荷ヘル像

ナリ。時ニ白狐現シテ、神體ヲ三タヒ圍リテ失セタリ。是ヨリ三圍ト號ス。源

慶スナハチ草堂ヲ作リテ神體ト地藏トヲ假ニ移シ、時ヲ得テ社ヲ造營シ、
精舎ヲ建立シテ延命寺ト名ツク。其餘藥師辨財天太子堂ヲモ造立セリ。然
ニ元龜年中煌火起リテ、社閣林木マテ灰燼トナリ、天正中寺院ヲ社頭ノ
南ニ轉シテ再建シ、其後慶長年中堤ヲ築カル、時、又今ノ地ニ移サレシト
イフ。舊地ハ今荒川中ニ入ト云。源慶文和元年七月二十六日寂ス。

——新編武藏風土記稿

三圍神社 本所區小梅町ニアリ。域内千四百五十坪。倉稻魂命ヲ祀ル。正平
中北朝之ヲ創建スト云。或云、正平中三井寺僧源慶之ヲ再建シ、慶長ノ頃ニ
至ル迄此地ノ南方ニアリ、後今ノ地ニ移スト。

——東京通志

末廣稻荷社

慶長中ノ創建ニ係ルト傳フ。

麻布坂下町の鎮守
神主 中村日向守

末廣稻荷

慶長年中當所草創の鎮守也。神前に柳一もどあり。枝葉さりへ、梢大まひろ
これり。これを扇よなそらへて、世人末廣の木といひならいし、いつとあく
神号のやうにあり。

——再校江戸砂子

末廣稻荷神社 麻布區麻布一本松町ニアリ。域内六十七坪。田心姫命・市杵

永心寺

鳥姫命・瑞津姫命・倉稻魂命・日本武尊ヲ祀ル。慶長中之ヲ創建シ、舊此地ノ東
ニアリ。

——東京通志

永心寺 麴町清水谷ニ起立ス。

四谷南寺町

蟠龍山永心寺

起立之儀、慶長之比、麴町清水谷ニ住居仕ひ處、寛永十一年十二月五日屋鋪
御奉行朝比奈源六殿、駒井次郎左衛門殿御兩人御立合ニ、當境内拜領仕
ひ。

——續府内備考

本染寺

本染寺 雜司ヶ谷ニ起立ス。

雜司ヶ谷本染寺門前

——文政町方書上

一、慶長之頃本染寺建立仕。〇下

本染寺 同宗〇法華宗。京都妙滿寺末、東纏山下號ス。本尊三寶祖師。開山受證院

日安、慶長十六年六月寂ス。〇下 ——新編武藏風土記稿

保安寺

保安寺 西久保ニ起立ス。

本寺飯倉町溜璃光寺末
高輪臺町

禪曹洞宗 保安寺

一、境内拜領地

七百拾四坪。

市街、保、弘時代

墓所並畑借り添御年貢地三百八拾八坪。慶長之頃西久保ニ御座ル處。略。下

——文政寺社書上

福成寺 神田ニ起立ス。

福成寺

池之端仲町

慶長年中武州豊島郡江戸神田ニ住居相定申ル。略。下——續府内備考

道教寺

道教寺 麴町ニ起立スト云フ。

光闡山道教寺

赤坂寺町

起立之儀、慶長之末とも、元和之頃とも申傳ル。開基權律師釋祐念、糝町邊神保小路ニ具塚ト及承リト寺地草創仕ル處、御用地ニ被召上、寛永十二年二月廿八日爲替地、今之地所拜領仕ル。

——續府内備考

龍岩寺

龍岩寺 青山原宿ニ起立ス。

武州八王子山田卒山廣園寺末
禪宗臨濟派
古碧山龍岩寺

一、境内伊賀領除地千四百坪餘。

一、開闢慶長中トモ申傳ル得共、曉ト相知不申ル。

一、開山喚室和尚 元和八戌年十一月廿四日遷化。出生事跡相知不申ル。

——文政寺社書上

同書載スル所同寺元祿十一年ノ鐘銘ニハ、武州豊島郡青山縣原宿村有一古刹、山扁古碧、寺号龍岩、東都城外西距一里餘。東照大神君未入都城之先、已此寺封疆若干、官免稅租。不知誰某之草創、里民以爲墳寺。數罹鬱收之災、失其傳記。老之口碑所載、大概如斯矣。慶長年間有喚室應公者、主此寺、纔守一字茅廬、ト見ユ。

慶長市街拓開

慶長市街
拓開

慶長中市街ノ拓開セラレタル者少ナカラズ。年月明カナラサルヲ以テ姑ク左ニ集録ス。

三田功運寺門前 慶長中櫻田ニ起立ス。

三田功
運寺門
前

三田功運寺門前

一、當町起立之儀、功運寺開山慶存和尚、御入國之砌、三州方御供ニ有罷越、

慶長年中櫻田ニ有、家數四拾五軒拜領被仰付ル所、寛永十七申年御用地ニ

被召上、三田聖坂ニ替地被下置ル。——文政町方書上○三田功運寺門前書上。

上富坂町 慶長中餌差五十九人ノ拜領地ト爲ル。

上富坂町

上富坂
町

市街恢弘時代

町方起立之儀と、小石川村之内にあり、已前委細之儀と相知不申。慶長年中御役名不知加藤伊織組御餌差衆五拾九人の拜領地に相成、年代不知町家作仕、其頃何方御支配に哉相知不申。元祿六酉年町方御支配に相成、由に御座り。

一、町銘起立之儀、慶長年中御餌差衆拜領あり、町家作仕に已來、上餌差町と相唱ひ處、元祿六酉年向後上富坂と改相唱可申旨被仰渡り。以來上富坂町と相唱來、當時御留守居同心御鷹匠同心并御坊主衆其外小普請衆拜領町屋敷御座り。○中

一、町屋敷拜領人名前左之通、○節、廿二。

- 一、百六拾八坪餘 右、慶長年中拜領。
- 一、百六拾壹坪餘 右、慶長年中拜領。
- 一、百六拾六坪餘 右、同年黑河新十郎拜領之處、文政九戌年同人拜領。
- 一、百貳拾五坪餘 右、慶長年中拜領。
- 一、百四拾壹坪餘 右、同斷。
- 一、百四拾四坪餘 右、同斷。

- 小普請 清水忠左衛門
- 小普請 飯田新次郎
- 西丸表坊主 飯田圓賀
- 御留守同心 内田勝太郎
- 小普請 内田勝太郎
- 小普請 戸山彦次郎
- 御目付支配無役 百相忠二郎

西丸御裏御門番同心 小泉定八郎

- 一、百三拾六坪餘 右、同斷。
- 一、百三拾七坪 右、同斷。
- 一、百貳拾貳坪餘 右、同年海方新助拜領之處、文政九戌年休彌拜領。
- 一、四百五拾坪餘 同年中拜領。
- 一、四百三拾七坪餘 右、同斷。
- 一、五拾坪餘 右、同斷。
- 一、七拾坪 右、同斷。
- 一、五拾八坪餘 慶長年中拜領。
- 一、八拾八坪餘 右、同斷。
- 一、六拾八坪餘 右、同斷。
- 一、六拾四坪餘 右、同斷。
- 一、八拾九坪餘 右、同斷。
- 一、五拾壹坪餘 慶長年中拜領。
- 一、四拾八坪 右、同斷。
- 一、四拾五坪餘 右、同斷。

- 御鷹匠同心 近藤彌次衛門
- 御留守居同心 森八郎左衛門
- 御數寄屋坊主 白井休彌
- 御石火矢師 渡邊乘覺
- 同 渡邊茂右衛門
- 御鷹匠同心 内田金五郎
- 吹上御庭方 岩田新左衛門
- 小普請 恩田彌平次
- 小普請 西村銀之助
- 御鷹匠同心 渡邊重郎兵衛
- 吹上御庭方 川勝爲之助
- 學問所勤番 溝口三郎兵衛
- 御鷹匠同心 立野左衛門
- 小普請 百相定八
- 右 同人

一、六拾坪餘
慶長年中拜領。

定火消同心
柳下清兵衛

一、町方起立之儀之、上富坂ニ申上以通ニ御座以。○中

御普請

大塚庄二郎

一、百四拾八坪餘
慶長年中拜領。

御留守居同心

松村助三郎

一、百四拾九坪餘
右同斷。

御鷹匠同心

荒井彦左衛門

一、百四拾五坪餘
右慶長年中拜領。

川船役

山田伊助

一、百五拾三坪餘
右同斷。

小普請

志村甚右衛門

一、百四拾四坪餘
右慶長年中宮田傳五郎拜領之處、其後岩太郎拜領。

御普請方同心

星野岩太郎

一、百八拾壹坪餘
同年中拜領。

小普請

増山新三郎

下富坂町

町方起立之儀之、上富坂町ニ申上以通ニ御座以。○下

御留守居同心

大畑斧次郎

一、百八拾貳坪餘
右慶長年中拜領。

一、百五拾九坪餘
右同斷。

御持筒同心

小出啓五郎

一、百八拾七坪餘
右同斷。

二之丸御留守居同心

石島此藏

一、百七拾壹坪餘
右同斷。

御鷹匠同心

原又左衛門

一、百九拾七坪餘
同年田村源助拜領、其後享保前相對替。

御鷹匠同心

坪井喜太郎

一、百八拾五坪餘
同年拜領。

御鷹匠同心

富田權左衛門

一、百七拾五坪餘
右同斷。

御鷹匠同心

鈴木忠三郎

一、百七拾三坪餘
右同斷。

小普請

古山勝五郎

一、百七拾五坪餘
右同斷。

御普請役

高崎宇太夫

一、百六拾七坪餘
右同斷。

中之口番

水野善左衛門

一、百七拾五坪餘
右同斷。

御鷹匠同心

田丸新七

一、百七拾壹坪餘
右同斷。

大坂御燔燔番

和田幸右衛門

一、百七拾五坪餘
右同斷。

吹上御庭方

荒瀨萬作

一、百坪餘
右同斷。

小普請

高木八之助

一、六拾四坪餘
右同斷。

御鐵炮玉藥同心

山田金左衛門

一、百九坪餘
右同斷。

御納戸同心

瀨戸幸助

- 一、貳百九拾貳坪餘慶長年中拜領
- 一、百五拾六坪餘右同斷
- 一、百八拾坪右同斷

小普請
岡田兵左衛門
御廣敷伊賀者
岡田新兵衛
御鷹匠同心
小川八十郎

府内備考

貳本榎
覺真寺
門前

貳本榎覺真寺門前 慶長中西久保ニ起立ス。

貳本榎覺真寺門前

一、町方起立之儀、慶長年中、西久保ニ覺真寺罷在ハ處、万治元戌年御用地ニ相成、當所ハ替地被仰付_{○下}。 文政町方書上○貳本榎覺真寺門前書上。

本所壹
ツ目

本所壹ツ目 慶長中數寄屋坊主吉川正益町屋敷ヲ給賜セラルト傳フ。
河斷(○下谷御數寄屋町西側北角)六軒目
御數寄屋坊主
吉川正益

右ハ慶長年中本所壹ツ目町屋敷拜領仕_ハ處、御用地ニ相成、天和三亥年八月中爲替地下谷御數寄屋町拜領仕_ハ。 文政町方書上○下谷御數寄屋町書上。

龍泉寺
前

龍泉寺前 慶長元和頃ヨリ修驗大徳院之ニ住ス。

一、拙院元祖ハ徳實院ト申_ハ。生國常州之修驗ニテ、江戸下谷龍泉寺前住居
京都醍醐三寶院御門主御末派
江戸青山御役所鳳閣寺配下
當山修驗 大徳院

仕_ハ慶長より元和年中住世、万治元戌年六月廿日命終仕_ハ。○下

文政町方書上

麴町十
一丁目

麴町十一丁目 左ノ如ク傳フ、以テ當年ノ狀況ヲ推ス可シ。

一、舊家

當町(○麴町十一丁目)家主
伊兵衛

右伊兵衛儀之、四谷地名起立舊家四軒之内茶屋ト唱_ハ。之_ハノ二、先祖ト酒井才兵衛ト唱、三州渥美郡吉田在出生之_ハ。之_ハノ有之、慶長年中御當地ハ罷出、於當所借地致_ハ。砌_ハ。此邊未家居モほむらニ有之_ハ。ゆる、手廣ニ住居相構へ、茶屋差出シ、往來旅人之休息所ト_ハ。末_ハ。て、行人ニ茶を進め、聊之業ハニ_ハ。打過_ハ。ハ。處、未タ其頃家名モ無之、唯茶屋ト申唱、追々在方通行之_ハ。之_ハ。の馴染モ自然ト入魂_ハ。ハ。し、終ニ人馬之旅泊を設け、玉川漁夫にも因_ハ。ト厚く、日毎ニ獵まる鮎魚を送り、其外前裁陸付諸品家前ニお_ハ。る_ハ。て賣捌、自然ト問屋之業ハト相成、次第繁昌仕、後チ_ハ。茶店も不仕、且追々近邊ニ茶店も多く相成、茶屋之名目紛敷、可然家名ニ相改申度、素_ハ。家業_ハ。山_ハ。陸付是を寶_ハ。ト暮_ハ。ハ。故、山寶屋ト申_ハ。然ル_ハ。ニ人々山む_ハ。屋_ハ。文字誤_ハ。ハ。得共、在方野人之意ニまかせ、終ニ家名ト致_ハ。ハ。由、然ル_ハ。處、寛永年中、此邊御成之節、折柄水無月上旬ニ_ハ。鮎

魚數多參り居、見せ先ニ並べ置ひ處、乍恐被爲遊上覽、御膳所御用ニ付、即刻奉獻上ひ處、則才兵衛儀御膳所に被爲召出、何と申之由御尋ニ付、山寶屋才兵衛と申上ひ得と、鮎魚澤山ニ鬻キひ間、以來鮎屋も可唱旨乍恐奉蒙仰、御代錢被下置ひ旨ニ付、献上之由申上ひ得共、其儀と不相成由ニ有、無是非奉存、然之鳥目百文奉頂戴度由申上ひ處、鮎魚壹疋ニ付百文宛之積を以御代錢被下置ひ趣被仰渡、依之車を以御代錢頂戴仕ひ由、其段先祖才兵衛自筆ニ有書留等も所持仕ひ處、文化八末年二月十一日類焼之砌焼失仕ひ。且又往古之才兵衛住居之地所、四谷之内ニ御座ひ處、寛永年中御堀出來之砌、地所操下ケニ相成ひ有、住居之場所、當町之内ニ相成ひ哉ニ御座ひ。右才兵衛義、七十餘歳ニ有承應貳亥年十月五日相果、三代目才兵衛義、天和三亥年十二月二日相果、同人實子三代目才兵衛義、元祿十六末年二月廿五日相果、悴才兵衛、四代目相續仕ひ處、寶永三戌年十一月、町御奉行坪内能登守様御番所に被召出、於四谷ニ青物鮎魚問屋之由緒御吟味ニ付、委細舊記を以御答申上ひ處、御糺相濟ひ上、以來陸付水菓子前裁問屋と名目相唱可申旨、被仰渡ひニ付、今以右様申唱、當所ニおゐる、右品問屋仲間起立人と申傳

ひ。尤鮎魚之儀も、陸付荷ニ有參りひ間、是又同様商賣仕ひ。四代目才兵衛正徳五末年八月十六日病死仕ひ。尤先祖は是迄四代日蓮宗ニ有、寺は青山妙圓寺旦那ニ有、代々墓酒井才兵衛と相記、酸漿之紋彫付、今以同寺ニ有之ひ。右才兵衛實子無之、勢州山田出生ニ有伊兵衛と申者養子ニ致、五代目相續、鮎屋伊兵衛と相唱、同様商賣仕、此代は禪宗ニ相成、牛込原町松雲寺旦那ニ御座ひ。當伊兵衛拾代目相續、則當時同渡世仕罷在ひ。先祖才兵衛は都府拾代、年數貳百貳拾餘年、當所ニ罷在、今以鮎屋と名乗、商賣仕罷在ひ。尤古キ書記物等無御座ひ。

文政町方書上○麴町十一町目書上。

麻布臺雲寺門前 傳フル所左ノ如シ。

當町○麻布臺雲寺門前名主 傳 四 郎

右先祖之義、大久保久左衛門ト申、大坂を慶長年中當所に罷越、住居仕ひ様申傳、後年門前名主役相勤、何之頃より氏を小川ト改ひ哉、相知不申、延享二巳年十二月中町御支配相成、當傳四郎迄十三代相續仕、名主役相勤罷在、尤由緒書物等、先年類焼之砌焼失仕、申傳而已ニ有、其餘之相知不申ひ。

文政町方書上○麻布臺雲寺門前書上。

麻布南日下窪町

傳フル所左ノ如シ。

舊家

當町(○麻布南日下窪町)住居。名主 平十郎

右先祖之儀委細相知レ不申、上杉家浪人之由、氏を源見申、慶長之頃麻布村ニ罷在、先祖彦兵衛申、名主役相勤由、其後彦兵衛ハ三代目平十郎代ニ至リ、寛文中之頃、上杉家歸參も可相成、處數年民家ニ住居、武家之仕にを恥、源見之氏を改、母方之氏を以宮崎平十郎名乗、上杉家ハ被召由申傳、例年正月元日年始之節御盃御流レ頂戴仕、其後又々母方之氏を改、父方之氏を以源見を名乗、彦兵衛申、名主役相勤罷在、正徳三巳年中町方御支配ニ相成、町方御領所名主役兼相勤、當平十郎迄十二代相續仕、先年類焼之節、書物等焼失仕、其餘之一向相知レ不申、上杉家年頭之儀、安永年中迄罷成、得共、其後病氣ニ罷成、暫中絶罷在。

文政町方書上○麻布南日下窪町書上。

麻布永坂町

傳フル所左ノ如シ

一、舊家

當町(○麻布永坂町)名主 次郎左衛門

右先祖之儀、委細相知不申、氏ヲ安能申、唱、往古ハ當所麻布村ニ罷在、先祖

次郎左衛門儀、慶長之頃ハ名主役相勤、草創之屋敷ニ住居仕、正徳三巳年中町方御支配ニ相成、已後、町方御料所名主役兼相勤、當次郎左衛門迄十二代相續仕、尤先年度々類焼之砌、書物等焼失仕、ニ付、其餘之相知不申。

文政町方書上○麻布永坂町書上。

將軍江戸城還歸事蹟

廿年乙卯

○慶長○七月十三日改元、元和元年(紀元二二七五年)

二月十四日辛卯

○辛卯、三將軍秀忠

川○德

江戸城ニ歸ル。大坂役講和成ルヲ以テ也。

○寒松臺、台徳院殿御實紀。

將軍江戸城還歸事蹟

將軍江戸城還歸

諸書之ヲ記セバ、今ハ單ニ台徳院殿御實紀外、一種ヲ抄録ス。

十九日○慶長十九年十二月十九日城○大坂城。より織田有樂入道、大野修理亮治長の使來り、常高院尼即刻出城のよしを告る。よて本多正純、後藤庄三郎光次此旨を聞え上れば、○徳川正純をして阿茶の局を伴ひ、京極ハ陣所に至り、常高院尼に對面せしめらる。秀頼○豊母子の旨を述べ、本城を殘し、二三の郭の堀を埋め、有樂入道、大野治長ハ子弟を人質に參らせ、新入の處士等一統、今度の罪をゆるされ、その上兩御所自今以後御疏意あるまじとの盟書をたまはらんとの旨なりとぞ。

廿日○慶長十九年十二月十九日城中より淀殿の使とて、常高院尼ニ位の局饗場の局三人、茶

市街恢弘時代

磨山御陣に参り、大御所○徳川家康に時服三襲、緞子三十卷進せられ、いよく御和談ことなくおよしみをむすばれんよし聞え進らせらる。

廿二日○慶長十九年十二月東西御和議既にさゝのひければ、今日双方御盟書を取かはせ給ふとて、城中よりは木村長門守重成郡主馬首良列茶磨山御陣に参り、大御所の御盟書を拜受して歸る。城中へは、茶磨山よりの御使板倉内膳正重昌、岡山よりの御使阿部備中守正次をつかさされ、秀頼公盟書を請取て歸り参る。

十九日○元和元年正月申刻、御所○徳川秀忠岡山御營より伏見の城へ還御なる。

十六日○元和元年二月御所江戸城にかへらせ給ふ。猿樂幸若舞あり。駿府記。○一説十四日とす。元寛日記。

台徳院殿御實紀

柳營將軍去載甲寅○慶長十九年十月二十三日、率百萬軍赴攝州大坂、暴師者久已獲勝利、歸武之金城。實慶長二十年二月十四日也。其翌春皇賦上瑞、寒花舞零亂。聊詠一絶賀之。

官柳青々十萬營、凱歌已奏入金城。膝神似待公來暮、今日千門圭璧明。

寒松藁

傳通院印書

給付

天徳寺印書

給付

傳通院印書

給付

天徳寺印書

給付

傳通院印書

給付

天徳寺印書

給付

傳通院印書

給付

天徳寺印書

給付

傳通院印書

給付

天徳寺印書

給付

傳通院印書

給付

天徳寺印書

給付

三月十日丙辰○慶長廿年紀元二二七小石川傳通院○市内小石川區ニ寺領ノ印書ヲ給ス。○慶長廿年紀元二二七是頃、西久保○市内芝區天徳寺亦印書ヲ與ヘラル。○文政寺社書上。

傳通院印書給付 家康傳通院ニ寺領三百石ヲ寄セタルコトハ、上記ノ如シ。慶長廿年三月十日ニ至リ朱印ヲ給ス。慶祿記載スル所慶安二年九月四日ノ印書ニ、左ノ如ク見ユ。

當院領武藏國豊島郡小石川郷之内三百石と、所載元和元年三月十日先判之舊領也。此外全郡赤羽村之内貳百八拾四石餘、駒込村之内拾五石九斗餘、於此兩村三百石と、依爲龜松丸葬所、新令寄附之院、都合六百石事、全收納永不可有相違者、佛法燈明香花等、無怠慢可守法事勤行之狀、如件。

慶安二年九月四日 御朱印

傳通院へ

天徳寺印書給付 文政寺社書上ニ據ル。

淨土宗 光明山和合院天徳寺○中

寺領之義ハ、其頃武州川越之城主遠山大道寺常若と申人、右本尊之靈驗を感じ、爲佛供料、永樂三貫文之地、汝寄附有之候。然處此等之趣、神君様達上聞、本尊

市街恢弘時代

御歸依被遊、元和元乙卯年舊領永樂三貫文之地、茂五拾石之御朱印ニ御改、且下馬札迄被下置_レ處、元和三巳年正月十四日夜急火之節、諸堂燒失之砌、本尊并勅額紫衣上綸旨御朱印下馬札悉く燒失、然ニ本尊阿彌陀如來_ニ、一鉢とかり舍利の如く_ニして火炭_ニ中に殘、其長ケ貳寸、今内佛_ニ安置、朝暮御供養申候。本尊之由來當山之記録ニ委細。今畧。右燒失之趣、大樹秀忠公之達、台聞、元和九亥年三月十日再五拾石之賜、御朱印、其御文言寫左之通、

寺領武藏國豐島郡中藤郷之内五拾石之事、先判於當寺令燒失云々、因茲重_テ遣朱印_□彌任先規之旨、全寺納不可有相違、并可爲守護使不入地之狀如件。

元和九年三月十日 御朱印

天德寺

文政寺社書上

- 一、町内西久保天德寺領之義_ト、元和元年_ノ五拾石御朱印地_ニ相渡_ル高内_ニ有_ル、正德三年町内一鉢町奉行御支配_ニ相成申_ル。○麻布一本松町書上。
- 一、町内天德寺領之義_ト、元和元年_ノ五拾石御朱印地_ニ相渡_ル高内_ニ有_ル、正德三巳年町内一同町奉行所御支配_ニ相成申_ル。○麻布三軒家町書上。

麻布坂下町

○上畧。西久保天德寺領并同所大養寺領入合_ニ有_ル之_レ義_ハ、末_ニ申上_ル。○中畧。

- 一、西久保天德寺領之義_ハ、元和元年_ノ五拾石御朱印地_ニ相渡_ル、右高内_ニ有_ル正德三巳年町内一同町奉行所御支配_ニ相成申候。○麻布坂下町書上。

- 一、西久保淨土宗天德寺領之義_ト、元和元年_ノ五拾石御朱印地_ニ相渡_ル、高内_ニ有_ル、御水帳屋鋪反別貳反三畝七步有_ル之、御年貢之義_ト、天德寺_ニ差出申_ル。尤正德三巳年町内一同町奉行所御支配_ニ相成申_ル。○麻布田島町書上。

文政町方書上

四月十日丙戌 ○慶長廿年(紀元二二七五年)○丙戌三正綜覽。大坂再役起リ、將軍秀忠_{○德}江

戸ヲ發ス。○台德院殿御實紀。

將軍江戸發 豐臣秀賴再舉ノ報有_ル。將軍秀忠元和元年四月十日大坂再征ノ

途ニ上_ル。家康ハ四日駿府ヲ進發シタリ。左ニ台德院殿御實紀ヲ抄ス。

六日_{○元和元年四月。}江戸より近日御出馬あるへきにより、先隊の諸大名今日府を發して出軍す。その一番は酒井左衛門尉家次、その所屬は松平甲斐守忠良、山

將軍江戸發

事蹟

田豊前守一唯小笠原若狹守政信水谷伊勢守勝隆仙石兵部少輔忠政同大和守久隆相馬大膳亮義胤二番本多出雲守忠朝その所屬は眞田河内守信吉秋田城介實季淺野采女正長重松平石見守康安六郷兵庫頭政乘植村主膳正康明須賀攝津守勝政一色宮内義直三番榊原遠江守康勝その所屬は松平丹波守康長小笠原兵部大輔秀政諏訪出雲守忠恒保科肥後守正光成田左衛門尉長忠北條出羽守氏重丹羽五郎左衛門長重藤田能登守信吉四番は土井大炊頭利勝其所屬は堀美作守親良佐久間備前守安政同大膳亮安次谷大學頭衛友北條久太郎氏和由良信濃守貞繁溝口伊豆守善勝五番は酒井雅樂頭忠世その所屬は牧野駿河守忠成鳥居士佐守成次新庄新三郎直好杉原伯耆守長房細川玄蕃頭興元土方掃部頭雄重稻垣平右衛門重綱脇坂中務少輔安治この輩行程を倍し早く上洛して御着陣を待へしと令せらる。また驛々に令を傳ふへきために使番近藤勘右衛門用政をつかはさる。また大御所には、けふ中泉につかせ給ひ美濃尾張三河伊勢等の諸軍早く伏見鳥羽邊へ進發すへしと本多上野介正純もて令せらる。また江戸より中泉御旅館へ板倉周防守重宗御使し御旅中近侍せしめらる。駿河記。村越。覺書。○中畧。九日大御所岡崎へ着御あり。

松平陸奥守政宗けふ江戸を出たつ。駿河記。貞享書上。十日江戸城御出馬あり御留守は竹千代君并國松君を置かせ給ふ。松平下野守忠郷鳥居左京亮忠政與平大膳大夫家昌内藤左馬助政長酒井河内守重正福島左衛門大夫正則平野遠江守長泰戸澤左京亮政盛等是にまがふ。町奉行は米津勘兵衛田盛これをつとむ。諏訪因幡守頼水は甲府を勤番せしめらる。その外すべて去年留後のことし。御供の老臣本多佐渡守正信御旗奉行三枝土佐守昌吉安藤次右衛門正次島田治兵衛重次屋代越中守勝永鎗奉行近藤平右衛門元成伊東馬之允政世多門縫殿助信清投鞘奉行室賀源七郎滿俊永田善左衛門重和。大番頭阿部備中守正次高木主水正正次松平丹後守重忠書院番頭青山伯耆守忠俊水野隼人正忠清松平越中守定綱板倉周防守重宗。小姓組番頭水野監物忠元井上主計頭正就成瀬豊後守正武。元寬日記。此三人に十人ならびよ歩行頭を兼る。永井信濃守尙政。使番鶴殿石見守氏長牟禮郷右衛門勝成今村彦兵衛重長。中川半左衛門忠勝。元寬日記。此人なし。久貝忠左衛門正俊。元寬日記。忠三郎とす。小澤瀨兵衛忠重。元寬日記。源兵衛。山岡五郎作景長阿部四郎五郎正之兼松源兵衛正成。中山勘解由照守。村瀨左馬助重治。近藤勘右衛門用政。山田十大夫重

利青山石見守清長(是祖父江法齋が事)石川八左衛門政次溝口外記政一渡邊半四郎宗綱川口長三郎近次朝比奈源六泰勝高木九兵衛正次服部與十郎政信三宅半七郎重勝石河三右衛門勝政太田善大夫吉正目付は四郎五郎正之五郎作景長九兵衛正次永井彌右衛門白元木村源太郎元正加藤伊織則勝持弓頭は内藤右衛門正重持筒頭は青山善四郎重長大組は内藤若狹守清次青山伯耆守忠俊先手弓頭久永源兵衛重勝倉橋内匠助政勝鐵炮頭は加藤喜助正重森川金右衛門氏信細井金兵衛勝久服部中保正駒木根右近利政歩行頭は植村志摩守家政阿部善七郎忠吉内藤主税助信廣松平豊後守勝政(元寛日記は松平内膳重則)朝比奈彌三郎泰重松平縫殿助眞次諸道具奉行伊東長兵衛弘祐神谷與七郎清正山角又兵衛正勝小野次郎右衛門忠明荒川又六郎忠吉石川市左衛門利賢秋山平左衛門昌秀青木五左衛門高瀬幕奉行朝比奈彦右衛門眞直内藤平左衛門某宿割役は淺井六之助道多五味金七某柴山九右衛門吉次須田次郎太郎廣庄市川茂左衛門滿友青木小右衛門正定高田小次郎直政藤川庄次郎重勝船奉行は九鬼長門守守隆向井兵庫頭正綱小濱久太郎光隆向井五郎八正俊等なり今夜は神奈川よこまらせたまふ。

震災

六月朔日丙子○慶長廿年(紀元二二七五年)。江戸強震、家屋壊破シ、死傷者ヲ出ス。
○變災 篇參照。

震災事蹟

震災 變災篇ニ載ス。

元和元年六月朔日江戸表大地震、舍屋倒レ、死傷者多シ。——慶長日記

藤堂氏賜邸

十五日庚寅○慶長廿年(紀元二二七五年)六月。○庚寅三正綜覽。是頃阿濃津○伊勢國。城主藤堂高虎

藤堂氏賜邸事蹟

○和泉守。二邸地ヲ與フ。○大日本古文书。

藤堂氏賜邸 慶長廿年六月頃藤堂高虎邸地ヲ賜ヒタル者ト見エ、大日本古文书收高虎伊達政宗ニ與ヘタル書ニ左ノ如ク有リ。

(端裏内封ウワ書) 松奥州様

藤 い つ ら

返々、今日の御きけんよく御座い。以上。

先刻の御狀忝存い。早々御報可申上處ニ、御参たい御とも仕、只今やとへまかり歸候。將又明日りてうニ、ふしとへ御出可有之旨、御尤候。次いゑやしき(拜)いさう仕候。いよ／＼すきの上すニ成可申候、おあしく候。恐惶謹言。

(元和元年) 六月十五日

高 虎(花押)

此時受領シタルハ何レノ邸ナルヤヲ知ラズ。藤堂家舊記ニ、向柳原屋敷ハ下谷

市街恢弘時代

御屋敷ト稱シ、慶長十年上屋敷受領ト同時ナリシカ不明ナレドモ、明曆三年十一月柳原御邸へ御移トアレバ、當時上屋敷トナリタルカト見ユル向柳原邸乎、久居藩藤堂家舊記、始祖高通公御分知前宗家ノ中屋敷ナリシ向柳原邸御譲受相成リト傳フル向柳原中屋敷乎、將タ藤堂家舊記、下谷二長町中屋敷受領年月不明ト記ス下谷窪町中屋敷乎、抑巢鴨下屋敷乎、今明カナラサル也。

附記
藤堂新七
郎住宅

〔附記〕藤堂新七郎住宅

元和元年藤堂高虎嚮ニ賜フ所ノ巢鴨二邸ノ一ヲ藤堂新七郎ニ與フ。

元和元年神君○徳川家康高虎君○藤堂御拜領之巢鴨二居之内、一居藤堂新七郎高虎君○賜之と云々。

累世紀事

元和元年乙卯○紀元二七〇五年八月四日戊申○戊申、三正綜覽將軍秀忠○徳川大坂

役ヲ了ヘテ江戸城ニ還歸ス。○台徳院殿御實紀

將軍江戸還歸 慶長廿年五月七日大坂城陥り、八日豊臣秀頼自殺シ、大坂夏役

了ル。元和元年七月十九日將軍秀忠伏見ヲ發シ、八月四日江戸ニ歸還ス。家康ハ是日二條城ヲ發シ、廿三日駿府城ニ歸ル。

五月七日○元和元年其頃○未城中坂大庖所より火おこる。是は庖人佐々孫助

將軍江戸還
歸事蹟

將軍江戸還
歸事蹟

一説、大角與右衛門。反忠して火を放ちしなり。其火盛にもえ立、千疊敷へも火かゝれば、七組の隊長郡主馬首良列真野豊後守助宗、中島式部少輔氏種堀田圖書助正高野々村伊豫守吉安、其外渡邊藏助糺、其母正榮尼も自殺す。速水甲斐守守之は大野治長と共に秀頼母子を守護し、山里の土庫に火をさくる。大野主馬治房、仙石豊前入道宗也をはじめ、狭間をくゞり逃失る者、天満長良、京橋邊、人なだれをなして、數もかぎらず、たまゞ残る者ともは、或は自殺し、或は猛火に焼死す。すべて今日の戦、巳の刻にはじまり、未刻に終りしに、寄手討とる首一万四千五百三十餘級、伊東右馬允政勝、永田善右衛門重利して監せしめらる。

○中八日○中御所より安藤對馬守重信御使して帶曲輪にこもる所、秀頼母子并扈從の男女悉く自殺を命ぜられしよし、茶臼山御營へ告られ、午刻井伊掃部頭直孝を以て秀頼母子以下自殺すべしと仰遣はさる。此日帶曲輪にて、從一位前右大臣秀頼二十歳、生母淺井氏淀殿、大野修理亮治良、其子信濃守治、徳速水甲斐守守之、其子傳吉一説には、來九十三歳、津川左近竹田永翁堀對馬守成田左吉、高橋半三郎十五歳、同十三郎十三歳、埴原八藏、同三十郎、寺尾庄右衛門、小室茂兵衛、土佐庄

市街恢弘時代